

The background of the cover is a solid mustard yellow. In the center is a large, dark red silhouette of a person wearing a wide-brimmed hat and a long coat, standing with their back to the viewer. To the left and right of the silhouette are line drawings in a sketchy style. On the left, there are several stacks of books and papers. On the right, there is a desk with a pen holder containing several pens, and a swivel office chair is partially visible in the foreground.

# 日常茶飯事

## 山本夏彦



P9-CYA-615

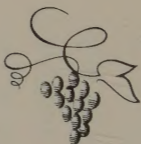


新潮文庫

新潮文庫

# 日常茶飯事

山本夏彦著



---

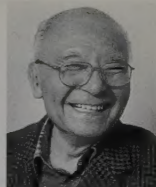
新潮社版

7247

## 山本夏彦

Yamamoto Natsuhiko

(1915—2002)



1915(大正4)年、東京下谷根岸生れ。詩人・山本露葉の三男。少年期に渡仏後、'39(昭和14)年24歳のとき「中央公論」に「年を歴た鰐の話」(L.ショボー原作)を発表する。'55年雑誌「室内」を創刊。'84年に菊池寛賞を受賞。'90(平成2)年に『無想庵物語』で読売文学賞を受賞した。「室内」に「日常茶飯事」、「週刊新潮」に「夏彦の写真コラム」、「文藝春秋」で「愚図の大きいそがし」、「諸君！」で「笑わぬでもなし」を連載した。著書に『私の岩波物語』『世間知らずの高枕』『「社交界」たいがい』『寄せては返す波の音』『オーイどこ行くの』『一寸さきはヤミがいい』など。2002年、胃ガンの転移により87歳で逝去。死の直前までコラムを書き続けた。

カバー装幀・装画 唐仁原教久  
デザイン 野田あい  
(H・B・C)

目次



大辻司郎……………	一八	無病息災……………	一八四
室 内……………	二三	新聞週間……………	一九三
わが女性崇拜……………	二六	自ろう車……………	二〇一
君子多忙……………	二六	作り話……………	二〇九
日記のすすめ……………	二四	本 屋……………	二二七
鴛 鴦……………	二五	スピードきちがい……………	二三五
旅行者……………	二六	つむじ曲り……………	二三三
試験問題……………	二六	洋 行……………	二四〇
就任演説……………	二六	ニールック……………	二四七

あとがき

二五七

解説 鹿 島 茂

長　　持	八
インテリ	二
おむすび	五
神　　妙	三
義乳時代	四
終のすみか	三
タレント	四
アパート山月房	四
レーンコート	四
落　　第	四
「木工界」由来	五
内　と　外	五

兆民先生	三
客	七
契　　約	七
ばくばく	七
御　無　用	七
あんぽんたん	八
北海道紀行	八
こ　の　国	九
迎　　合	九
秋　刀　魚	一〇
百　年　目	一〇
夢で女に	一一





誰しも手習いのはじめには、師匠に「懸腕直筆<sup>けんわんちよくひつ</sup>」ということをやかましく言われる。文字が萎縮<sup>いしゆく</sup>して躍動しないから、肘<sup>ひじ</sup>をついて筆は使つてはならない、肘を宙に浮かして書け、というほどの教えである。それに従つて、文机を前にした往時の婦人は、左手に巻紙、右手を宙に遊ばせて、さらさらと筆を動かした。書き終つた部分は机上にやがて膝<sup>ひざ</sup>にたれた。文机の高さは一尺そこそこ、わずかに膝をいれるにたりるだけしかなかった。これに西洋紙をのべて鉛筆で書けば、桐の表面にきずがつく。姿勢は前こごみになりすぎる。

坐高<sup>ざこう</sup>がうずたかくもりあがつた、現代婦人の膝は、桐の文机の下にはいらない。無理に入れたらめりめり音を発してさけるかもしれない。明治の婦人の膝はあれにはい<sup>け</sup>つた。当時の婦人は五尺にたりないのが一般で、それ以上あれば高すぎると非難され<sup>た</sup>。

金色夜叉<sup>こんじきやしや</sup>の主人公間貫一<sup>はざま</sup>は、鳴沢宮<sup>なりざわ</sup>の心変りをなじつて、言い争つたあげく、その弱腰をはたと蹴<sup>け</sup>つた。宮はたおれ、貫一は不覚に馳<sup>は</sup>せよるとは、名高い熱海の海岸のくんだりだが、貫一は五尺二寸、宮は四尺八寸位しかなかったかと疑われるふしがある。

一流のファッション・モデル、ヌード・ダンサーの平均身長は、いま五尺四寸、だ

## 長持

いつのまにか姿を消した和家具に、長火鉢と、文机かづくえと、長持がある。

長火鉢は、今も和家具の展覧会には、申訳けのように一つ二つ出ている。唐木からきや神代杉で作った美術品のような作品である。実用品の方は時々古道具屋でみかける。たまには買う人があるのだろう。

長火鉢といえば、思いだすのは煙草盆たばこである。「玄治店げんや だな」のお富は、長火鉢の前にやすして、長羅宇ながらうのきせるの雁首がんくびで、煙草盆をひきよせ、ゆるりと一服吸っていた。蝙蝠こうもり安やすのせりふを聞き流している間のことと覚えている。

長火鉢は妾宅しやうたくばかりにあったのではない。昭和初年までは、健全な家庭のどこの茶の間にもあった。というより長火鉢を据えて、はじめて茶の間らしくなったのである。煙草盆は両切の巻煙草の出現によって、桐の文机は万年筆の普及によって、滅びた。文机もあれで、昔は実用品だったのである。

## インテリ

インテリというのは、ロシア語のインテリゲンチヤから出た言葉で、本来十九世紀末の知識階級のことだそうだ。この語はわが国では、昭和初年に輸入され、されるや否や、ゲンチヤはちよん切られ、インテリと名を改め、たちまち流行して日本語になった。

昭和初年のインテリは、労働者に対して、後ろめたい気持ちをもっていた。恥じてさえいたようである。青白いインテリといわれ、労働者側からは、重んじられてはいなかった。

弁舌はさわやかで、才覚もあるが、真の味方ではない。二十九日もブタ箱にいれられれば、必ず転向するにちがいない口舌の徒とみられていた。

両者には共通な言葉がなかった。インテリは労働者のなかにはいろいろと、いろいろ苦心を重ねたが、成功はしなかった。労働者はついに胸襟きょうきんを開かなかった。

からその弱腰をはたと蹴つても、首尾よくたおれてくれるかどうかはわからない。煙草盆も文机も、すべて滅びる理由があつて滅びたのである。

ただ長持だけは、茶箱と交代した。和家具屋が油断して、長持の存在を忘れているうちに、いつか茶箱が進出して、長持の座にすわってしまった。

うちがわに錫すずをはった巨大な茶箱は、当分不要な衣類をしまっておくには重宝である。近所の茶を売る店にたのめば、四、五百円で譲ってくれる。デパートでも売っているそうだ。だから今はどこの家庭にも一つや二つころがっている。千代紙をはって、きちんと二つ並べて、押入れにしまつてあるのを往々見る。

けれども、あれは本来家具ではない。家具の領分を茶箱におかされては、家具屋の面目はなからうと、その腑甲斐ふがなさを心中ひそかに咎とがめていたら、近ごろ「アパート展」でユニット家具というのをたくさん見せられた。それは寸分たがわぬ箱家具で、都合で、縦につんだり、横に並べたりできるものである。

なんのことはない、ヒントは茶箱ではないか、横に三つも並べれば、新式の長持ではないかと気がついた。

のものだから、これも一進歩なのである。

以上は組織労働者——大工場に勤める労働者の話である。百姓、店員、職人、そのほか未組織の労働者は、まだこの組合用語を使うにいたらない。これで話しかけられなくても、返事ができないこと小林多喜二の時代とほぼ同じである。

「共通の言葉」こそすべてである。古往今来これを普及させたものが天下をとった。未組織の労働者まで、共産党の言葉で話すようになれば、それは組織化されたということ、天下は共産党のものになったということなのである。

以前は八紘一字はつこういちといった。一億一心、撃ちてしまふ、そのほか凡百の紋切型があって、大臣も隣組長も、それを操ったから、みんなまねした。つまり、彼らの天下だった。

凡百というのは誇張で、百なんぞありはしない。五十もあれば多いほうで、人民の、人民による、人民のための政治——

民主主義にもやっぱり相応のスローガンがあつて、それをいろいろ置きかえて喋しゃべれば、すなわち一億みな民主主義者というわけなのである。つまり、同時代の人だという証拠で、人は互いにその証拠を求めあつて、話しているようなものだ。そして相手の口からこれを聞きだして、安心してメートルをあげるのである。

開かないのはインテリ臭が邪魔するからだ、インテリは反省し、かつ悩んでいたようだ。小林多喜二が活躍した前後は、こんな時代だった。

ところが戦後、インテリは恥じるには及ばないことになった。組合運動が盛んになって、インテリと労働者が共通の言葉——組合用語を操って、自由に話ができるようになったからである。ついに労働者は胸襟を開いたかと、青白いインテリは安心して、<sup>じくじ</sup>忸怩たることをやめたのである。

ここで組合用語というのは、ベースアップとか、オルグとかカンパとか独占資本とか、要するに凡百の専門用語で、両者がこれをぺちやくちややれば、肝胆はおのずから相照らして、学生あがりと労働者出身の区別は朦朧<sup>もうろう</sup>となる。インテリは労働者じみるし、労働者はインテリに近くなる。そして互いに同志だと安心するが、本当の同志だかどうかはよくわからない。

王子製紙のストライキでは組合が二つに分裂して、第一組合には労働者が、第二組合には学生あがりが集まって血を流したそうだった。

「この天の虹<sup>にじ</sup>」という映画でも、娘が同じ会社の学校出を選んで、労働者を捨てるいきさつが描いてあるそうだった。その対立は、昔は即座にあらわれたが、今は土壇場<sup>どたんば</sup>にならなければあらわれない。それまで束<sup>つか</sup>の間<sup>ま</sup>の仲間だが、元来仲間というものは束の間

## おむすび

わが胃袋の機能が、人並以下か以上かを、私は知らない。戦中戦後は、配給でたりた。朝飯は久しく食べない。

ほとんど使用しない人体の器官は、次第に退化するものだそうだ。小食にすぎで、わが胃袋は退化して、万一、御馳走ごちそうを前に、人におくれをとることがあつてはならないと、以前私は月に一度は大食いすることにきめていた。

天婦羅なら三人前、寿司すしなら四十個は平らげた。満腹すると同時に、これではらく休憩中の胃袋を、十分に拡張し、刺戟しげきして、退化縮小することをさまたげたと安堵あんどした。

こうした最高記録さえ樹立してあれば、ふだん食べなくても、それは食べられないのではない、一旦緩急いったんあれば、寿司の四十や五十は平らげる能力あるものと安心である。私はわが胃袋について、これ以上配慮するところがなかった。

いつの時代でも、この五十語さえマスターしていれば、脳ミソはいらないのである。しかも人はなお自分の脳ミソの主人公は、ほかならぬ自分だと思いこんでいる。自分で考え、自分で発言していると思っっているが、とてもこの五十語を出ることはできない。生まれて、喋って、そして死ぬのである。

今までそうだった。これから、そうであろう。

空腹と空腹感は、本来別物だそうだが。そんなやぶ医者のうがきの能書なんか私は聞きたくない。飲まず食わずなら、胃の腑ふは空っぽにきまっている。なぜ空腹感がそれに伴わないか、そもそも両者は勝手に分離していいものなのか、いつ元通りになるのか、私が知りたいのはこれである。

元来私は医薬を信じない。医者と薬は信じなければ効かないものだそうだが、あまりのことに、私は節を屈して医家の門を叩たたいた。

医者は胃腸専門の名医で、年来の知人が推薦してくれた人である。私は上半身を裸にされ、バリウムとかいうどろどろと怪しげな白い泥を飲まされ——それは体内で燐りん光を発するらしい——胃袋のレントゲン写真をとられ、胃液をとられ、検便され、しめて小半日かかった。

あらゆる検査をうけた結果、私は「別条ない」と言い渡された。貴君は病気だと言いはってきかないが、どこにも全く異常がない、貴下の便には虫さえ棲すまない、私はさじを投げました、恐らく精神の病気でしよう。

食欲というものは、想像力だそうだが。山海の珍味を空想して、生唾なまつばをのんで、さてその珍味を目の前にしたとたんに、想像力は四散して、早くもげっそりするの、やっぱり精神の病気であろう。

二十代の昔、私は不眠症になやんだ。十日も眠らぬと、しばしば訴えたが、人はそんなに眠らずにいられるものではない、きれぎれに眠って、その自覚がないだけだと言われた。たぶんそうであろう。

十年かかって、私はこの不眠症を退治した。そして、いれちがい、食欲不振を得たのである。

戦後しばらくしてから、私は全く食欲を失った。何を食べてもうまくない。ばかりか、腹がへるということがなくなったのだから不安である。それが高じて、食べるのが恐ろしくなった。

朝飯を食わず、昼飯を食わず、午後の二時、三時、四時を数えても腹がすかないのは、この分では夜になってもすくまいと心配である。時刻が経過するごとに、不安は増大する。

やけになって、逆手に出て、朝から飲まず食わずでいて、いつまで腹の虫が納まるものかどうかを試したことがある。腹の虫が蠢動するまで、じっと待つのは耐えがたいものである。それでも灯ともしごろになると、それはかすかに動きはじめた。やれ嬉しやと、支那料理屋へかけつけると、もう食べる気はしなくなっている。私は再三これを試みた。

んぐりと頬ばった。

私はそれを食べてしまった。つとめて空腹と空腹感についての、あらゆる邪念を払って、ひたすらもぐもぐと食べてしまった。

首尾よく二つはわが胃袋に納まった。けれども何としたことであろう。それは私に咀嚼<sup>そしやく</sup>され、いったんばらばらに解体したはずなのに、再びきちんと大小二個に握られて、一つは海苔まで巻かれて、ずっしりとわが胃袋に鎮座しているのである。

それをわが心眼は、ありありと見たのである。団々たる巨塊を、一つならず二つまでも、わが腹中に蔵したまま、私はその晩寢床にそつと足をのばした。

そして、はれものにさわるように、私はわが肉体をいたわり、重い眠りを眠ったのである。

問題は想像力にあると言われれば、思い当る節がある。私は子供のとき南京豆ナンキンを食べると、それが胃袋に納まっている状態が、気になってならなかった。あれは滅多に消化するものではない。蠟ろうをひいたようにつるつるして、すんなりとなで肩ではあるが、噛めば鋭く飛散して、その個々はきばのようで、わが歯ぐきを傷つけんばかりに鋭利である。それは胃の腑に納まっても、いつまでも原形のままでいて、私が歩けば、ザクザク音をたてて、共に動揺するようである。子供の私はしこたま食べ、その末始終が気になって、わが腹中を想像して暗然とした。

貴下の腹には虫も棲まぬと、当代の名医に言われ、喜ぶよりかえって私は落胆した。そして、食欲不振を美食で恢復かいふしようと試みるのは月並である、いっそ粗食で、と思いたつにいたつた。私は命じて、家人に握り飯を二つ作らせた。

それは正しい三角形の、大小二個の握り飯であつた。つややかに、且かつつ冷やかに、午後の陽をうけて、美しい光沢を放っていた。あまり固く握られたので、米粒は互いに犇ひしめいて、競いあつて直立しているように見えた。一個には海苔のりが巻いてあつた。いずれもなかには梅干がはいっているはずである。それは少年の日を思わせる、懐なつかしいおむすびであつた。

私は茶をすすって、しばらく遠くからこれをながめた。徐々に接近して、ついにあ

は進まぬだろう。妙齡に達しながら、なお神妙が初耳だとは、このての新教育で育った卒業生第一号かと疑われる。

与力と同心と目明しは、講談本には始終出てくる。戦前の子供が、一々その区別を承知して読んでいたとは思われない。十把ひとからげに、不浄役人のたぐいだと片づけていたにちがいない。けれどもしばしば読むうちに、岡ッ引は同心の手下、同心は与力の配下だと承知するにいたる。誰も教えはしないのに、どこで区別するのだろう。芝居なら衣裳いしやう、たとえば与力は羽織着て、二本差して出てくる。目明しは十手取縄もつだけである。講釈なら互いがやりとりする言葉のはしばしに、おのずと身分はうかがわれる。

禁じられていながら、雪隠せっちんにかくれてまで読むのは、それが面白くてたまらないからだ。卑俗にすぎるというのなら、例を講談にとらなくてもいい。一段と高尚な文学も、字句さえ注釈すれば、理解が成るというものではない。国文学者は字句に明るく、文学に暗いという定評がある。物語の筋立て、気魄きはくに圧倒され、我を忘れて読みふけるうち、難解な字句は自然にわかってくる。作の神髓を会得する感覚を養うなら、幼少からじかに一流品に接するに如くしはない。

女子供の知能を一段低いとみて、かみくだいて書いたと称する物語は、すべてこの

神  
妙

女子大出の新参の社員に、神妙って何でしょうかと、真顔でたずねられて驚いたと、どこやらの会社の重役が書いていた。神妙が初耳で解げせないのは、芝居見物の風俗がすたったのと、講談本が読まれなくなつたせいであろう。御用御用、神妙にしろとは、十手かざした岡ッ引が、のべつ口走るせりふである。

新制教育が実施され、二、三年たったころ、私はたまたま学年雑誌「小学一年生」で、おなじみのお伽ときばなし嘶「一寸法師」を読んだ。京は三条の大臣どのに、一寸法師は抱えられるが、さてこの大臣どのが一年生にはわかるまいと、編集子は考えたのだらう。両親以外の大人で、一年生が確実に知っているのは先生だけだ。「一寸法師は、先生にかわいがられました」と書き改めて載せていた。

学年雑誌は、該当する学年の、教科書中にない字句を、かたく使わぬ方針らしい。使わなければ、いつまでたっても覚えやしない。一年生に停滞して、容易に二年生に

が語れば、寄席よせの客にはわかったが、今はちんぷんかんぷんである。ギリシャ神話で名高い勇婦、アマゾン为例に引いたら皆にわかるか。わかるならそれでもいい。勉強して範を西洋にとり、舶来の古典で統一しようじゃないか。

板額はもとより、アマゾンだってさっぱりわからぬ。人物にも物語にも、我々は何もはや共通な何ものも持たない。

人が互いに語りあつて、領うなずきあっているのが、私には怪訝けげんに思われる。神妙とは何かと、たまたま問われても驚くには当らぬ。彼女はきいてくれたからいいが、人はきかずに領くのみである。なん十年来合点しあっているが、何を合点しているのか、知れたものではない。

私は東京に生まれ、東京に育ちながら、異域に亡命したつもりでいる。得体の知れぬ外国人に困いんよう繞されている思いで、用心して暮している。

一寸法師のたぐいである。百害あつて一利がない。少年のための水滸伝すいこでん、同西遊記、同三国志等は、すべて本物とは似ても似つかぬ。これが水滸伝かと、子供心に怪しむほどの代物しろものである。印象希薄で、なに一つ脳中に残らない。古人が三国志、水滸伝中の人物を、生けるが如くごと思つたようには、かけても思えぬ。

昔は古典や物語中の人物は、生きて町なかを歩いてゐた。あれは我々の代表者で、実在の人物よりはるかに実在してゐたのである。西洋ではまだこのことがあるようだ。たとい熱心には読まれなくても、「聖書」を備えぬ家庭はないという。

モリエールやラシイヌの脚本の主人公は、フランス人のなかで生きている。ふだんに人の口の端はにのぼっている。希代の色事師ならドン・ジュアン、いかさま師ならタルチュフと、三百年來相場はきまつている。よきフランス語を学ぶために、芝居見物する風習は、今も確乎かつことして残っている。

ひとり我々にはなんにもない。以前はあつたがなくなつた、というより自ら捨ててしまつたのである。読書人なら誰しも学んだ四書五経が、旧弊とるにたりないなら、それに代わるものがあるべきである。新劇は歌舞伎の代わりだろうか。その登場人物で、ながく我々の記憶に残るものが一人でもいるだろうか。

巴御前ともえごぜんと板額いはんがくは、昔は勇婦の代表者だつた。巴、板額もかくやとばかりと、講釈師

はずである。それをあてにして、婦人はこれを着けるのであろう。二人は恋のごとき過程を経て、やがて寝室に至るであらう。それから先きが、私には怪訝けげんに思われる。

女は男に消燈を命ずるであらう。いずれはぼろりと剥はげ落ちるにしても、その以前に第一回の関係を結ぶことを急ぐであらう。それさえ結べば、あとは大丈夫だと、彼女は信じているのであろうか。その自信があるために、はじめはそれが眼目であった乳のごときは、怒るにたりない些事さじとして、男は忘れ去るはずだと自負しているのであろうか。

義乳は装身具の域を脱している。その目的は男子の肉欲を誘いだして、土壇場において瞞まん着ちやくするにある。ギニューのギに、信義の義を当てるのは妥当でないようだ。詐欺さぎの欺きを当て、欺乳とでも書いてはどうだろう。

化粧は必ず詐欺的性格を帯びる。私はかつて読んだことがある。それは、大きすぎる口、小さすぎる口、唇のいずれかの一端がつりあがっている口、下唇が厚く突きだしている口、そのほかあらゆる形の口に応じた、さまざまな紅の塗り方を指南した「虎の巻」である。

たぶんそれを勉強して、半ば成功したのであろう。その婦人は、人並みはずれて巨大な口を、紅の塗り方一つで巧みにごまかしていた。一種別様の口に変えていた。

## 義乳時代

ギニューの流行に、私はかねがね注目している。ギニューとは、にせもの贋物の乳房のことである。義乳の二字を当てている。義眼、義足に準じたのだろう。

それは戦後発売され、はじめダンサー、女給に採用され、今ではあまねく用いられているゴム製品の一つである。ブラカップとも言う。

形はわん腕を伏せたようで、色は鉛色で、感じはざらりとしている。まりのようになかには空気が満ちている。それをブラジャでとめ、シュミイズを着て、その上から衣裳いしやうを纏まとえば、本乳（ホンニュー）に見み紛まがう。

乳房は突起して、やや上向きかげんなものを上乘とするとは、男子間の定評である。義乳のなかに充満した空気は、体温とほぼ等しい温度を保ち、かつ弾力に富む。酔客が戯たわむれて、胸に手を置いても、容易には看破できない。

容貌には難があっても、乳が美事なら、その女を征服したいと熱中する男子は多い

戦前後の一兩年のことである。

衣裳いしょうと脂粉を去った彼女たちは、花ではなかった。ばかりか、女でさえなかった。婦人をかくまで醜悪にする戦争はだから呪のろうべきだと紋切型を言いたいのではない。紅・白粉おしろいを全く去った女流の大群を見て、私は彼女たちに欺あざむかれていたと知ったのである。

私は彼女たちを望見して、感奮しようとつとめた。ところが、何の刺戟しげきも受けやしない。こんなはずはないと接近したが、甲斐かいがなかった。防空服装に身をかためた彼女たちは、一見して男子と相違なかった。むきだしにした彼女たちの形相は、我々のそれと異つてゐるとは認められなかった。ひっくり返してみなければ、めす、おすが分らないのは、蟹ばかりではなかったのである。

ただ一人の婦人さえ、得も言われぬ香氣を発するとは、サロン文学者がしばしば書いたところである。だが、彼女が発散する香氣は、婦人天賦てんぷのものではない。脂粉の香にすぎない。男子は単なる脂粉の香を、女性の香氣だと誤解した。

誤解してなん千年の久しきに及んだので、ついには化粧料の香氣が伴わなければ、性を感じることさえできなくなつた。感覚の退化である。

ある婦人雑誌で、姦通かんつうをテーマにした座談会があつた。出席者は妙齡の婦人ばかり

私は彼女と、卓をへだてて対座していたが、さして醜いとは見なかった。ところが彼女は、私の冗談に、破顔して一笑した。すると、本来自然の口は口、紅は紅と、各個全く独自に、ばらばらにくずれ去ったのである。その顔は、あわてて原状に復するまでしばらく瓦解したのである。

私は蟹の雌雄かにを弁じない。ひっくり返して見て、下腹に横縞よこじまのふんどしをしめているのがおすだと、聞いたような記憶がある。

蟹の雌雄ばかりか、私は近所の犬猫の雌雄の区別さえつかない。

近代の知識人は、同類である人類より畜生を崇拜する傾向がある。互いにまことしやかな大義名分をとえ、喧嘩けんかばかりしている同類に絶望したためであらう。メーテリンクは「蜜蜂みつばちの生活」を書いた。蜜蜂の方に、人類よりはるかに理想的な「社会」を見て、感動したのがこれを書いた動機かと思われる。

犬猫でさえ人類よりはましである。第一彼らは銭を持たない、従って売淫ばい淫しない、戦争しない。私には分らないが、犬猫には分っているのである。隣家の同類がめすであるか、おすであるか分っているのである。そして、周期的に発情するのである。めす犬は化粧しないでおす犬を熱狂させる実力がある。

婦人は人類の花だそうだ。昔私は彼女たちの素顔を仔細しさいに観察したことがある。敗

持てないのは、彼らの官能が繊細なためではなからう。スリルによってしか発情できないとすれば、それは感覚が退化したためである。性欲の萎靡<sup>いび</sup>である。

周期的に発情する禽獣<sup>きんじゆう</sup>と異って、人類は随時随所に発情できる、それが万物の霊長であるゆえんだと、自慢にもならないことを自慢したばかりであらう。男女を問わず、その官能は著しく鈍磨した。

危殆<sup>きたい</sup>に瀕<sup>ひん</sup>しているのは、政治ばかりではない。衣裳と脂粉と、猥褻<sup>わいせつ</sup>な妄想の助けをかりなければ、性を感じられないのが男子なら、婦女子がギニューをもつて欺<sup>たぐ</sup>こうと企<sup>たく</sup>らむのも当然である。どっちもどっちである。破廉恥<sup>はれんち</sup>な関係でなければ、感奮興起できない我々の感覚も、危機に瀕<sup>ひん</sup>しているのではあるまいか。

であつた。司会者は名のある小説家であつた。

チャタレー氏は不具者だそうだ。だから、細君の姦通は、情状酌量すべきである。こうした発言から始まつた座談は、たちまち姦淫一般の肯定に傾き、ついに礼讃らいさんに終つた。

一座の空氣が姦淫の是認に傾いたのは、世間一般の空氣に迎合したまでのことである。世間が姦通を非難してきびしければ、こうした発言が新聞雑誌に出るはずがない。ジャーナリズムは、本来勇氣を持たないものである。姦通が目下流行しているかどうかは知らない。ただ流行させて、それを食い物にしようというジャーナリズムはあるだろう。司会者である小説家は、フランス人の享樂きやうらくの随一は、姦通だと教えている——とにかく、向うでは、姦通が一番面白い大人の遊びなんですよ、云々うんぬん。

小説中に書かれたことと、実生活とを混同するのは、混同したいからである。

わが国の文学者は、たいていフランス崇拜である。フランス文学の半ばは、姦通小説だそうである。西洋人は朝から晩まで姦通して楽しんでゐる、いいなあ、さすがに文明だなあと、かつて垂涎すいぜんした読者が、今は作者になつてゐる。

西洋崇拜の一根拠は、こんなところにもあつたか。私はフランス人のことは知らない。だが、彼らが終日姦通に興じているとは信じられない。他人の細君にしか興味が

私はそれを咎めるより、どこからこの「転売の精神」が生じたかを、時々考える。そして、すべては闇のせいだと知るのである。

あらかじめ売ることを考えて、新築する料簡は、千三ツ屋のそれに似ている。土地家屋の売買は、もとはせんみつ屋の仕事だった。千に三ツ、まとまるかどうかかわからないから、正業とはされなかった。

自家用の高級車の持主は、今は金持の部類に属する。以前なら「旦那」と呼ばれた人々である。それがあらかじめ売ることを考えて、自動車を買うのである。60年型を買って、いたまぬうちに売りにだして、61年型に買い換えれば、ほとんど失うところなく、常に新車を乗りまわすことができる。これが自家用族の常識だそう。

タキシードの運転手なら、それもよからう。いたまぬうちの転売、新車との交換も商売のうちである。それを旦那に考えられては、運転手のほまちがなくなる。

旧幕のころは、駕籠に乗る人、かつぐ人、といった。乗る人は大尽で、かつぐ人は雲助である。貴賤貧富に、雲泥の差があることを譬えたのである。今は乗る人も、運転する人も、精神的には同一のレベルにいる。自家用族は金持かは知らぬが、豊かではない。かすりきずにも塗料がはげ、値がさがるかと眉をひそめ、ひそかに心痛しなければならぬ。これならタキシードの運転手と同じではないか。一億総雲助化だと、私

終ついのすみか

終の住すみか処とは、そこで死ぬ家、というほどのことであろう。昔は、若いくせに家なんか建てるな、という教えがあつた。金持でもないかぎり、一代のうちになんども家を建てる機会はない。勤人なら停年に近く、あるいは過ぎて、ようやく自分の家をもつのが一般であつた。何かの拍子に、青年のうちに家を建てる、と、凡夫は安心して覇氣を失う。家は老境に近く建てるがいい。若いくせに新築したら、ろくなことはないぞ、という戒めであらう。

自分の家を建てるのは、戦前なら一大事だつた。終のすみかみたいと思ったからである。ところが今は、そこで死ぬ気で新築する人はない。老いも若きも、五年も住んで、飽きたら転売するつもりで建てるのである。やがては地下鉄が通るだろう、そして、高く売れるだろう、五年間をただで住んで、なおあまりがあるにちがいない。こんな胸算用をして建てるのである。六十になつても、まだそこで死ぬ氣がない。

ひつぎよう

畢竟「旦那」は死んだのである。昔の旦那は茶屋酒をのんで、ただら遊びして、むやみと祝儀をはずんで、そしてみるみる没落したが、その後継者は絶えたのである。絶えてちつとも惜しくない存在だが、ころんでもただは起きぬ旦那ばかりとなつては、さぞかし運ちゃんに困るだろう。本来この世は、誰かが損するようにできているところなのではないか。

何用あつてか知らぬが、昨今の旦那は高級車でかけずり回り、株を買い、土地を買い、女を買い、リビング・キッチンと茶室を一しょくたに建て、たちまち売りはらつてまた建てるが如くである。

建築の意匠化を非難する人がある。建主はそこで余生を送ろうというのに、建築家が自己を主張しすぎて、デザインばかり珍奇にして、迷惑だというのである。果してそうか。

ながくて十年、とある若い建築家は断言した。十年後に建主はそこには居ないのだから、五年間をただで住むつもりなのだから、これでいいのだというのである。

ひとり片っぱばかりでなく、双方一しよに墮落して、はじめて本式の墮落である。それは戦後顕著だといったが、病根は古く、深い。「大黒柱」というものが無くなつて久しい。

は思っている。

転売の精神は闇から生まれた。戦前は、たとえば呉服屋が砂糖で儲けるのは恥とされた。儲けるのは自分の商売にかぎるとされた。他人の商売で利得する——隣家が空屋になって、それを知人に世話して、周旋料をとるが如きはなかった。

物資の貧困は、精神の貧困を招く。我々は余儀なく呉服屋から砂糖を買った。彼は当然利得した。しかも本来扱わない商品を、好意で譲ってやると称し、砂糖と共に恩も売って、二重の快をむさぼった。

たぶんそれを忘れかねたのであろう。爾来、人は他日それを売ることを考えなければ、買わなくなった。闇はこの呉服屋ばかりでなく、のちに万人がするところとなったから、この風は全国に瀰漫した。

当人は、その家が気にいったから買うのだと思っているが、実は他日それを買うであろう客の好みの指図を受けている。たとい巨万の富をもって、自在に散財しても、この当人を裕福とみなすわけにはいかない。彼は潜伏する何者かに操られる傀儡にすぎない。

戦中戦後の闇は、われわれの心をいたく腐蝕した。もう戦後ではないというが、闇の精神は、われわれのものと精神といれかわってしまった。

したことがある。

「ご趣味はなんですか」

「音楽です」

「音楽は……」

「クラシック」

「クラシックのなんですか」

「(二分位の沈黙のあと、かすかな声で) ショパン」

「ショパンのうちでは……」

「(沈黙)」

見かねて助け舟が出て、話題はここで転じられたが、この問答には底に悪意があるようだ。

若く美人であるだけで、教養のない女優を、誘導して窮地に追いこみ、それを慰みものにするのも、才といえば才である。

女優が赤恥をかいたのは、身から出たさびである。気のきいた女優なら、すべてを茶にしたはずである。罪は自分にはないと、タレントは言うであろう。そしてアハハと一笑して、たちまち忘れ去るであろうが、女は生涯<sup>しょうがい</sup>忘れぬであろう。

## タレント

近ごろしきりにタレントという言葉を書く。何のことかと怪しんでいたら、芸人のことと知れた。

タレントは本来「才能」のことである。だから才子、とはじめ私は訳していたが、テレビやラジオに出没する実物を見るに及んで、上に軽薄の二字を加え、軽薄才子と呼んだ方が恰好だかつこうと知った。長たらしいから今は芸人と呼んでいる。

もとより私一個の翻訳である。新聞雑誌は適切な訳語がないまま、片かなで書いていることご存知の通りである。

今はタレントの時代だそうだ。世間の尊敬を一身に集めている。それを軽薄才子、または芸人と呼ぶのは、たとい私的にもせよおだやかでない。その理由を言えと、詰なじられるかもしれない。

ブルー・リボン賞を貰もらった某映画女優を、あるタレントが、ラジオでインタビュー

それからというものの、このプログラムに飛入りするゲストは、あらかじめこの約束を心得たものばかりとなった。アナウンサーの嘲弄に立腹するものは「野暮」とされた。

私は和気という言葉を知っている。野暮という言葉を知っている。けれども、こんなところに用いられようとは思いがけなかった。

テレビジョンに「テレビ結婚式」というのがある。左記はその式を司会するタレントと、新婦との問答である。

「お二人は恋愛結婚ですね」

「もちろん」

「婚約なさったのは」

「一ヶ月前」

「彼氏は初恋の人ですか」

「いいえ」

「前に恋人があつたんですね」

「はい」

「失礼ですがなん人」

ラジオやテレビの見物たちの、一瞬の慰みのために、タレントはゲスト（客人）を傷つけ、傷つけられたゲストは、それをお笑いにするという八百長やおちようがある。この八百長を創始したのは、私の知る限りでは、アナウンサーのXである。

十年前、Xは商売熱心のあまり、飛入りの素人しろうとを嘲弄ちやうろうして、見物の肴さかなにするという新趣向を思いついた。

何事によらず、一流一派を編みだすには、経営慘憺さんたんするものである。ゲストがたちまち怒りだしたらどうしようと、はじめは薄氷を踏む思いで、おずおずもちかけてみたところ、怪しむべし客は彼の心中を察し、さそいに乗ってくれたのである。すなわち、満座のなかで愚弄され、怒るところか自分で自分をあなどってみせてくれたのである。それが見物の娯楽となることを、一瞬のうちに理解してくれたのである。

以来、Xは大胆になった。徐々に嘲弄の語気を強め、それに比例して、哄笑こうしやうは湧くわと見てとった。和氣あいあいとして大成功だと、自他ともに許すに至ったのである。

そこにあるのは、主客の不思議な馴合なれあいである。それを彼らは和氣だと言っている。新しい娯楽の分野が開かれたと思っっている。その功労者とし、Xは一流のタレントになった。

あいとするのは、神武以来初めてのことである。天は自らあなどるものを、あなどりはしまいか。

「三人」(笑声)

「も一つ失礼ですが、その恋人たちとはプラトニックなご関係だけでしたか」

「いいえ」(再び笑声)

「セックスの関係があったと仰有るんですね」  
おっしゃ

「はい」

「処女を失ったのはいつですか」

「高校二年のとき」

「三人の恋愛遍歴ののち、一ヶ月前に、ついに結婚の相手を発見したというわけですね」

「はい」

「お嬢さんおめでとう！」(拍手)

もちろん、これは架空の間答である。だが、主客の八百長は高じるばかりだから、こんな応酬があってもおかしくない。二人は満場の喝采<sup>かつさい</sup>をあびて、電気器具でもごほーびに貰って帰るであらう。

むかし幫間(たいこもち)は自分で自分を愚弄して、一座をとりもった。ただし、それは彼の「商売」であった。素人がこぞって、嬉々<sup>きき</sup>として自らあなどり、和気あい

は、躊躇ちゆうちゆうして、おずおずとつけた。たとえば下宿とつけた。旅館というのはおこがましいから、やや下等な宿屋と卑下したところである。

ここまではいいが、これに不二館、芙蓉館ふようなどと美名をつけて帳けしにしている。のちにさらに増長して、高等御下宿と看板をだした。頭上に高等の二字を頂いても、下宿はやっぱり下宿ではないかとおかしい。

以上は明治の人が、昭和の人より、いくらか謙遜けんそんだったという証拠にあげたのである。

震災前後まで、東京の商家では、小僧を呼ぶのに、まだ「○どん」と言った。金二郎なら金どん、清三なら清どん、長じて番頭株になると、金さん、清さんと呼んだ。私はこの清どんに可愛かわいがられた。いま口のなかで「清どん」と呼びかけてみると、彷彿ほうふつとして幼時が思いだされる。

女中も○どん、あるいは○やと呼ばれた。菊という娘ならきくや、松という女ならまつやと呼ばれた。おまつ、おきくと呼びすてにする家もあった。それが嫁に行けば、さんをつけられ、おまつさん、おきくさんと改められた。今はなんと呼ぶのだろう。

第一、女中とは言うまい。新聞は「お手伝いさん」などと書いている。現実には「お手伝いさん」と発声している人もあるそうだ。このお手伝いさんたちは、「姐ねえや」と

## アパート山月房

アパートとは長屋のことだと、かねて私は思っている。長屋といえは人がいやがるから、名をアパートと改めただけのものだと思知している。昭和十年代のアパートのことである。

我々は実よりも名を尊ぶ国民である。棟割長屋同然の木造アパートに、「山月房」「南風荘」などと、似ても似つかぬ名をつけても、片腹いたく思うどころか、争ってそこに住みたがる国民である。

「栄太楼」は今も残る日本橋の老舗<sup>しにせ</sup>である。甘納豆で名高い。これが菓子屋のくせに、楼を名乗るとは不届きだと、幕末のころお咎<sup>とが</sup>めをうけた。今ではなんのことやらわからぬが、そのころ楼は館と共に建物の美称で、町人ふぜいがつけてはならぬ掟<sup>おきて</sup>であった。

実体がないのに、美名ばかりつけたがるのは、我々の悪癖である。それでも昔の人

ないか。それがむやみに向上したら、名人とでも上手とでも言うがいい。ただしそれは人が言うのだ。当人が自ら称するのではない。

東宝劇場のてっぺんに、今も名人会という寄席よせがある。その第一回は昭和の初め、故人秦豊吉はたとよきちが企画したものだそうだ。

元来芸人は、旧弊なものだ、その名に値しないことを、最もよく知る者は当人である。だから名人と名乗って、この会に出場することを渋ったのは彼らであった。忸怩じくじとして一席弁じたが、意外や世間はこれを咎めなかった。

自ら名人と称するのが当世である。そして当代の流行に抵抗するのは徒勞である。建築家がこぞって「作家」と自称する日は、遠くないであろう。

少年のころ、私はしばらく麴町こうじまちに住んで、アパート山月房の前を通過することを、しばしば余儀なくされた。麴町から四谷へぬけるには、そこが近道だったからである。そのたびにこの麴町という住宅地と、そこに新築されたにせ近代的アパートとを、私はにがしく尻目しりめにかけた。なんだ西洋の棟割長屋じゃないか。よしんば零落つじうらしても、俺ならちゃんと九尺二間の長屋に住むぞと力んだ。それが悪い辻占つじうらになって、のちに私は、実際にわが国の裏店うらだなに逼塞ひつそくした。

呼ばれるのが、死ぬほどつらいと、やっぱり新聞紙上で訴えていた。

さぞかしつらからう。だが、実際は女中なのだ、お手伝いさんなどと怪しげな美名をつけられて、うれしがってはいけない。

パパもママも、ある種の人には耳にこころよい美称らしい。私見によれば、好んでママと呼ばせる母親は、地方人に多いようだ。在郷の出身で、多少の学歴ある婦人に多いようだ。私はいまさらお父っつあん、おっ母さんと呼ばせるのも、固意地らしくていやだから、窮してお父くん、お母くんと呼ばせたが、長ずるに及んで子供はいつか呼ばなくなった。

友人のひとりには、一計を案じて、わが子を欺あざむいて「親分」と呼ばせ、しばらく悦にいつていたが、童児はたちまち成長して、親分の何たるかを知って以来、これを口にしなくなったそうだ。

芸人が芸術家と称するようになったのは、昭和になってからのことであろう。嘶はなしか家も歌うたいも、芸術家を僭せんしやう称すると内容が低下するから奇態である。内容が低下するに従って、人はいよいよ美名を欲するか。

この故ゆえに私は、新進の建築家が「作家」と自称する流行を喜ばない。我とわが内容が不安だから、美名がほしいのかと疑う。建築家は建築家で、職人は職人でいいでは

バーバリーがすたつて、これが流行して久しくなる。だが、私には腑におちなかつた。いつ見ても彼らは、おろしたてのような、白々としたのを着ている。薄よごれたのを見たことがない。してみると、あれは手入れがたいへんだな。のべつクリーニングしているのだろうか。

買おうと思いたつて、買わないでまた二年がすぎた。いくら洗濯屋に出しても、それは真新しくはならない。防水加工を繰返す費用で、早く買うべきだと、梅雨の前にはきまつて言われた。

勇を鼓して、買う気で私は見て歩いた。勇を鼓すとは大げさな、と思う人もあろうが、世には買物嫌いというのがあつて、私はその一人なのである。

買わなくてはならないと、なん年も思いつめると、それは強迫観念に似てくる。たえず何ものかに、責められているような心持になる。

それというのも、わが買物に好みがあるためである。たとえば肌着のシャツでも、それは上から下までボタンで開閉できるものでなければならぬ。頭からかぶるのはいやだ。他人にはどうでもいいことが、私には重大なのである。それに、目下流行しているものだけは、断じて買いたくない。しかも、常々観察して、この日に備える心掛はない。その労は惜しむ。だから何が目下の流行だか、皆目わからない。

## レインコート

レインコートを買おう、と思っていたってからなん年もたつ。あんまりきたないから買え、とすすめられながら、買う気にならなかったのは、自分ではさしてよごれていると見なかったからである。

よごれているなら、クリーニングに出せばいい、どこもいたんでいないのに、捨てるのはもったいない。

それでもしぶしぶ買うことにきめたら、街で、人の着ているのが目につきだした。いやに白っぽいのを、天気がいいのに着ている青年が多い。長くのびようとする裾すそを、途中でぶつ切り切ったようなスタイルで、ダスターコートというのだとは、かねて承知していた。

ダストとは、ほこりやごみのことだそうだ。雨の日だけ着るのではない。ほこりよけだから、天気の日に着てもいい。スプリングコート代用になる。雨あまがつば合羽専用あまがつばの茶の

私はずいとおへ通る。場ちがいの客が来たら、直ちに冷笑してやろうと待ちかまえている彼らに、臆おくした色を見せるものではない。一種のポーカーフェイス（仮面）を作つて、じろりと店内を見渡す。そして、見せて貰もらうだけだよ、とあらかじめ断る。私はネクタイを手にとる。レーンコートを見せて貰もらう。それはどこやらの国の、高価な、舶来の生地だそうだ。いいカモだと思ふのだらう、ぜひこれをお勧めしたいと、熱心に店員は言う。

私は、青年たちがいつも真新しいのを着ていること、それは安物を絶えず買いかえるためらしいことを聞いて確かめる。

店員はうなづく。それが当世であると教える。するとその古いのはどうなる？ 捨てるのか、やるのか、しまつておくのか。彼らの箆たんす筒は薄よごれたレーンコートで満員なのか。

声をたてずに店員たちは笑う。こんな高価なものを、一、二年で捨てるのはもったいない、と私。いえ、洗濯して防水すれば長くお召しになれます、と店員。

それは当世でないと、貴君はいま言つたばかりではないか、第一、洗濯しても真新しくならないことを、私はすでに承知している。高級品をすすめるのは当世流儀に矛盾するのではないか。

たった一つの買物にも、デパートから専門店まで、見て歩かなければならないのはこのためである。デパートの品は、げんざい流行しているもの、すなわち、まず避けるべきものの知識を得るために見る。ただし、めったに二階以上へはあがらない。あがるくらいなら、買物は見合わせようという男は、まだ多いとみえ、どのデパートも、一階の陳列にはもっとも苦心をはらっている。男が一人で買いそうなものは、たいてい一階でまにあうようにそろえてある。

一巡して私は銀座裏の専門店へ行く。専門店は冷やかな外観を呈している。デパートの客が、高級専門店へ来るのはお門かどちがいだ。ここは一流品を一流紳士に売る店です、と言わんばかりにできている。並の客をよせつけず、高くさえあればいいものだと思う客——昔は「田紳でんしん」といったが、その田紳ばかり選んで集める店の表情は、何によって構成されているのか。私は時々しげしげと眺める。近ごろディスプレイ（陳列）をやかましくいうが、そればかりではない。そもそも店の面構つらえからして、なんとなくお高くとまっている。こんな店こそデザイナーが参画ひけつしているのだろうが、大衆を拒否する店の外観を作る設計と陳列——その秘訣ひけつはどこにあるか、ひと足さがつて、私はそれを眺めるのである。

こうした店の店員は、やっぱりそれにふさわしい顔つきをしている。

## 落 第

何の病氣か忘れたが、中学のころ、一年休学した同級生があつた。癒なおつて再び登校したときには、原級に止められていた。

下級生たちは、事情を知らない。病氣だろうが何だろうが、落第すれば落第ほうず坊主だ。背ばかり高くなつた彼には、それがつらかつたのだらう。一年間のブランクをとり戻そうと懸命になつて、忽ちたちまとり戻して、やがて抜きんでて、一流の大学に入学してしまつた。

彼と私は、たまたま一年間同級だつただけのことで、親しい間ではなかつた。ただ、その彼を観察して、人は育ち盛りにながく寝たままでいると、背ばかり長く伸びるものだと知つた。ただし筋骨はそれに伴わない。だから世辞にも六尺豊かだとは形容できない。また、こうしたとき、人は遅れた学業をとり返そうと努力して、間もなくとり返すものだという——これらを私は知つたのである。

私は問答して若干の知識を得る。高慢ちきな店員を、まじめくさって翻弄ほんろうしたこと  
に少し満足する。それでも、これ以上買わずにすますることができないと知ると、私は  
それをデパートで買う。追いつめられて、ほとんどやけに近い気持で、目をつぶって、  
えいとはかりに買うのである。

今年もまた、レーンコートを、私は買いそびれた。

むしろ私は頑固を許し、理解ある態度とやらを許したくない。「制服の処女」だの「明日では遅すぎる」だのという一連の映画には、きまって頑固と理解ある先生というのが登場する。前者を悪玉、後者を善玉に見立て、映画は理解ある後者の肩をもつて、前者を非難して得々としているが、私はこれを迎合とみなし、胸くそ悪く思っている。思慮分別のたりない娘どもを甘やかして、理解ありげに振舞うのは、痴漢じようの常套手段とどうではないかと思っている。

新時代の墮落は、旧時代の墮落に負うところが多い。ヨーロッパは第一次、第二次の大戦を、ほとんど連続して経験した。ヨーロッパの知識人は、次代の青年の知徳の低下に、理解ある態度で臨んだか。

咎とがめるどころか、そそのかして幾らかにしようというのが、わが文化人である。セックスを食いものにした映画や文章は、悉くこの類たぐいだと思ってい。

わが友人の息子が通学する小学校の一教師は、名高い「成田山新勝寺」を成田ヤマ、御利益（ごりやく）をゴリエキと言っている。

相撲しこなとりの醜名しこなじゃあるまいし、成田ヤマはおかしかりうと、父なるその友人は笑ったが、何しろ先生が言うのだから、子供は信じて疑わなかった。そのうち、学校では成田ヤマ、家庭では成田さんと使いわけるようになったという。

だから、戦後のブランクというものを、私ははじめ信じなかった。戦中戦後はろくに授業がなかったから、学力の低下はやむを得ないという説を信じなかった。彼らは必死に追いつがって、いずれとり戻すはずだと思っていた。

ところが、事實は私の観測を裏切った。もはや戦後ではないそうだが、学力は低下したままである。

一人孤立して落第したから、彼はとり戻そうとしたのである。全員こぞって、それも戦争のおかげで低下したのなら安心である。彼らは互いに顧みて、とり戻さなくても大丈夫だと思ったのである。ばかりか、衆をたのんで氣勢をあげたのである。

つまりは人数の問題である。さかのほれば、本来学芸に無縁なものに、通学を許可したからである。

旧時代の大人どもはそれをきびしく叱責<sup>しつせき</sup>すべきだ。許すのが理解ある態度だとは思われない。

新旧世代の衝突というが、果してそんなものがあつたらうか。君たちの気持はよくわかるよ、と旧世代は齒の浮くようなことを言っただけではないか。

そもそも私は旧世代を信じていない。どうしてそれに甘やかされた新世代を信じることができようか。

団なのではあるまいか。戦中戦後というから、それはおそらく二十年に近い歳月の帯である。その期間に人と成ったものは、英・数・国・漢のいずれかで、あるいはそのすべてで、成田ヤマかゴリエキである。だから、彼らは結束して批判されることを拒むのではないか。それを支持する諸団体は、この帯のなかで育ったものと、それを甘やかして衣食のたしにするものである。一億落第坊主なら、氣勢のあがるのはもつともである。

今も昔も中学生は辛辣しんらつなものである。あだ名をつけるのに妙を得た者が、必ず一人はいて、誰かがゴリエキと言えは、たちまち嘲笑ちようしょうして、すると不確かな連中まで追隨しして、その子はゴリエキというあだ名を奉たてまつられる。「見ろ、ゴリエキが来るぞ、云々うんぬん」というあんばいである。

仲間なかまに笑われて、はじめて覚えることも多いのである。その以前は、家庭で親兄弟に笑われて覚えるのである。

三十に近くなりながら、この先生がゴリエキと言って怪しまれないのは、中学は愚か、さかのぼって家庭でも、誰にも怪しまれなかったせいであろう。

機知かいぎやくと諧謔かいぎやくの精神が失われたとは思われない。ただそれには知的な分子が絶無となった。芝居の大向う、国会やプロ野球の野次が、年々低級になるのはこのためである。

まさか先生の悉くが、成田ヤマと心得ているわけではあるまい。それを咎めるものがないのは、相手が一人前の同僚であるためと、たまたまそれだけは知っていても、他で無知なこと、この同僚と同じだと漠然と知るからである。彼らの団結が固いのはこの故ゆえかと思われる。互いにかばいあって、勤務評定を阻止しようとするのもこの故かと疑われる。

私は「日教組」の狂態を、いま全く別の角度から眺めている。あれは落第生の大集

事としたが、操觚者ではなかった。

つまり何者にもなれなかったものである。それが本誌を経営するにいたったのは、何をかくそう、身過ぎ世過ぎのためである。

私は電話帳を愛読したことがある。十年前、はじめて職業別電話帳が世に出たとき、私はその膨大な、片手にあまる、書物とも言えぬ印刷物を、茫然とながめた。ほとんど一行も読むところのない、それでいて必需品だといわれる、この本の化物を、ながめてやがて気がついた。

すなわち、これはやっぱり画期的な書物なのである。このなかには人の職業という職業がすべて網羅されている。とても読めた代物ではないが、目次だけなら僅々十ページにすぎない。その十ページに、人間の職業は尽きている！

私は目次を、丹念に読んだ。全職業が五十音順に勢揃いしているのも不思議なら、そのなかに、私に出来る商売が一つもないのも不思議である。何かあろう、きっとあるはずだと、反復してひねくり回し、ようやくこの木工の部門を得たのである。

よりによって、木工を発見したのには仔細がある。

かねて私はコンクールには参加しまいと決心していた。人と争って、押しのけることが出来ない、といえは体裁がいいが、争って互いに歯をむきだし、血相をかえてい

## 「木工界」由来

「木工界」を創刊して、今月でまる五年になる。歲月は勝手に来て、勝手に去る。このぶんなら、たちまち十年、やがて三十周年を迎える日がくるかも知れない。

誰が祝ってくれなくても、ジャーナリズムは、なん周年記念と号し、自画自讃するのが常である。げんに同業、といってもケタがちがうが、「朝日新聞」は、近ごろ八十周年を自ら祝った。

宣伝のためだから、私もそのまねをして、五周年を祝おうと思ったが、誇るべきものがないのに気がついてやめた。その代り木工界由来を書く。

私はもとのこの業界のものではない、ふとした縁で本誌を創刊するにいたったものにはすぎない。

この業界ばかりではない。私はどの業界にも属したことはなかった。早く某美術出版社の、チーフではあったが、べつにその世界のものではなかった。しばらく売文を

業界誌に信用がないのはこのためだと、かねがね私は承知していた。だから、あとはむずかしくない。私は広告を強いることを禁じた。家具の雑誌に、家具屋が名刺広告するのは無意味である。家具屋が求める機械、工具、塗料——また同じ家具でも、問屋の広告なら仕入に役立つから載せて許されると、繰返し社員に教えた。

そして私は、朝日・毎日・読売の三大新聞をはじめ、地方新聞の末にいたるまで、自ら毎月広告した。

はじめ単行本を、やがて雑誌を出したが、私の方針は以上に尽きる。そのほかは傍観していた。

私は経営と編集を分離した。分離するのが当世だから、したのではない。私が出しやばれば、ろくなことになるまいと思ったからである。

四年間、私は編集に深入りしなかった。けれどもこの一年來、出しゃばって指図しだした。記事は一変したから、こんどは口絵の番だと思っている。

離合集散は人の世のならいである。まして零細わが社の如きごとに、人材がとどまらないのは当然である。編集部は再三交代した。

本誌が一種異様の活気を呈しながら、なおあいまいで、人を釈然たらしめないのは、わが性情の故かと思われる。この意味で全責任は私にある。

るうちに、私はふと気が変わるたちだと知ったからである。

血まなこになった相手の顔は、私の顔である。相手の血相は、私の血相である。だから私は、あらゆるコンクールに参加することを放棄したのである。

世には妙齢をすぎても、なお結婚しない婦人がある。結婚できないのではない、しないだけだと、いくら当人が言っても、誰もそれを信じない。なに、貰い手が無いだけさと、かげ口きくにきまっている。だから、婚期を逸した婦人は、そのことを口にしない。

男子にして競争に参加しないと言うのは、この類か。競争場裡りを馳駆ちくして、はじめて男子である。参加したくないのではあるまい、出来ないであろうと言われるにきまっている。

少年のころから、私には落伍者らくこしゃの自覚があった。だから電話帳のなかに、競争率のすくない職業をさがしたのである。そして、この部門に、ジャーナリズムがないことを発見したのである。

この世界にも、戦前に雑誌と本があった。私はそれを図書館で調べた。それらはジャーナリズムというにはたりないものであった。いやがる業者から、むりに広告を奪い、しかも、自分自身はどこにも広告せぬ「貰い雑誌」だとはひと目でわかった。

## 内と外

イギリスの新聞記者、デーリー・メール紙の特派員マクロン君は、その東京だよりにいわく、「日本人の生活には非のうち所がない。清潔という点なら、イギリス人が茶をのむ以上に入浴する。正直という点なら、宿屋の各室に鍵かぎがなくて無事である。驚くべし駅々には夕立にあった乗客に貸す番傘の用意がある。しかも借りるに証文を要さない。タクシーの運転手、ウエイトレス諸君は、チップを受けない。しかも満面に笑みをたたえ、サービスにつとめる。この同一の国民が、かつてオーストラリアの看護婦を機銃掃射したとは——諸君にそのわけがわかるか。私にはわからぬ」云々。うんぬん

いつぞや国電の車内で見た図である。年のころは二十二、三、正装した美人の隣席に四十がらみの集金人が坐すわっていた。左手には無数の伝票、受取のたぐいを持ち、膝ひざにははちきれてほころびたカバンをかかえていた。

三ツ子の魂がまだ去らぬことを、私はうとましく思っている。けれども、これが去るのは死ぬときだろうと、このごろ私は思うようになった。

ツバに集中されている。そして必ず西洋人をひきあいに出す。

西洋人は公園に紙くずを捨てない。タンツバを吐かない。ひとり日本人は遠足の車内で弁当をつかい、紙くずの山を残して去る。公德心がない。

なん十回これを読まされたことだろう。耳にたこができているが、さりとて誰も改める者はない。老いも若きもみかんの皮はちらかし放題である。ばかりか、このごろは事務室の洗面所や、流しにまでタンを吐く。床にタバコをなげうち、足でふみにじる。

なぜこのことがあるのだろう。私は愕然がくぜんと思いあतった。きつと事務室は外なのだが、我々の脳中の内と外の概念は、西洋人のそれとはちがう。靴で歩くところ、即ち土足すなわどそくで歩くところは、我々にはみんな外なのだ。ぬいではじめて内なのだ。屋外なら火のついたタバコは、捨てて足でふみつぶせたりする。これを百万べん咎めるより、ために車内を畳敷きにしてはどうだろう。タンツバは吐くまい。鼻紙はちらかすまい。西洋人にとっては、ホテルの廊下は外だという。寝巻で廊下に出るものはない。日本人にとっては、宿屋の廊下は内である。どてらで歩いても怪しむものはない。してみれば問題は靴にあるのか。

ひとり私はまぬかれたが、兄も弟も応召して、弟は二人とも死んでしまった。はじ

男はしきりに伝票を繰って、その一々に余念なく何やら書きこんでいた。隣りに人がいるのに、この男わき目もふらないな、と見るうち、インキが出渋ったのであろう、万年筆の尖端せんたんを床に向け、二、三度強く振った。そして再び書き続けたが、またぞろ出なくなったとみえ、さらにはげしくトンと振った。

美人は露骨に眉まゆをひそめた。彼女は薄色のスーツを一着に及んでいる。インキのとばっちりがついたら、台なしになる。

彼女はすこし膝をずらした。客席は満員に近く、集金人から遠く去ろうとしても困難である。わずかに難を避けたのはいいが、半身が斜になって、顔をそむけた塩配あんばい式になった。いきおい男の右手は見えなくなった。彼はまだ振り続けている。手もとが見えないのは、見えるより不安である。その不安は顔にありありとあらわれた。

私は釣革にぶらさがって、まず安全地帯からこれを見ていた。私ばかりではない、こんな図は誰しも一再ならず見たであろう。見ながら私は考えた。

第一あの万年筆がよくない。粗悪にすぎる。出たり出なかったり、まるで万年筆の気分本位で、使う人間本位でない。あれはそもそも万年筆の名に値しない。それに車内は一時的ではあるが、室内も同然のところである。その床にインキを滴したらして平然たる料簡は奇怪である。新聞はしばしばこれを咎とがめる。非難はもっぱら紙くずとタン

## 兆民先生

私が兆民・中江篤介とくすけを知ったのは、幸徳秋水の紹介による。秋水は斎藤緑雨の、緑雨は内田魯庵ろあんの、魯庵は二葉亭四迷の紹介で知った。

いずれも故人である。私が知ったとき、すでにこの世の人ではなかった。すなわち、私は死んだ人の紹介で、死んだ人を知ったのである。

秋水は「大逆事件」に連座して、明治四十四年に処刑された、初期の社会主義者の領袖りようしゅうのひとりである。兆民はその師で、秋水の獄死に先だつこと十年、明治三十四年、喉頭ガンこうとうで死んでいる。貴君の命はあと一年半と、医師に見放されたから「一年半」を書いた。正統二冊ある。一年半たっても死なないので、大急ぎで「続一年半」を書いた。

緑雨の言葉で、今もおかしく思っているのに、「妻は茶漬也なり」というのがある。緑雨は終生めとらなかつたが、秋水が結婚したとき、祝辞として送ったのがこの言葉だ

め私はけげんに思った。「××死の行進」などという新聞記事を読んでも、わが同朋はらからが虐殺ぎやくさつに参加したとは、本当とは思わなかった。たぶん誰も信じなかったろう。郷にあっては神州清潔の民であり、揖讓ゆうじやうして進退したわが同朋に、悪鬼の振舞があつたとは、信じられない。

けれども、今では信じている。やっぱりその振舞はあつたのだ。ラフカジオ・ハーンが讃嘆した、あの日本人たちの伝統が、今も絶えないことは、デーリー・メール紙の言う通りである。

けれどもバターン半島は外であつた。彼らは軍服着て、靴はいて、出発した。内では礼儀正しかったが、外ではなすところを知らなかった。

日本人は海外の文物を消化して、迅速を極めた国民だという。私もそう思っていた。けれどもまだ靴一足を、よく我がものに消化していないようだ。再び外征することはあるまいが、あれば何をしでかすか知れたものではないと、私は思っている。

ある。

古来偉人は近づきたい。しかるに二葉亭には近づきやすい。いわゆる偉人ではない、さりとて凡夫ではない。

今人のうちに友人が得がたければ、古人にそれを求めるよりほかはない。私は早く今人に望みを絶った。二葉亭に親炙<sup>しんしや</sup>すれば、勢いその友人とも昵懇<sup>じつこん</sup>になる。作品、日記、随筆に作者の友人知己が登場するから、芋づる式にそれと知りあいになること、死せる人も生ある人に変りはない。

かくて私は魯庵、緑雨の面々を知るにいたった。緑雨の縁で、のちに一葉女史を知る。女史については改めて言うが、こうして私は、当時の言語、風俗、人情、物価に通じ、明治初年から末年までを、彼らと共に呼吸したのである。

少年の私は、当然二葉亭に最も親しんだ。鷗外にはやや長じて馴<sup>な</sup>れた。すこしばかり偉人に近く、すこしばかり親しみにくかったからである。

私は兆民居士を、秋水の縁で知ったのみで、さしたる影響を受けない人とみていた。秋水は、兆民先生は夜を好まれた、昼は俗にして夜は雅也<sup>みやび</sup>、と仰<sup>おつしや</sup>有ったと書いている。

兆民自らは、もし余が往昔の巴里<sup>パリ</sup>市民だったら、ルイ十六世を断頭台にかけなるべく狂奔したろう、そしてもし処刑の場面に居合せたら、獄吏をつき倒し王を抱いてのが

という。

「妻は茶漬也、全きをこれに求むるは夫の非道也。夫をして飢えざらしめば、妻の勤務は畢おわれる也。味淋みりんかつ節は一時のみ、茶漬は永久也、云々」

読んで秋水は破顔したが、かたわらにあった新妻は笑わなかった。この諧謔かいぎやくには底意があると含むところがあつたという。

「油地獄を言う者多く、かくれんぼを言う者少し。是これわれの小説に筆を着けんともい、絶たんとおもしろい双方そうほうの始はじめなり、終おわりなり」

「油地獄」も「かくれんぼ」も、共に緑雨の数少い小説のタイトルである。緑雨の志は小説にあつたが、出来栄ばえは短文に及ばなかった、短文は警句に如しかなかった。

当代の文士なら十行を費すところを、緑雨なら三行にまとめた。舞文曲筆、日本語の可能性の限界をきわめ、文字によるアクロバット（軽業師）の趣があつた。のちに芥川龍之介がこれを模して、「朱儒しゆじゆの言葉」を書いたが、もとより緑雨に及ばなかった。

大正に生まれ、昭和に育つた私が、これら故人を知り得たのは、すべて古本による。はじめ私は二葉亭四迷を読んだ。二葉亭の文より人物に傾倒した。二葉亭は、文学は男子一生の事業に非あらずと言って、政治に志し、失意のうちに印度洋上で客死した人で

## 客

客が客らしくないと、売子に馬鹿ばかにされる。客が客らしくなくなつたのは、いつの頃からのことか知らない。もの心ついて以来、私が観察した客たちは、みんな客らしくなかつた。

その代表的なものは、「江戸前」と称する寿司屋すしやと、天婦羅屋てんぷらの客であらう。

そこでは、寿司職人のほうが主人で、客のほうが奉公人みたいである。

客はおずおずはいってくる。銀座で名高いこの寿司屋で、しくじつてはならぬと思うのか、平静を装よそおつて、その実きよときよとしている。勘定が高いのは覚悟して来た、ただ、何から食べはじめ、何で食べ終つていいのか心配なのである。

寿司米はシャリという、茶はウジ（宇治）、生姜しょうがはガリ、そのほかギョクだのゲソだのと、寿司屋の符牒ふだうだか隠語かくごだかを、たいていの客は心得てあやつる。サビをきかせたトロ——などという類たぐいである。

れ去っただろうと言っている。卒讀して私は、共感したことを覚えている。

一方、小学生の私は、「少年戦旗」の読者だった。「少年戦旗」は、共産党のピオニールの機関誌である。そして、私はいま共産主義を敵としている。

それが何であれ今日の権威——すべて大きなもの、えらそうなもの、流行して甚しいものなら、反抗せずんばやまぬというのは、不平士族の単純な反骨である。「少年戦旗」をひそかに読んだころの共産党は微力だった。官権の追跡急で、ほとんど壊滅に瀕<sup>ひん</sup>していた。今はこれが知識人の権威である。

奔走して倒しながら、かえって助けんとする愚は、昭和の人が怪訝<sup>けげん</sup>にたえぬところであろう。私が今人に親しまず、故人に親しんだのはこの故である。私が影響を受けたのは、明治の字句、語彙<sup>ごい</sup>ばかりではなかった。いつ、いかなる時世でも、当世そのものを非とする作敵本能——と言えば美名にすぎる。むしろ甲斐<sup>かい</sup>ない反骨とでも呼ぶべきものを、共に受けついだものようだ。

し、はては互いの肩をたたきあって、大口あいて馬鹿笑いする。

サービスひようほうを標榜しながら、せいぜい客のタバコに火をつけるだけの能しかない。まんぞくに酌もできない。

客も客である。仲間はずれにされまいと、あわてて女たちの話題にわりこむ。むしろ客のほうこそ、サービスしているのに、どういうわけか、それをしているのは自分たちだと、女たちは固く信じている。さすがに近ごろはなくなったが、以前はこんな商売にも、言うに言われぬ苦勞があると、めんめんと語り、またそれを真にうける男があつた。

人につれられ、はじめてカフェというところに行つたのは、十五の少年のころだったが、ぐると場内を見回して、ははあと私は会得えとくした。

今も昔に変わらないが、そのころ東京では、女中と守ツ子まもっ子が払底かっていしていた。ほんとは守ツ子になるべき女が、みんな女給に化けたのだな、と私は合点したのである。

銀座裏の一流のバーの、一流の女給は、話術たに長け、容姿が洗練されて美しいという説があるが、うそである。あんなところに、教養のあるべき道理がないが、あるとも思わなければ、男どもは日参にっさんする口実を失う。ひよつとしたら、客の教養のほうも、下落して止まるところを知らないから、うまく一致したのかもしれない。

業者が符牒を用いるのは仕方がない。客が通ぶつてまねるのは不見識である。客には客の品位というものがある。それを自らおとすようなものだ。

客は自信がないのである。地方人だと思われたくないばかりに、この店をはじめだが、このての店はよく知っているとかわせようとするのである。だから、客の口のあたりには、媚<sup>こ</sup>びるような微笑が漂い、なん十年來漂ったので、今ではとうとう貼<sup>は</sup>りついて、寿司屋の台の前にすわると、皆さん同じ表情になる。

いくら阿呆<sup>あほう</sup>な寿司屋でも、これがわからないはずがない。客を馬鹿にして、なれなれしく「何ちゃん」などと呼びかけ、すると、またそれに応ずる客があつて、爾<sup>じよ</sup>汝<sup>よ</sup>の交<sup>まじ</sup>りが、主客の正しい応酬だとかんちがいする銀座紳士まであらわれるようになってくる。

自分の金で、自分が食べるのに、なんの気がねがあるのだろう。何から食べ、何で終ろうと好きなようにするがいい。

この寿司、天婦羅屋の同じ客が行くのだから、バー、キャバレーにも同じ風俗が見られる。やっぱりあなどられまいと迎合して、たちまち見破られ、女給たちに馬鹿にされている。

彼女たちは客を無視して、傍若無人に振舞うのが常である。朋輩<sup>ほうばい</sup>同志私語し、款語<sup>かんご</sup>

## 契 約

二級建築士の組合に、ほとんどただで、組合員にくばる雑誌がある。その社員が来て言うには——投書が山積して困った、同一の記事を、甲はやさしすぎる、乙はむずかしすぎると言う。同じく二級建築士でありながら、甲は学校出、乙は大工出身で、甲が学校で習って、耳にたこができていたことが、乙には初耳だからである。

何か妙案はないかと、あとで考えてみたがなかった。この雑誌と読者の間には、初めから契約が成立していないからである。

中学生が、「中央公論」や「世界」を買うことがある。周知のように、これらは大人のための総合雑誌で、少年には分らぬ字句が多い。分らなくても、それは雑誌の罪ではない、自分が至らぬせいだと、中学生は知っている。分りなければ辞書でも引くよりほかないと、知っている。

この中学生と雑誌との間には、買ったとたん右の了解が成立している。この場合、

そのかげに蠢く<sup>うごめ</sup>バーテン、ボーイたちのことは言わない。どうせ女たちの一味であらう。同じボーイでも、女つけないレストランのそれは、清潔を旨<sup>むね</sup>とし、常に直立不動の姿勢で突ったっている。

わが国の一流のレストランは、白布の上に、ずらりと食器を陳列する流儀に従っている。西洋料理発祥のころ、まず客のどぎもをぬき、ついでに味の批判を忘れさせようとした名残であらう。老婆<sup>ろうば</sup>や子供は、今もその食器を選びかね、あやつりかねて、迷い、とり落して周章することがあるが、どういうわけか彼らは断じて助けようとしてない。視野のすみで委細をちゃんと承知しながら、そしらぬ顔であらぬところをにらんでいる。

あやまってナイフを落したら、客は命じて拾わせるべきである。ボーイが突ったっているのは、もともと客の用事にかけてつけるためである。

客が客らしくないと、売手に馬鹿にされる。近ごろ店員教育の声が盛んだが、私はその効果のほどを疑っている。

むやみに威張れと勧めているのではない。客さえ毅然<sup>きぜん</sup>としていれば、売子の行儀は改まるにきまっている。客教育のほうが急務である。それをしないで、売子訓練ばかりしても、ききめはあるまい、と言っているのである。

ある。その上で、悲劇としてのよしあしを論ずるなら批評である。喜劇の尺度しか知らないで、それで難じられてはたまらぬと書いている。

封建云々の尺度で、古き脚本を論ずるのはこの類か。そんなら箸がころんでも、封建のせいであろう。今日の目を以て、昨日を論ずるなかと古人は言っている。

彼女はこの狂言の見物ではない。木戸銭は払ったが、なお契約しない見物が今は増えた。大人の本を買いながら、字句の難解を改めよと投書する子供が増えた。

ひとたび断絶した契約は、容易には復旧しない。というより、契約の実相は本来かくの如きか、いつ、いかなる時代でも、人と人との間には契約はなかったかと私は疑うのである。

モオパッサンが腹をたてたのは、八十年も前のことである。してみればこの女客のような見物は、今も昔も多かったと知れる。

所詮は人数の多寡による。お園の愁歎は愚劣だと説くものが多ければ、客はそれに従うであろう。ヒトラーの弁舌に心酔した若者たちは、今は組合の指導者くらいにはなっている。おしつけがましくその主張と感激を語る顔つきは、なん千年来の同じ顔つきである。

一々逆らうのは危険だから、戦中も戦後も、私は耳を傾けるふりだけして、エチケ

自分の小遣を出して買ったかどうかは、あとで文句を言うか言わぬかに微妙に関係する。

ただで組合から送られる機関誌には、この暗黙の契約がない。組合費で作った雑誌だから、甲も乙も自分の雑誌だと思っている。ところが一読して分りきったことばかり、あるいはむずかしいことばかり、書いてあるから文句を言うのである。

署名捺印なっしんするだけが、契約ではない。劇場と観客との間には、入場料を払ったとたんに契約が成立する。

三勝半七酒屋の段——あかねや茜屋半七は遊女三勝に迷って、女房お園を捨ててかえりみない。去年の秋のわずらいに、いつそ死んでしまったら、こうしたなげ歎きはあるまいものをと、お園は泣く。客は貫もらい泣きする。そのために見物に來たのである。それが芝居と客との約束であつた。

半七こそ封建亭主の代表者である。お園の歎きは愚劣である。奮起して半七を蹴けとばし、悔い改めなければ、早く離婚すべきである。

私が言うのではない。この芝居を見物半ばの女客があわをとばして論じるのである。「ピエルとジャン」の序文で、モオパッサンが夙つとに腹をたてている。「悲劇」を見て、それが「喜劇」でないと非難する客がある。悲劇は悲劇の約束に従つて見物すべきで

## ぱくぱく

ラジオはときどき子供座談会、討論会のたぐいを催す。小学校の優等生を集め、政治、風俗、文化を論じさせる。

子供は堂々たる意見を吐く。たとえば、岸首相は早く辞職したほうがいい、三池炭鉱に第二組合が生まれたのは残念だ、新聞は皇室記事を書きすぎるのではないか——私はこれを耳にするたびにぞつとする。総毛立って、名状しがたい戦慄せんりつを覚える。子供が大人のまねをして、したり顔で時事を論ずるからだろうか。

この種の席に出る「よい子」を、第一、私は好きじゃない。これをそそのかし、司会する先生、及び企画したプロデューサーにいたっては、ほとんど唾棄だきしている。この席でやりとりされる言論は、みんな今朝の新聞に出ていた、それを鸚鵡返おうむしに喋しゃべっているにすぎない、とみている。

よしんばそれが正論であっても、私は聞く耳をもたない。新聞の投書欄には、毎日

ットを守ってきた。進歩的な感動だけがうそだというのではない。左右を問わず彼らが感動と称するものの悉くが、質的に同一なことに、私は索然としてゐるのである。人はついに真に感動することはないのか、やっきになつて弁じたてるのは、無意識にそれをかくすためなのかと、まじまじと語り手の口もとを見るのである。

古往今来、喜怒哀樂が自分のものであつたためしがあるうか。それは一代の風潮、あるいは他人の指図によつて、旗色のいい方に従うだけのものではなかつたか。

私は若く、激しやすかつた。十年以上前のことである。舞台でひとりお園が歎き、客が貰い泣きする場面で、試みに笑つてみたことがある。客席の暗闇をよいことにして、私は声を放つて笑つたのである。

すると、果して、客席のあちこちから私の声に和するものがあつた。はじめおずおずと、たちまち安心したのであらう、大胆不敵な笑声が諸所におこつた。それは次第に場内を圧し、真実おかしくてたまらぬように、ドツと笑いくずれ、我が耳じだをいたく打つたのである。

る。言論の自由とは、即ちこのばくばくの自由か。すなわ

投書欄の正論なら、私は戦慄せんりつしない。歯牙しがにかけない。大人どもが言うときには、

それはしばしば時候の挨拶あいさつだ。うっとうしいお天気で、と言うかわりに「全学連」を云々する商人がある。聞き流していればすむ。

子供に限ってそれが許せないのは、その子が大人になって、首尾よく官僚その他になれば、必ずやるであろうことを、今日しないからと、咎めとがだてするためだろうか。それにしても、総毛立つほどの嫌悪けんおは、ちと大袈裟おおげさではないか、隣人はおぞ毛をふるうかどうか、私は試みに質たずねてみたことがある。

眉まゆをひそめて、ふるふるいやだと戦慄する人と、子供は実に立派なことを言う、大人は恥ずべきだと、感服する人とがあった。それは相半ばしていた。

たぶん昔なら、ぞつとする男女のほうが多かったろう。そして、これからは減る一方だろう。それが何に由来するか、私にはよくわからない。あるいはこれが現代の「修身」であるためかと、いま気がついた。

先年来、修身科復活はもめ続けている。私にはそれはとうの昔に復活しているようにみえる。ホームルームのたぐいは、現代の修身である。両者は共に、うそでかためたものである。優等生は長じて、贈収賄どうしゅうわいするとき、ラジオでこれを咎めたのを忘れて

正論が出ている。たとえば官僚の腐敗、組合運動の逸脱などが難じてある。

官界の腐敗は事実であろう。けれども投書者は役人ではない。たぶん役人にならなかったか、あるいはなれなかった者にちがいない。この人だって、首尾よく役人になれば、「袖そでの下」はとるにきまっている。

組合運動の行きすぎを難じる人は、組合の幹部ではない。幹部なら煽動せんどうして、激語して、どうせ逸脱するにきまっている。

小学生のホームルームと、大学生のディスカッション（討論会）との間に、差別があるうか。そこにあるのは、八百長やおちようだけではないか。弁論討議のたねは、みんな今朝の新聞に出ていた。あるいは雑誌「世界」に出ていた。そんならさつき読んだばかりだと、誰か一人が言いだせば、ディスカッションは瓦解がかいする。だから、辛抱して聞いているふりをする。なに聞いてなんぞいるものか。ただ相手の口がむなく開閉するのを見ているだけである。めでたく一段落したら、今度はおれの番である。相手が聞くまねをする番である。彼らはこれを思想の交換、または言論の自由と称している。私は「ばくばく」と称している。

言論の自由は、彼らが好んでとりあげるテーマである。どういうわけかこれを論ずるとき、人は必ず息まく。息まかなければ恰好かつこうがつかないという紋切型さえできてい

## 御無用

わが細君は、魚屋、酒屋の御用聞きをことわるとき、たいてい台所で「まにあつてます」と叫ぶ。

味噌、醤油しょうゆのたぐいが、今のところ不要なら、それでよかろうが、押売り獅子舞ししまいにまで、同じことを言う。

ゴムひもや鉛筆なら、いらなにきまっている。まにあっていると撃退してさしつかえないが、獅子舞いのどこがまにあっているのか、げげである。

お宅では、かねがねお獅子を養つてでもいなさるか、かなぐり捨てた獅子頭から、ぬつとやくざめいた顔をつきだして、居直られたと、わが家ではないが、話に聞いたことがある。

戦前まで、東京の下町では、「御無用」と言った。無用の二字に御の字を冠し、もっぱら門付けかどづ、押売りをことわるに用いた。

いること、いま我々が修身を忘れているのと同断である。

晴れの席で弁舌をふるったのである。あとかたもなく忘れることはあるまい。何か痕跡こんせきぐらいあるだろう。もしありとすれば、それはかすかな羞恥しゆうちとしてあらわれるのではないか。

初めて不当な贈物を受けたとき、人は何ものかに羞恥して、あたりを見回す。戦前派はろくに耳をかきなかったあの修身に、戦後派はかつての放送討論会、ホームルームの弁舌に恥じるのではないか。

しかし、それも一時いつときである。ただ一回限りの羞恥であること、今昔の修身に変わりはない。

このごろ一世代はおろか、たかが五つか六つとしがちがつたからといって、互いに理解できないと、まことしやかに言いふらすものがある。私はむしろ、時代と人に、新旧の相違がないことを残念に思っている。

絶無なのになぜ相手になったか、しゃべるのは先方は商売だが、聞かされる身にもなってみよ、猫の額みたいな事務所だから、二人の声は筒ぬけである。耳をおおって聞くまいとしても、得体の知れぬなまりを帯びた嬌声きようせいは、わが半日の平静をこなごなにした。

すなわち営業の妨害である。察するに保険会社には総本部があつて、その本部が近ごろ新しい指令を発し、妙齡の外交員を、群小の事務所に派遣することに決定したものとみえる。

元来生命保険の勧誘は、家庭にかぎつたものだ。事務所を襲うのは新戦術で、これを工夫した幹部は、名案だとおどりあがつたにちがいない。

私は親ゆずりの保険ざらいである。保険と聞くと逆上して、理性を失う。つとめて落ちついて言えば、どうせ保険会社のブレーン（首脳）のことである。悪あしき知恵の持主にきまっている。すなわち、事務所を訪問するのは違法ではない。もし営業をさまたげるなら、拒絶してくださいだされば、わが外務員は直ちに引きさがるであらうと、あらかじめ逃げ口上が用意してあるほど、この知恵は悪質なのである。

しかも彼らは、昨今の青年に、拒絶の語彙が貧弱なことを、わが身に照らして承知している。せいぜい「まにあつてます」ぐらいの用意しかないことまで知っている。

このごろ全く見られなくなつたが、以前は路傍でよく虚無僧を見た。黒の小袖に袈裟さをかけ、丸ぐけの帯をしめ、深編笠ふかあみがさをかぶつて、尺八を吹く有髪の僧である。

普化宗ふけしゅうに属し、免許を得て、門付けして歩くもので、ただの乞食こじきではない。

かりにも僧形の人である。敬してこれを遠ざけるのに、古人は御無用と言つた。まああつてますより、味のある言葉だが、今は使う人がない。獅子舞いに使つてみても、ことわられたと知らず、舞いつづけてやめないだろう。

拒絶は承諾よりむしろかしいのに、学校でも家庭でもこれを教えぬものとみえ、わが細君ばかりでなく、皆さん「まにあつてます」の一点ばりである。

近ごろは堂々たる男子まで言う。また、本来恐縮すべきでないところで、むやみに「すみません」を連発する。かれもこれも語彙ごいの貧困のあらわれである。

それはさておき、先日わが事務所に、二人組の保険屋が侵入した。

女である。二の腕をむきだしにして、花模様のワンピースをひるがえし、すこしと、うはたっているが、さながら二羽の蝶ちようが、ごみ箱に舞いおりた風情ふぜいである。

三十分もいたろうか、ようやく退散したから聞くと、二人は生命保険の勧誘に来たのだそうで、加入する意志があるのかと、重ねて問うと、絶無だと言う。

宅や仕事場に、帳面持参で推参するか。しかも、大義名分があるから、拒否できまいという顔つきまでしている。うそだと思うなら、ためしにことわってみたまえ。むつとふくれて、ボタンと戸をしめて去ること、押売り諸君に異ならない。御無用、という死語の復活を私は提唱する。使い道はたくさんある。

これを若い女の二人組に襲わせれば、へどもどするにきまっている。すかさずつけこみ、まくしたてて、外交員のペース（足並）にひきこめば、勝算疑いなしとの本部の思わくは、言わずと私には知れている。こんなときには、御無用！ とにべもなく言えばいいのだと、やっぱり私は逆上して叱責しつせきしたが、たちまちこれがすでに死語だと言気がついて、一段といまいましい思いをした。

語彙の貧困は、事実の貧困を招来する。たとえば戦後は、老いも若きも断乎だんこ拒絶する。やむなくことわったり、すげなくことわったり、拒絶にもさまざまな段階と陰翳いんえいがあったが、断乎の二字しか用いぬから、こればかりが横行して、他の諸事實は消滅してしまった。

語彙の貧困は、逆に怪しき新事実を生む。たとえば、デパートで買物して、売子がうやうやしくすると、すみませんを連発する。売子は職掌がら丁重にしているのだ。すまぬことがあろうか。けれども、連発する女房が多ければ、すまぬような新事実がここに誕生する。かかる怪しき事実の発生に、私は反対する。

これまた先日、わが事務所に署名を求める学生があらわれた。路地に面しているせいか、いろんなものが舞いこむ。原水爆禁止運動にご署名願いたい、という。その主旨に賛成か否かは問うところでない。彼らはいかなる資格と権利があって、私的な住

馬を見る目に似ている。肌のつやと目の色で、その日のコンディションを知るのである。

今日のデモは景気がいい、あるいは悪いと、私は品定めした。

もし私が本当の大将なら、この大群をどこへ導こう。南鮮の警官と軍隊は、結局学生側について、政府に向って発砲した。およそ革命の悉くは、軍隊が叛徒に投合して、はじめて成る。

デモの氣勢はあがっていたが、その機が熟しているかどうか、私の関心事であつた。

むろん私は新安保条約の詳細を知らない。一読したが忘れてしまった。デモの大群も同じだろう。再軍備と戦争につながるといわれて、出てきたのだろう。

改訂したら戦争にまきこまれるか、しなければまきこまれないか、たしかなことは誰も知らない。彼らは皆あんぽんたんだ、名づけてあんぽんたん騒動だと、私のうちに住むと、つい今しがたまで、私も知らなかったあの足軽の大将が言うのである。

木下藤吉郎以下、微禄から身を起した侍大將は、士氣については知っていた。彼らは生涯、誰の家来になるかを争った。非常のとき重役たちは城内に集まって、誰に臣従すれば安全か、そればかり論じた。

## あんぽんたん

私の事務所は虎の門にある。虎の門<sup>かいわい</sup>界限には、文部、外務、大蔵その他の諸官庁がある。アメリカ大使館や、国会も近い。だから、先日のデモは、連日、わが社の付近を通った。

あんまり騒ぎが大きいので、私は再三見物に出た。あるときは、ついて歩いた。またあるときは、タキシードをやとつて、デモの回りを一周させた。

ついて歩いたのは、酔狂である。彼らがどんな表情をしているか、この目で見たかったのである。

それは概ね<sup>おおむ</sup>静粛で、人民大衆の怒りを示して威力があつたと、新聞は書いたが、ついて歩いて、私は何やらわが身が遠い昔にある思いをした。戦国乱世の足軽の大將になつたような気分である。

私は折々彼らの顔色をうかがつた。足軽の大將が、兵卒を見る目は、競馬の騎手が

動かしても、その機が熟していなければ、それは烏合の衆にすぎない。ちりぢりに散逸して、中心だけ孤立する。

孤立しても、再起できるなら、試みるべきである。一度や二度の挫折は、もの数ではない。瓢箪ひょうたんから駒こまが出るたともある。

私はデモの背後にいる、一握りの野心家の観測と、わが観測とをくらべてみた。革命家にとっては、女子大生の死の如きは、好餌にすぎない。近ごろの青年はドレイ（薄情）だという。野心家はそんなことは信じない。老いも若きも浪花節なにわぶしだ、大衆は常にセンチメンタルで、常に好戦的だと信じている。

だからその死も利用して、事を成就じょうじゆする足しにする。「全学連」も包んで戦う。そのうち邪魔になったら、肅清すればいい。そうは問屋がおろさないというなら、おろしたほうが大将だ。角逐して勝ち残ったものが乱世の雄である。

白昼のデモは、和氣に満ちていた。それが夜になると人相が変った。昼夜によって人心が一変するのを、私はまのあたり見た。

これは以前、再三見た光景である。なん百年か、なん千年か前に私は見た。

それはいつそ物悲しい行列であった。どこへ行くとも知らず、ただはてしなくつづく歩みである。彼らは洗濯機やテレビの持主だという。そんなおもちゃを持ったとこ

うまく徳川家の手下になったものは生き残った。非運な大将のもとに走ったものは滅亡した。

私がデモに従って、プラカードのなかで、往時を偲しのんだのは故ゆゑなしとしない。突然、天下分け目の関ヶ原の合戦さえ偲んだ。

ご案内の通り、あの時の軍勢は、西軍が東軍より人数の上では優勢だった。けれども、タキシードで一巡して見るまでもなく、勝敗は戦わずして明らかである。西軍に戦意がないと、その顔色から、私にだって分つたろう。

くだって大正・昭和の軍勢は、沈痛せつじゆそのものだった。日清・日露の戦争以来、わが軍の士気はあがったためしがない。卒伍そごに理解できる、簡単な戦争目的がなかったためである。

だから、昭和十年代の将校は、意気さかな兵というものを、見たことがない。兵卒というものは、本来みな陰気なものだと心得ていた。

いま、このデモの士気はさかんである。

これが勢いの絶頂だろうか。国会だかバスチーユだかを襲えば、おまわりまで加勢してくれるかしらん。

私はこの大群を、意のままに動かすことを空想してわくわくした。

## 北海道紀行

七月×日から一週間、北海道へ旅した。某新聞社の招待で、道内見物をさせる催しに、出来心から参加したのである。

函館、室蘭、札幌、旭川——いずれも市内には泊らず付近の温泉地に案内された。函館なら湯の川、旭川なら層雲峽、札幌なら定山溪。

この定山溪には、登別温泉から洞爺湖とうやを経て、自動車でまる一日がかりで達した。すなわち遊山ゆうさんで、見せられたのは温泉場ばかりである。

見あげれば羊蹄山ようてい、見おろせば洞爺湖——ガイド嬢は、絶景だから忘れぬように見よ、としきりに忠告する。

層雲峽は、兩岸とも、百なん十メートルを越えてそびえたつ断崖だんがいで、その底を流れる溪流に沿ってバスは進んだ。ここでむかし大町桂月けいげつは、兩岸の奇岩怪石を仰いで、天下の奇勝だと感服したという。層雲峽の名も彼の命名だそうで、そのせいであろう、

ろで、彼らが百年前の彼らであることに変わりがあるうか。

單純明快なスローガンがあれば、人はこれだけ興奮する。目をきらきらさせ、口角あわをとばす。だが、いくら威勢がよくても、蟻ありはやっぱり蟻である。新しい主人を選ぶつもりもなく、あつというまにその手下にされ、事の意外にはじめ驚き、たちまちそれに甘んじて、改めてべつのテーマで、口角あわをとばす。

あんぽんたんにつける薬はないと、私が言うのではない、わが内奥にひそむ足輕の大將が、見えざる別の大將の手のうちを忖度そんたくして、あざけるように言うのである。

隣人の言葉と表情に、同一の危惧<sup>きぐ</sup>を発見して安堵<sup>あんど</sup>し、ともに感動したと、互いに認めあうのである。ついでに、妻子に教えてやろうと、カメラに写しとるのである。

由来、観光客というものは、トマス・クックの口車にのせられ、八十日間世界一周とは、古人の企て及ばぬ新企画だと、大金を投じてこれに参加し、世界中を駆けずり回り、脳裡<sup>のうり</sup>にイタリヤもスペインも一緒くたに記憶し、満悦<sup>か</sup>し且つ吹聴<sup>ふいちよう</sup>してやまないものだ。それでも何やら心もとなく、帰ればみんな忘れやまいかと、我と我が脳ミソを疑い、パチパチ写真ばかりとっているものだ。カメラというものは、その不安を慰撫<sup>いぶ</sup>し、解消するためのものおもちやだと、私はかねがね信じている。

これら今人の夥<sup>おびただ</sup>しい愚行は、歩かなければ風光は存在せずと、いずれ気がつかぬかぎりは止<sup>や</sup>まないだろう。

それはさておき、近代の文学に自然描写がすくなくなつたのは、右と関係があるようだ。汽車、自動車、飛行機——交通機関の異常な発達は、文学のなかから自然を放逐した。独歩や花袋はわらじ踏みしめ、武蔵野<sup>むさしの</sup>を歩いた最後の人だ。今後自然は、文学のなかにあらわれること稀<sup>まれ</sup>れであらう。

現代生活に於<sup>お</sup>ける自然は、どこに去つたか。

山のぼりに去つたようである。アルピニストは、死ぬまで脚で登攀<sup>とうはん</sup>してやめないで

岸には彼の碑が建っていた。

案ずるに桂月は、歩いてこの地にいたったのである。わが一行は、飛行機と自動車とここにいたったのである。うんざりするほどの景勝を見せられて、私はようやく景色は歩いて見るものだということをしとった。

歩いて、五尺の身長で、両の肉眼で見て、はじめて風景である。長途の山径やまみちを行きなやんで渴きにたえず、ようやく発見した泉だから、天の美祿びろくに似るのである。ついに峠に達して、視界たちまち開けて、洞爺湖が丸見えになって、はじめて絶景なのである。

自動車では駄目である。道にまよって今晚は野宿かと、覚悟する恐れはない。スケジュールに狂いがなく、万一あれば、客はバス会社を相手どって、訴訟でもおこすくらいが関の山だろう。車内でビールやコカ・コーラをのみながら、何とかの泉も、天下の嶮けんもないものだ。あるのは次のような心配と誤解ばかりである。

いま眼前にある風景は、古人が驚いた絶景だから、今人も当然驚かなければならない。ところがさしたる感動がない。ひよつとしたら、これは自分たちが鈍感だからかもしれないぞ。

客たちはそれが不安だから、口に出してその景觀の美をたたえ、隣人と顔見あわせ、

## この国

小学生のころから、古本に親しんで、そのため明治の言語、風俗、物価を知ったと、以前私は書いたことがある。

私の父は読書人だったから、家に新旧の書物があつた。だから、手にしたのは古本ばかりではなかった。新刊の諸雑誌も見た。

今もそのころに変らないが、当時の総合雑誌そうごうには、巻頭論文というものがあつて、それはすこぶる難解だった。

読書は登山に似ているといわれる。登るに困難な山でなければ、それは登るに値しない。難解な字句につまずきながら、ついに理解に達して、はじめて読書である。山登りに似ているといわれる所以ゆえんである。

だから、晦渋かいじゆうは必ずしも咎めるべきではない。第一、こっちは六年坊主ぼうずだ。わからぬのは先方が悪いせいではない。こっちは幼稚だからにきまっていると、はじめは私

あろう。ケーブルカーが普及して、それで山々を征服したと称する大群が、もし生じたとしたら、彼らは驚き、やがて白眼視するにちがいない。そしてケーブルのない無名の山をさがしだし、一人でのぼるようになるだろう。風景を知るものは、ついに私のきらいな登山者だけになるのではないか。

汽車が開通して、なん十年にもなるというのに、東海道人種と呼ぶべき人が、まだいるそうである。開通以来、多く廃駅となった旧街道五十三次を、いまだに徒歩で歩き続ける人たちがそうで、彼らは互いに顔見知りで、すれちがえば挨拶あいさつをかわす位の仲だそうだ。東海道の風物にとり憑つかれて、歩き続けてやめない人だという。

登山とちがつて、これには花々しい成功というものがない。遭難して、新聞紙上をにぎわすということがない。だから誰も知るものがないが、たぶん今も歩き続けているはずだと、むかし岡本かの子女史が書いていた。

温泉宿ことごとの悉ことごとくは、いまデパートみたいなのになつてゐる。ドアを押してはいれば、なかはお定まりさだの数寄屋すきやまがいの座敷である。これは熱海も箱根も、九州のはてまで行つても同じことだろう。そんなら何も、北海道くんたりまで出張するものはないと、とつぜん私は東海道人種を思いだしたのである。

なろう、私はそれに抵抗する最後の一人になるかもしれぬと覚悟した。

ことわっておくが、私は漢字に恋々たるものではない。恋々たるほど、知りはしない。これよりさき私は、平仮名ばかりの十返舎一九や、式亭三馬ぶろの読者であつた。

巻頭論文の筆者の徒は、地方人にきまっていると、「浮世風呂」の読者である少年は断じた。

たとえば「ぼくは、あなたを、愛します」とは、翻訳語ではあろうとも、国語ではない。これを地方出身の小説家が、作中の男女に語らせたので、同じく地方出身の学生は、東京ではすでにこれが発声されていると誤解して、上京するや否いなや、早速使つてみて、そのため実際に流通するにいたる——

私はほとんど、とびあがつた。ぼくは、あなたを、愛します、とは何事だろうと腹をたてた。たぶん今でも、いくらか敏感な男子は、これを口外しないはずである。その言葉は彼の口のなかでもぞもぞ出洩るはずである。

言語に鈍感なゆえに、はからずも、彼らは国語の破壊者となつたかと、私は軽侮の目でみるようになったが、あるとき彼らが、「わが国」といふべきとき、必ず「この国」と書いているのに気がついて、激怒した。

たとえば、彼らは「この国の文化のありようは——云々うんぬん」と書く。

は辛抱した。

ところが、一兩年たつても、なお難解なのに、私は業を煮やした。これは先方が悪いのだと判断した。

当時私は、硯友社の読者だった。紅葉山人の諸作は、「字義を尋ね、熟語を訊すとせば、高等の教育あるものも、解釈を易しとしない」と門下の鏡花が書いている。その紅葉がわかつて、これがわからぬのは、何か「曰く」があるにちがいない。文脈のせいだと、私は気がついた。

兆民、秋水は文人である。社会主義者も、秋水までは風流を解した。その文章の根底には、父祖伝来の漢籍があった。

ところが、巻頭論文の筆者には、それが無い。かわりに西洋がある。

彼らの文は、範を西洋にとり、それにしたがって書いたものである。大学の教室で、テキスト（原書）片手に学生にする講義を、そのまま活字にしたものである。怪しき訳読の文章で、読者は教授と同一のテキストを持ち、それと対照してはじめて理解できるといふ代物である。原書を離れ、日本語として独立できるものではない。

私は、彼らを国語の破壊者とみた。そして、年長者の多くが、巻頭論文の愛読者であるのをみて、驚くと共に、二十年後は彼らの天下で、国語はすべて巻頭論文の如く

二十年後のいま、「青年」であり「老年」である。「与党」であり「野党」である。「親米」でなければ「親ソ」である。

弱年の私は、夙<sup>つと</sup>に何ものかに魂を売りはらった、論客の弁論の巧緻<sup>こうち</sup>を憎んだ。これを敵にすることは、全文化人を敵に回すことだと承知して、爾来<sup>じらい</sup>私はまったく孤立したのである。

それは彼らの悉くが、日本人であることを恥じているせいである。彼らは、その身長と鼻が低く、顔色が黄色いことを恥辱に思っている。腐臭を放つ政治と、貧困下にあることを情けなく思っている。

成らば来世は、外人に生まれてきたい、それが叶<sup>かな</sup>わぬから未開、野蛮なこの国に住んではいるが、精神だけは西洋人と同一のレベルにある。

それを暗示したいばかりに、この国、と書くのである。この国とさえ言えば、異邦人がわが国を指して言っているように聞こえる。

この人、あの人と呼べば、呼ぶ人と呼ばれる人との間には、明らかに距離があると知れるのを活用したのである。

奸<sup>かん</sup>智である。私はさっき彼らを鈍感だといったが、はじめてこの一語を採用した論者の如きは鈍感どころではない。

この種の敏感と、この種の奸智がなければ、わが国のインテリの仲間入りはできない。

知識人の頭脳は、一国の頭脳だといわれる。わが国の知識人は、肉体は日本人に似て、魂は西洋人に似ている。

私は思潮の左右と関係のないことを言っているのである。巻頭論文で育ったものが、

もらしければらしいほど、期待は裏ざられる。読み終つて、その記事を承認しなければならなくなれば、いよいよ不満は増大する。

読者はてんから、そんな話は聞きたくない。求めているのは暴露である。醜聞である。たといそれが誇張であろうと、うそであろうと、その方を本当だと思いたいのである。俗に「真相」と称するものは、たいていこのたぐいである。

読者は常に、やっぱりそうか、と思いたがつている。それに迎合しなければ、敏腕なジャーナリストとは言われぬ。

今では「下山事件」は自殺らしい。自殺説が有力になったのは、椿事ちんじから半年もたつてからのことである。事件の当夜、現場へかけつけた刑事の一人は、自殺だと直感したと語っている。

彼が直感し、語つたのは、当夜である。だが新聞紙上に印刷され、且つ認められたのは、他殺説が衰えた半年後のことである。それ以前に、自殺説を公表するのは危険であつた。公表した新聞もあつたというが、読者はこれを認めなかつた。読者は常に、気にいらぬ説なら認めぬ。読んでも記憶にとどめないのである。

この認めることと認めないこと、喜ぶことと喜ばないことを弁別して、認めないことを書く愚を犯さないのが、なん百万部を売るに必要な、ジャーナリストの手腕なの

## 迎　　合

画商の打ちあけ話、という読物を読んだ記憶がある。画商自身が書いた記事だから、それはむろん画商を攻撃してはいなかった。さりとしてむやみと我が田に水をひき、画商は清貧にあまんじて、美術のために尽しているとも書いてはなかった。つとめて冷静に、客観的に、画商は決して暴利をむさぼるものではない、紳士的に商売していると、納得させるように書いてあった。

一読して、私は面白くなかった。釈然としなかった。そしてこの記事の読者の大半は、やっぱり面白がらないにちがいないと思った。

人は画商はばろい商売だと思っている。だから、画商の打ちあけ話を読むときは、期待している。はたしてあくどく儲<sup>もう</sup>けていると、その期待にわをかけて、立証してもらおうと望んでいる。

だから記事が公平なのが気にいらないのである。暴利でないことの証明が、もつと

うやら彼女は撲殺されたのではないらしいとわかって、反省すべきは政党で、新聞ではない。

けれども、百万読者に、てつきりと思わせるのは、常に新聞である。新聞はこうしたムードとかいうものを作りだす。事件の当夜、万一記者のひとりか非・殺害説をとなえても、それが認められないほどの雰囲気をつくりながら、あとから非・殺害説を掲げて平然としている。

オリンピックも同じ。時代遅れの号外まで発行して、自ら騒ぎたてながら、大騒ぎするから選手は緊張して勝てないと、ずうずう図々しくオリンピックごとに書いている。

むかし新聞は、一九三×年の危機を説き、A B C Dラインの包囲を書き、大国の経済封鎖を難じ、このまま推移すれば、大戦は不可避だと、連日書きたてた。

戦争を期待した記者は、一人もなかったから責任はないと、負け戦のあと彼らは書いた。

たぶんそうであろう。けれども当時は皆さん書きたてて、読者を圧倒し、大戦は必ずだと思わせ、思いこんだ読者に、こんどは迎合して、争って大見出しをつけたのである。

それは、陸海軍人の強制によるという。

である。

意識して迎合すると言つては、言いすぎかもしれない。敏腕な記者とは、衆に先んじて「やっぱりそうか」と、心底から思うものことなのである。

下山事件の前には「平事件」があつた。共産党が何かすると一般に信じられていた。だからてつきりと、記者も読者も思つたのである。

「アカハタ」は商業新聞の報道は、みんなうそだと断じている。左右の新聞のうそには甲乙がないと、私は思っている。読者が記者を束縛してジャーナリズムに虚偽を強い、敏腕記者がそれに迎合して、両者にその自覚がない——そういう記事を毎日見る。

右はほぼ十年前、下山事件がまだなまなましいころ書いたものである。今では、あの事件は迷宮に入った。例としてあげるには適當でないようである。

だから、安保騒動の女子学生の死をあげる。彼女の死は、事あれかしと待ちかねている、読者をたいそう喜ばした。てつきり警官に殺された、と思えたからである。野次馬ならそう思うにきまつている。むろん読者も記者も野次馬である。撲殺したのは警察官だと、野党はただちに声明書を出した。新聞は嬉々としてそれを掲載した。

声明を発したのは政党で、新聞はそれを報道したにすぎない。だからあとから、ど

秋刀魚さ ん ま

朝日新聞に、「ひととき」という婦人だけの投書欄があつて、あるとき、そこで秋刀魚について論じていた。

なんでも、その直前に、かぶつぎきよかた 鍋木清方老が、ラジオで、昨今の秋刀魚の悪口を言ったのだそうで、焼いてもろくに煙が立たない、においがしない、もうもうたる煙と、したたる脂と、あぶら 鼻をつくにおいがあつて、はじめて秋刀魚である。戦後は秋刀魚の味まで落ちたかと、嘆いたらしい。

「ひととき」の女流は、それに反駁して、はんぱく とかく老人は昔をほめたがるが、秋刀魚焼く煙とにおいまで、今は衰えたとは笑止である。秋刀魚は依然たる秋刀魚である。老いて五感が鈍っただけではないか。

——古いことは知らないが、秋刀魚のことなら覚えてゐる。清方説はもつともである。この婦人は一家の主婦だというのに、秋刀魚の味とにおいと忘れたとみえる。

そんなら今は誰の強制によるのだろうか。野党にその力があるのだろうか。習性となって、ジャーナリズムは、常に何ものかに迎合せずにはいられなくなっている。読者がそれを望むと予断して、よしんばそれが架空であつても、それに対して迎合せずには一日もいられないのである。

大新聞の商業主義は、いずれ我々をどこかへ連れ去る。ひょんなところへ連れて行って、やがて再び、そんなつもりはなかった、と言うのであるか。

りも目で食べる。

魚屋の店さきのぶりの切身は、三十円が相場らしい。人けのないときに聞くと、同一の切身で九十円のが奥にすこしあるという。

ためしに買って、三十円と九十円のちがいを問うと、魚屋は言を左右にして答えない。再三買って、なじみになったら、実は三十円の方は冷凍で、九十円のほうは新鮮なのですと教えてくれた。一見全く同一だから、誰しも三十円の方をお買いなさる。

九十円のを店さきに出せば、その差の由来を、一々説明しなければならぬ。すれば、わが店の魚は、みんな冷凍で、鮮魚は一尾もないということが露見してしまう。だから、いつぞや、ビキニまぐろの大騒ぎがあつたとき、店のまぐろは、一、二ヶ月前の冷凍ものだから、ぜったい安全ですと、実はのどまで出かかったが、よいきなことを言っていたいものやら悪いものやら、結局言わずじまいで、損だかとかかわからない思いをしました、と言う。

たぶんそんなことだろうとは察していたよ、と私。この九十円の切身だって、やっぱり怪しいのではないか。ただ四、五日の冷凍と、一ヶ月以上の冷凍のちがいがあるだけなのではないか。要するに冷凍倉庫栄えて以来、東京では誰も鮮魚は食べていない。そして二十余年になるから、魚の味は忘れられ、魚屋どもはそれをいいことにし

いまの秋刀魚は、むかしの秋刀魚とはちがうもので、打ち見たところ、ぴんとそりかえって、黒く新鮮ではあるが、あれは実は、去年の秋刀魚なのである。

築地の魚河岸うおがしに行つてごらん。ビルの如き巨大な冷凍倉庫が林立している。それは魚を冷凍して、いつまでも保存する倉庫で、シユンの魚がむやみにとれたら、それを貯蔵して、すこしずつ売って、市民に毎日、安い魚を提供するのを目的としたものだが、ちかごろ魚がシユンにとれたためしがない。

どういうわけか、九十九里沖で、秋、秋刀魚がとれない。

夏とれる。春とれる。そのうち春も夏もよりつかなくなつて、伊豆の沖で網にかかったと聞いたことがある。

ぶりも同じ。にしんも、まぐろも同じ。暖冬異変のせいか、思いもかけぬへんなところで、へんなものがとれる。

夏の秋刀魚は、食えたものではない。けれども大漁は大漁である。そしらぬ顔で、倉庫に貯蔵して、やがて秋になると、今とれたもののように売出す。冷凍法が完全で、それは今朝銚子沖で網にかかったようだが、新しいのは形骸けいがいだけで、魚の魂魄こんぱくは去つて久しいから、いくら焼いても昔ながらの煙はたたない。脂は出ない。

清方老はそれを怪しんだが、一家の主婦は、新鮮そのものの姿にあざむかれ、舌よ

私は人みしりするたちで、はかばかしい受け答えはできないから、彼はひとりしゃべったのである。言うところは奇矯ききょうで、想像と現実とが入りまじって、なんだか私が言いそうなことを、私がきかされているおもむきがあり、しまいにおかしくなったが、居酒屋では、ままこんなことがあるものである。

秋の夜長に、ちと酩酊めいていした男の話の聞書きである。真偽のほどは私も知らない。

ているのではないかと言ったら、ま、そんなところです、私のように親の代からの魚屋は、世も末かと思つていますと、懽然<sup>がぜん</sup>としてその魚屋は答えた。

さきごろ牛肉の鐘詰<sup>かねづめ</sup>は、なかみは鯨か馬肉だと、日本中で騒いだことがあるが、騒がなければ区別できるものがない。親子<sup>どんぶり</sup>井の鳥肉は、おおかた兎<sup>うさぎ</sup>だと聞いたことがあるが、これも聞かなければわかりはしない。

それより、肉屋は、もっと奇怪な加工をしている。並の牛肉、あるいは馬肉に、脂身をプレス——機械で、まんべんなく、ぐいとプレスして、赤い並肉に白い脂を点々と挿入<sup>そうにゅう</sup>して、一見「しもふり」にしている。町の肉屋で、しもふりと称して売っているのは、こうして贗造<sup>がんぞう</sup>したものがもっぱらで、これなら立派な詐欺<sup>さぎ</sup>だが、冷凍の秋刀魚も、冬、きゅうりやトマトのたぐいを売るのも、味もそつけない点では選ぶところがない。

テレビのおばさん料理が信用できないのは、野菜や魚介の真贋を、区別することすらできぬ身で、人を指南するからで、それを作つて、リビング・キッチンとやらで、夫婦さしむかいで食べるのが若い者の理想だとは、あわれというも愚かだと、ある晩、ある居酒屋で、ひとりぼつねんと酒をのんでいたら、隣席の紳士風の男から、しきりにこんな話をしかけられた。

物を見るときは、自分も西洋人のつもりだから、いくら異人が出てきても、驚くものはありはしない。

子供心に、私がショックを受けたのは、この点である。以来私は映画館の暗やみのなかで、しばしば日本人に帰った。そして画面の西洋人をまじまじとながめた。

いまから五、六年前のこと、「我らみな人間家族」と題する、写真の大展覧会があった。ヒューマニズムあふれる写真ばかりを、一堂に集めたもので、その代表作として、黒人の家族の写真が好評だった。

それは、黒人の一族に赤ん坊が生まれ、黒人の父母が大喜びする瞬間をとらえたもので、その表情は、我々と寸分たがわない。だから、我らみな人間家族——元来、人に黒人と白人の差別があるうか、四海みな兄弟だというほどのテーマであった。

私はそのとき思ったのである。カメラマンは西洋人だ、と。すなわち、一段劣った黒人でも、赤ん坊が生まれるときは、やっぱり白人と同じ表情で、同じく喜ぶのを、はじめ奇異に思い、たちまちそれが当然だと気がついて、これをテーマにしたのだ、と。

この写真展は、ぐるぐる世界中で興行されたと聞く。してみれば、どこかで黒人の目にも触れたろう。

## 百年目

私の母の母は、今年八十いくつかになるばあさんである。そのばあさんから、むかし、西洋ものの映画を見て、たいそう面白かったと聞いたことがある。

当時、生意気ざかりだった私は、さっそく聞きとがめた。おばあさんは、歌舞伎しか見物しないものときめていたから、どこが面白いのかと、からかい面に聞いたのである。

おばあさん曰く、西洋ものには、西洋の景色と、異人さんが出てくる。だから、あれはあれで面白いんですよ――

映画は物語を見るものときめていた私は、ぎよつとなった。わがばあさんは、メロドラマのなかに、西洋の風景を觀賞している。異人の生態を見物している。

今も昔も映画の西洋もののなかに、外国人を見る人はない。ただちに物語に接して、人種の差別を忘れている。というより、てんから異国の話だとは思っていない。西洋

動しなくてもいいのではないか。

その感動の神速なことは、私に人間の類推力の有無を疑わせた。見物一同が、たちまち感服したのだから、それは文化人ばかりの咎ではない。文化人は我々の選手で、彼らは我々の感覚を出ることができないとすれば、我らみな文化人である。

旧幕のころ、はじめて紅毛碧眼こうもうへきがんの毛唐人を見た我々の先祖は、近づいてその手足に金色の毛がはえているのに驚いた。禽獸きんじゆうに近い彼らに、親子夫婦の愛情があらうかと疑った。

同じくはじめて日本人を見た毛唐人は、我々の顔がすべて黄色く、平板であるのに驚いた。かくの如き人種こゝとに、美男美女があらうか、と怪しんだ。

いまでは西洋人に愛憎の有無を疑う日本人はない。日本人に美男美女があることを、知らぬ西洋人もすくないという。

それなら、黒人にも美男美女があるはずだと、誰か一人が言いだせば、承知しないわけにはいかない。

理詰めだから、しぶしぶ承知するのである。けれども、それは承知したくないことだから、たちまち忘れる。私が人に想像力はおろか、類推力さえないかと疑うのはこのゆえである。

そのとき、黒人ならどう感じたろう。白人と感動を共にして、これにヒューマニズムがあふれていると見たらうか。

写真のテーマに悪意はない。写真師はみずからこのテーマに酔い、それは周囲に伝染し、激賞され、握手され、彼は己がヒューマニティを信じたにちがいない。ほめたのはすべて白人仲間であると、白人である彼が、気がつかなかったのは是非もない。けれども、この写真師は、本国で行なわれた展覧会場から一步出て、街頭で靴をみがかせ、その靴みがきの黒人が、画中の黒人と同一であることに気がついただらうか。彼と我は兄弟だと思つたらうか。

私は写真師を咎めるつもりはない。近ごろヒューマニズムと称するものが、およそこの手のものだとは承知している。

私が言いたいのは、むしろ朝野の名士のことである。わが文化人が、異国の写真のテーマを、ただちに了解し、感動を共にしたことの早さである。それは、この写真を、西洋人の目と心で、見物したために生じた結果のようだ。それなら、驚いていいことのように思われる。

黒人も同じく人間だと、驚くほどの白人なら、日本人種も同じく人間かと驚くかもしれない。それは想像に難くない。それなら、このテーマに、我々は間髪をいれず感

## 夢で女に

ある朝、めざめたら、私は女であつた。気がついてみると、私は女になっていた。私は女になりたいと願つたことはない。それなのに、いま女になった自分を見ると、なつたのは当然のような気がする。さしたる不満をおぼえないのは、やはりひそかに、それを願つたことがあるためだろう。

男であるころの私は、世をはかなんでいた。若い女の多くが、嬉々<sup>きき</sup>としてゐるのが不思議であつた。それはおそらく、ナルシズム（自己崇拜）の結果だろうと推察していた。男によつて己が容姿をたしかめ、自分を崇拜する男の言葉だけに耳を傾け、嬉々としてゐるのを、半ばあわれみ、半ばうらやんでいた。

だから私は、さつそく鏡の前に、かけよつた。

私は女になった自分を、つくづくながめた。めずらしかったのである。

あたりに人かげはない。鏡の前で、私は私の顔を、あらゆる角度から検討した。

西洋人のほうでは、誰も我々を真の仲間だとは思っていないのに、我々だけはある。だから排他的なれ、と言っているのではない。この世は奇怪事に満ちてはいるが、これはいつから生じた不思議であるか。

わがばあさんが、映画に西洋人の人情風俗を見ると言っ、私を驚かしたのは二十余年のむかしであった。

今年の日米修交百年祭——わが国が開港して百年目だという。

私は尻をなでた。いつのまにか、私は風呂場<sup>ふろば</sup>に立っていた。明るすぎる風呂場である。次の間に大鏡がある。

私は、すでに、まる裸であった。尻に手のひらをあてると、驚くではないか、私の尻は、たなごころにかくれた。

私は私の尻の小さいのに落胆した。

けれども、手のひらにかくれるほどの尻を、珍重する男もあると、聞きかじっていたのを思いだして、わずかに心をなぐさめた。

私はおそろおそろ胸を見た。どうせ太ももの細い女である。巨大な乳があるはずがない。

はたして、私の乳は小さかった。洋服を着れば、ぺちゃんこに見えるだろう。

ブラカップ（義乳）をつけようか、と思った。一瞬、屈辱に似たものを感じた。

乳首は赤く、あざのようだった。いぼのようだった。わずかに上をむいて、もてあそぶと指にしたがったが、離せば旧に復した。私は乳首が黒くないことだけに満足した。

いつのまにか私は、大鏡の前に立っている。顔だけは前を見て、身をよじって、私は私の背中を映そうとした。脚と尻とのつながり、尻から背にかけての、弓なりの曲

それは必ずしも醜くはなかった。目鼻だちはととのつて、うまく出来ている方だ。人は或いは美人だというだろう。けれども、私は私を美人だとはみとめなかった。私は私の好みにあわなかったのである。

私は、腕をのばした。それは細く、あお白く、棒のようで、ぜんたいはうす黒い毛におおわれていた。

かつて男であつたころ、私の腕には太い毛が生えていた。カフスのあたる部分のそれは、すりきれていた。いまは、かえつてまんべなく生えている。

けれどもそれは、黒いとはいえ細く、うかつな男なら見のがすくらいのものである。私は私が、毛深い女、剛毛におおわれた女でないことに安堵した。

私は足を見た。のばして、まっすぐにしてみた。

足は細くすわりとしていた。靴下をはけば、ふくらはぎの細さは理想に近い。

けれども、大腿部が太くない。

足は、ふくらはぎが細いのを上乘とするが、ももに至つて、にわかになくならなければならない。

ところが、ももまで細いのである。妙齡だというのに、ももまで細くてどうしよう。それに、このお尻の小さいこと。

させないことを、私は半ば喜び、半ば喜ばなかった。

私は彼らに、身をまかせなくてよかったと思った。あんな男たちにまかせるくらいなら、老嬢でいよう。

私は私が男であつた当時、男であることに絶望していた。いま女になって、ふたたび絶望しようとは――

私は、口に冷笑をうかべた。私が男を逆上させないのは、折々うかべるこの冷笑のせいである。それにもかかわらず、いれかわりたちかわり、なお言い寄る男があるのは、彼らが鈍感なせいである。

いつか私は、まる裸で腹をたてていた。

私は雪国で所在ない正月を送ったことがある。こたつの中でみた夢の一つである。

線を期待したのである。

それは、えぐったような彎曲<sup>わんきよく</sup>ではなかった。平板に近かった。やせて、背骨のありかがそれと察<sup>さつ</sup>しられた。

どこに女である証<sup>あかし</sup>しがあるう。これでは男とちがわないではないか。

私は、女が女である部分、男たちが追い回して争う部分を、見ようとした。はじめから見たかったが、恐れていた部分である。

私はかっと目をみひらき、重複した襞<sup>ひだ</sup>と、隠湿なその奥をのぞいたが、たちまち顔をそむけた。

男がこんなものを追及するのは、まちがっている。それは美とは無縁なもの、むしろ醜なるものである。白昼正視にたえるものではない。

私は、他の女たちが自信ありげなのをいぶかった。かかる醜怪をおとりにして、多くの男子を集め、その讃辞を自己の属性と誤解する女たちの生まれつきを怪しんだ。もしこれが天の配剤なら、天の配剤まで怪しまなければならぬ。

私は立ちあがって、鏡のなかの私を、ばつ悪そうに見た。紅白粉<sup>べにおしろい</sup>をつければ、これでも美人だという。

私は、私に言い寄る男たちの顔を想起した。彼らの讃辞のとばっちりが、私を増長

は、大隈の影響がみられる。大隈は維新の生き残りの一人で、演説の末尾を、一節ごと、あるのであるとむすんで、広く知られた人である。あるんではあるとは、あるがひとつよけいで、有無を言うなら、ある、だけでいい。大隈はそれだけでは弱いとした。あるのであると重ねれば、いかにもそれはありそうで、聴衆を圧すると考えた。

大辻は大隈の故智を学んだ。学ぶというよりもじった。あるんでは、活動写真には不向きである。デス、とした。「ボク、ソンナコト、知ラナイ、デス」とした。わざと「てにをは」をぬいたのである。大辻の全盛時代は、震災前後で、当時の浅草には、まだ、東京の言葉が残っていて、てにをはをぬけば、そのまちがいがおかし、弁士が意識的にぬいたとただちに分り、それだけで客は笑ってくれたのである。大辻の工夫は大成功だった。けれども、あとが続かなかった。客はしばらくは笑ったが、やがて笑わなくなった。

それが流行して、あたり前の言いかたになってしまったからである。知らないを丁寧と言えば、知りません、存じません、となる。知らないデスとはならない。ところが大辻あらわれて以来、人は知らないですと言って怪しまなくなった。

わざとまちがえて、人を驚かしても、それはわが国では永続きしない。我々はまちがいに対して寛容である。むしろ、まちがいが多ければ、それに従う。

大辻おおつじ司郎

大辻司郎の名は、まだご記憶であろう。無声映画時代は弁士、トーカーになってからは漫談家、のちに飛行機事故で死んだタレントである。

弁士としての大辻は、私は幼かったので聞いていない。「笑いの王国」なら見物している。寄席よせでも二、三度話を聞いたはずなのに覚えがない。

記憶に残るほどの弁舌ではなかったであろう。私には大辻が芸人としての命脈を、そのころまで保っていたのが、けげんであった。

大辻の成功は、疑いもなくその以前、弁士の時代にある。彼は、奇矯ききょうな言辞ごんじを弄ろうして、浅草の客を笑わせて世に出た。

それはたとえば、「お父さんと、お母さんは、夫婦であつた」というが如ごとき弁舌だと伝えられる。「てにをは」をぬいた解説だといわれる。

大辻司郎は、しばらく大隈重信おおくましのぶの書生だつたことがある。そのせいか大辻の話術に

リトレだかラルースだか忘れたが、フランスの辞書は、新しい言葉は三十年たたなければ認めないと聞いた。三十年たっても、まだ生き残っていれば、しぶしぶ収録すると聞いた。都々句る、茶漬るの如きはいずれ滅びる、滅びるべきだとみるアカデミックな態度である。

言語に保守的なら、思想も保守的だと思いたければ思うがいい。言語が伝統的であれば、前代と後代の仲は微妙に断絶する。言語は原則として保守的なものだ。新語、隠語、方言のたぐいは、べつにそれぞれの辞書があればたりる。アルゴ（隠語）辞典、パトワ（方言）辞典の如きが、かの地にはあるという。

むかしは病いは膏盲（こうこう）に入<sup>い</sup>った。膏盲は胸の内奥だそうで、病いが中<sup>ちゆう</sup>枢<sup>すう</sup>にはいれば、再起はおぼつかない。いまは病いは膏盲（こうもう）に入る。盲を盲にあやまって久しく、いまさらコウコウなんぞにはいつても、分る人はあるまいから、まちがいが多ければ、それに従うというのが、わが新聞の態度である。

一見理があるもののようなだが、はじめ魯魚<sup>ろぎょ</sup>のあやまりを許したから、こんな仕儀になったのである。範をアカデミックな辞書にとり、出所怪しい言葉を排斥してきびしければ、こんなことにはならなかっただろう。

タレントとしての大辻司郎の得意と失意、並びに彼が国語に残した影響を回顧して、

「話し言葉」「書き言葉」の二つは、「話す言葉」「書く言葉」を故意にあやまり、それを新感覚と思わせようと企んだものである。しばらくは耳新しく、いまは日常語と化したことはご存知の通りである。

昨今、婦女子の多くは、出れる、出れない、見れる、見れないと言う。たとえば電話口で、いま忙しくて出れないと、友達に断るが如きで、たまりかねて私は、なぜ出られない、見られないと言えぬかと詰ったことがあるが、よいしなことを言ったと、すぐ後悔した。

すなわち大辻の得意と失意を想起したからで、最近朝日新聞はこれを論じて、出れないは出られないの明らかな誤り、ただし、近ごろは出れないという者が多い、さらに多くなれば、新聞はそれに従う、云々と書いた。

言葉は動いてやまないものである。その流れに従うというのが、新聞と辞書の態度である。新聞のことはあとで言う。辞書がこれに従うとは奇怪である。

明治のなかごろ、都々逸を口にする、茶漬をかつこむなどのことを、都々句る、茶漬る、と言うことがはやったが、むろんこれらは四、五年で滅びた。当時の辞書が、これを採用したら、後世はその不見識をとがめたであろう。ところが、のちに辞書は、モボ、モガ等の新語を争って収録し、ついにはその収容量を誇るにいたった。

## 室内

「木工界」は、次号から、名を「室内」と改める。とつぜんのこと、びっくりする読者もあろうから、改題の由来を申上げる。

「木工界」は49号以来、面目を一新した。月ごとに読むにたえる雑誌になった。そのせいか、発行部数はいちじるしく増えた。

増えたのはいいが、木工の二字が、だんだん不適當になった。

木工といえば、人は家具だけをさすと思いがちである。ところが「木工界」はそれだけの雑誌ではない。建具も建築もふくむ。今までもそうだったし、これからもそうである。

木工はもと大工のことである。モクノカミといえば大工の親玉で、むかしは家具も建具も作った。今でも田舎へ行けば建具屋を兼ねる大工がいる。雪のあるうちは建具を作り、春さきになれば大工になる。

結局新聞を難ずるに終つたのは、今日我々の頭上に君臨しているのが、ほかならぬこの新聞だからである。わが変ちき論が、とかく新聞に及ぶのはこのためである。しばらくご宥恕ゆうじょを請こう。

新しい読者をさらに得るには、改題するに如くはないと、思いつたのは、三年前のことである。三年の間、しじゅう思いつめていたわけではない。ときどき口に出し、常には念頭にあったというほどのことである。

口に出して言うには、名なしの権兵衛<sup>ごんべゑ</sup>では不便である。便宜上「室内」と称した。「青い鳥」の作者メーテルリンクに、「アンテリウール」（内部）と題する脚本があつて、室内と訳されていたと承知する。それに因<sup>ちな</sup>んで、かりに名づけたのである。

アンテリウールは、インテリアのことで、外部（エクステリア）に対する内部のことである。だから、屋内でもいいのだが、屋内ではタイトルにならない。

インテリアと片かなにするのは、本誌には向かない。横文字には、日本語になるものと、ならないものとがあつて、エキストラは日本語になったが、エクステリアはならない。インターン（医者<sup>イサナ</sup>の卵）は日本語になったが、インテリアはならない。「ニユー・インテリア」という歴史の古い雑誌があるが、家具屋は舌がよく回らず、面倒がつて、インテリとかニユー・インテリとか略しているのを聞いたことがある。

試みに「室内」と名づけ、一年あまりたったら、だんだん慣れてきた。ほかに有力な候補がないまま、次第にこれに落着した。

そうときまつて、改めて見なおすと、この名は悪くない。調べてみたら、このごろ

兼ねないまでも、建築と建具は分離しがたい。座敷に調和して、はじめて建具である。建具だけが独立して美しいということはない。家具も同じだろう。

大工、家具、建具——今は別々にわかれてはいるが、もとみな同根の兄弟である。だから本当は「木工界」でいいのだが、世間はそう見てくれない。やっぱり、もっぱら家具をさすと見る。

いっぽう、家具、建築に使う材料は、木材だけではなくなってしまうた。このごろ新築のビルが購入する事務用家具は、たいていスチールである。ショーケースはガラスと金具から成る。木部はほとんどない。大工もブロックをあつかう。木材でない新建材が刻々にあらわれていることは、ご存知の通りである。

だから本誌も、ブロック特集、新建材特集を試みたが、タイトルが木工界だから、新しい読者がよりつかない。デザイナーの卵たちも、建築科の学生諸君も、無縁の雑誌だと思っている。

「木工界」の名が質実にすぎるからである。言にくいことだが、ものがなん十万と売れるには、軽薄な部分がなければならぬ。その部分に人が雷同して、はじめて大量に売れるのである。木工の二字は、スノップはもとより、本来読者たるべき人を拒絶する傾きがある。

本誌が迎合を事として、大ジャーナリズムになろうとして、古き読者をそでにするかと案じる人があるなら、その心配はご無用である。やっぱりくせのある雑誌にしかなるまいと、ひそかに私は思っている。

二字の題名はすくない。「美しい十代」とか「若い女性」とか、たいてい上に何かつけるのがはやりである。これには何もくっつかない。ただ「室内」と言い切って、いさぎよい。わずかばかり流行にさからっている点も満足である。

これなら、音楽雑誌、文学雑誌のタイトルにしてもいいくらいである。

すなわち、幅がひろい。「木工界」はせまかったから、こんどはちと広くしたい。むろん「室内」とは題しても、室外に触れないわけではない。家具・建具・建築をばらばらにしないで、室内にまとめるといふだけのことである。

建築の雑誌は、外観から内容に及ぶ。わが「室内」は、内容から外観に及ぶ。同じようだが、世間の関心は、外部から内部に移りつつある。建築から室内に向いつつある。新築は一世一代の大事だが、室内の装飾や模様がえなら、思いたったらいつでもできる。内部から外部に及ぶ雑誌が、一つぐらいあってもいいであろう。

ジャーナリズムは軽薄なもので、軽薄なところがなければ、売れないと言ったが、わが「室内」は軽薄を志し、あわよくばなん十万も売ろうとするものではない。私の目の黒いうちは、よしんばそれを志しても、成功することはないであろう。げんに「室内」というタイトルが、いささか流行にさからっている点に、満足しているくらいである。

だと、そのとき私は知ったのである。

さて、私は、まだ七十にはならないけれど、夢寐<sup>むび</sup>にも忘れないのは、婦人のことである。

人並みに私も、多少は婦人を知っている。眼前に彷彿<sup>ほうふつ</sup>とするのは、どうせ彼女たちの裸体である。ある者はやせてあお黒く、ある者は肥<sup>ふと</sup>って柔軟であつたが、そのさまざまな肢体を、まじまじと眺めて、私はそれが、私の求めていたものではないことを知ったのである。

女を知らぬ少年のころから、私には悪い予感があつた。私が求めてやまない婦人は、この世に実在しないことが、私には漠然とわかつていた。そして、はたして、その通りだったのである。

それというのも、私に女性崇拜<sup>へき</sup>の癖があるためである。いまだに、私は女性を崇拜している。したがって、蔑視<sup>べっし</sup>している、恐怖している。

一説によると、女性崇拜は、母親崇拜の転じたものだそうだ。してみれば、崇拜の念が去らないのも道理である。

女性恐怖<sup>とぎばんし</sup>と、女性蔑視については「ガリバー旅行記」に詳しい。この旅行記は、誤ってお伽噺<sup>とぎばんし</sup>だと思われているが、実は女性ばかりではない、男女を問わず、人間その

## わが女性崇拜

私は今年七十になるが、いまだに思いきれないのは「女」である——と、むかし、私は小説めいた文章の冒頭に書いたことがある。

どんな男も、それが男であるかぎり、死ぬまで女のことだけは思いきれぬと、私は固く信じている。

私ばかりではない。げんに諸君がそうである、たとえば、たちまち、その諸君は腹をたてる。

だから、私は、と、すべてこの私のことにして話すのである。そうすれば察してくれるはずだと思うのだが、読者はこれをあかの他人の話だと思っていたがる。ばかりか、語り手である「私」の、老醜をあわれみ、物語の筋だけを興がる。

陰に陽に、それは諸君のことだと、言い続けてみたところでむだである。諸君にそれを理解する能力が無いのではない。理解したくないのである。理解とは願望のこと

び追跡して、こんどは時々ほかのめすに氣をとられ、わき道へそれる。めすは手練手管の限りをつくし、またおすをわが身に惹きつけることに成功する。

その一擒一縱するありさまを、ガリバーは巨細に活写している。想像力を働かすまでもない。ヤフーに仮託して人類の女性を難じているのである。

一読して私はショックを受けた。女性の邪智奸佞を描いて、この右にでる文章があるうかと感服した。それからというもの、私はしばしばヤフーの幻影になやまされるようになったのである。

けれども、私の心中の女性崇拜の念は、消滅したわけではない。ただ、徐々に硬化し、すこしく異常を呈したのである。

私の理想の女性は、はなをたらしではならない、ひげをはやしてはならない、よだれをたらしではならない——と言えば、なんだ、語ってつばをはねとばす女なら、誰しも興ざめだから、ちつとも異常ではないと言われそうだが、実はわが恋人には、そもそも鼻汁がないのである。よだれがないのである。ばかりか、彼女ははばかりに行かないのである。

脱糞放尿はめすのヤフーのすることだ、わが理想の女性は、食べることは食べても、排泄することはないのである。そんなら末代までの便秘かと、我ながら一方では笑止

ものを厭悪<sup>えんお</sup>する毒悪な思想を盛った文章である。近ごろはやりの恐妻論<sup>こしよ</sup>の如きとは、類を異にしたものである。

わがビタ・セクスアリスを、かいつまんで語るには、この旅行記を借りるのが便利である。

ご案内の通り、ガリバーは船乗りで、彼は船出するたびに、へんてこな国へ漂流する。その一つに「馬の国」がある。

そこでは人間世界とは反対に、馬こそ万物の靈長で、その靈長である馬たちは、人類に酷似した「ヤフー」という動物を、家畜として飼育している。

どう見ても、ヤフーは人間そっくりである。けれども、この国では、馬のほうが主人で、人間みたいなヤフーは、犬猫同然の家畜なのである。

そのヤフーのめすは、ヤフーのおすを誘惑するだけが仕事である。めすはあらかじめ諸所に、妖しく臭<sup>にお</sup>う尿を放っておく。意味ありげにおすの回りを徘徊<sup>はいかい</sup>してその顔色をぬすみ見る。おすが狂奔して追跡すれば、その手をのがれるふりをする。危くつかまるどたんばになれば、ぽんとあと脚で蹴<sup>け</sup>とばす。

これをくりかえすからおすがあきらめると、こんどは婉然<sup>えんぜん</sup>たる流眄<sup>ながしめ</sup>をくれる。ガリバーには、それはいやらしく見えるだけだが、おすにはまんざらではないようだ。再

その思いが、このとき私を雷撃するのである。負うた子が、突然千鈞せんきんの重みになつて、見れば石地藏と化しているという話がある。

わが恋人は、常に石地藏になるのである。五尺三寸、十三貫の重みは、情欲がなければ、とても支えきれるものではない。無意識ではあろうけれど、彼女はぐいぐい私を押し込めている。ほとんどよろめきながら、一方で私はこの場の收拾に苦慮する。堂とばかり女を投げだし、いっさんに逃げだしたいのは山々だが、我からしかけた恋ではないか。何のかんばせあつて逃亡することができよう。

爾来じらい、私はこれを営業とする売女ばいたと馴染なじむにいたつた。彼女は初手からヤフである。どたんばになつて、化けの皮をあらわすものではない。

それにもかかわらず、薄暗がりで見ると、脂粉の香は素人しろうとの女と同じである。マックスファクターも資生堂も、玄人専用くろうとの化粧品なんか売りはしない。

故人徳田秋声は、令嬢も売笑婦と同じ「人間」とみて、区別しなかつたと美談のように伝える者があるが、私はいま売女どろきんと同衾どうきんして、その髪の毛が令嬢と同一なのに、かえつて狼狽ろうばいするのである。この決定的瞬間に、令嬢の幻影があらわれるのは迷惑である。

私はこの場を切りぬけるのに、しばしば窮して、突如としてアハハハと笑うことを

に思いながら、一方では真剣にこのことあるのが耐えられないのである。

少年の私は、大負けに負けて、わが恋人が、せめてそのために中座ちゆうざしないことをひたすら祈った。

けれども、女は中座することが多いのである。私は十時間排尿を忘れたことがあるが、女はそれをがまんしない。すでに我が事終る、といまひましく思つて、ひそかに勘定してみたら、一時間にいつぺんずつ、中座する女があつた。しかも、終始平然たる面もちで、ハンケチ片手に席にもどつて、なお恋を語ろうとうながすのだからたまげた。

たまたま私は、人前ではなをかまず、中座すること稀まれな女性にめぐりあつたことがある。逢あいびきの日には、朝から飲食を節する婦女のたしなみは、まだ全く忘れられてはいないとみえる。これこそわが理想の女性かと、なん日かなんヶ月かたつて、二人は人影もない廃園で、犇ひしと相擁した——と、まあ思召おほしめせ。

かかる夕べ、かかる肝腎かなめの時に、電撃のように私を襲うのは、あのヤフーである。事ここにいたるまで、彼女は私に有望だと思わせ、絶望だと思わせ、じらせ、あせらせ、そのあげく今ぐったりとわが腕のなかで半眼を閉じている。ヤフーと寸分たがわぬではないか。

っている。  
たぶん、七十になつても去らぬであらう。

思いついた。そして、親指と人さし指で輪をつくり、鬼ごつこのときの、あのタンマをすることにしたのである。

女は、ぱっちり、目をみひらく。

——何さ

——タンマ

——タンマって何さ

——これこれしかじか、だよ

この、これこれしかじかというのは、長々と理由を述べ、それを省略したのではない。文字通り、これこれしかじかと言うだけなのである。二人は顔見合わせ、げらげら笑うと、私を襲った幻影は退散してくれるのである。二人は共に、全きヤフーと化して、首尾よく醜骸相擁するのである。

むしろ売女に虚偽がすくなく、令嬢夫人にそれが多いから、私は彼女たちに親しんだのではない。令嬢夫人に恋をしかけ、どたんばでタンマはしにくいからである。

なんと私はこれを繰返したことだろう。けれども私は、私の内なるヤフーと、外なるヤフーが野合するのを、第三者のように、冷ややかに見ただけである。私の心中の女性崇拜の念は、なお消滅しない。それは執念く、れんめんと生き続けて、今にいた

——○○と××と△△と○○○へ。

たぶん忘れてはならぬと、朝から思いつめていたのだろう。社長は、念仏でも唱えるように、会社名を枚挙して、あつというまにすれちがった。私は持論を教えるひまがなかった。

昔は、用は一日に一つ足せばよかった。今は○○と××と△△へ、どんなにすくなくとも日に三つ、多ければ九つも十も足さなければならぬ。

まるで、保険の外交である。

どうして、こんなにいそがしいか。理由は簡単である。交通機関が発達したせいである。

つい六十年前までは、誰しも歩いて用を足した。だから、芝から浅草まで行くにも一日がかりだった。

人力車や馬車があったが、あれは贅沢<sup>ぜいたく</sup>だった。歩くのが一般だった。はるばる浅草まで来たのだから、ついでといつては申訳<sup>まじやう</sup>けないが、観音さまにおまいりする。わに、口の鈴ならして、おさい錢をぽーんとほうって、家内安全、無病息災、商売繁昌<sup>はんじやう</sup>。

——そのほか何やいろいろ願って、ようやく目ざす家へたどりついて、玄関ぐちで用件だけ話して、はいさよならというわけにいくものではない。そんなことをしては、

## 君子多忙

今は昔の、たとえば明治時代の、五倍いそがしいと、かねがね私はにらんでいる。五倍というのは、ものの譬えである。人によっては七倍、あるいは十倍いそがしかろう。とにかく、ただもう、減法いそがしい。

五倍いそがしくても、収入は五倍になるわけではない。つまりは損だというのが、私の持論である。いそがしいのをいいことだと自慢してはいけない、本当は悪いことなのだ、私は人ごとに説くが、誰も耳を傾けない。

このあいだも、国電の階段で、顔見知りの某社の社長に会った。会ったというよりすれちがった。私がおりて、彼がのぼろうとして、ちらと顔が見えたから会釈した。社長といっても、中小というより、零細事業のそれである。これもいそがしいほうの口だな、と思ったから、わざと聞いてやった。

——どちらへ？

出さないと、何事も範を西洋にとる論者は言っている。

猫もしやくしも、うちポケットに名刺と手帳を秘蔵している。忘れてはならぬと、それにぎっしりスケジュールを書きこんでいる。

死んだ東条元大將は、当時の手帳を紛失したから、何もわからぬと「東京裁判」で答えて物笑いになったが、今ではみんな大將だ。並の君子まで、大將みたいに多忙をきわめている。スケジュールに従って、とび回って、一日を終る。

常に手帳が満員で、寸暇のない人物こそ、一人前の人物である。なかなか満員にならなくて、時々ぽかんとひまができる連中は、人並以下で、それだけ収入がすくないから、従って時々細君にこづかれるという仕儀になっている。

私見によれば、それが交通機関の發達のせいなのである。

歩けば、日に一つしか用は足せない。ところが、電車がある、自動車がある、飛行機がある。

自動車をつかえば、明治時代の十倍奔走することが可能である。けれども、いくら奔走したところで、収入が十倍にふえるものでないことは前に言った。よしんばふえても、金の使い道のほうもふえている。はじめミキサ、やがてテレビ、電気冷蔵庫、ルームクーラー——あと何があるか知らないが、どうせ何か製造するにちがいない。

## 第一、失礼に当る。

まあおあがり、ということになる。あがれば茶が出る、菓子が出る。先方が先方なら、こちらもちちらである。用件はあと回しにして、まず床の間の一軸でもほめてみる。時分どきになれば——これはもうなるにきまっている——酒が出る、ごはんが出る。遅くなったら、今晚はとまっていけとすすめられる。そこでとまる。

これじゃあ一日に一つしか用は足せない。それがわかつているから、出る前に土産をととのえてきた。

けれども、世の中は、このテンポで動いていた。だから、誰も怪しまない。これでよかった。結構三度の飯を食って、月になんとか寄席<sup>よせ</sup>へ行つて、芝居を見て、団・菊・左などと評判していた。

今はそうはいかない。午前中に三つ、午後五つ、人をたずね、たずねられ、一億セールスマンみたいにかけずり回っている。

来たかと思えば、はいさよならして失礼ではない。いつそ来ないで電話だけですましてくれたら、どんなにありがたいか知れやしない、今どき電話じゃ失礼だなどと思うのは時代錯誤だと、新聞は難じている。だから、時分どきになつても、そば一つ出さない。まだ茶だけは出すが、これも近く廃止されよう。げんに、西洋の事務所では

惑をかけるのは、この種の人である。

明治の昔の貧困と、今日のそれとは、質的に相違したもので、電気じかけの貧乏こそ真の貧乏だと、仔細しさいあつて私は信じている。

証拠は山ほどあるが、くだくだしいから一つだけあげる。ラフカジオ・ハーンが、明治二十年代の婦人の一生、それも短い一生のなかに書いている。

この婦人は婚期を逸し、ようやく良縁を得て、まもなく三人の子を生むが、生むそばから死なれ、やがて自分も死ぬという薄倖はっこうの人である。

ご亭主は役所の下級吏員、六畳三畳の二間の家に住み、月給は十円くらい——いくら明治半ばでも、これは薄給である。

それにもかかわらず、彼女たち夫婦は、義理をはたそうと千々に心をくだき、そして立派にはたしている。べつに時々小芝居を見て、寄席に通って、夜桜を見て、祭見物をしている。事あるごとに神詣もつでして、兄弟、夫婦がいつまでも仲よく暮せるようにと祈願している。

どんな些細ささいな親切にも、感謝の念をいだいている。嬉しいにつけ、悲しいにつけ、歌を詠よんでいる。

買うべきものが、収入を追いかけて、追いぬくにきまっているから、ひと通り揃えて、これで安心というわけにはいかない。

それにもっとも不都合なのは、今どきテレビがなければ、それだけ働かないことの証拠みたいになることである。そんなことがあるものかと、いくら亭主が言いはつても、妻子が承知しないから駄目である。

だから、温厚な君子も、せめて電気がまくらいは買わなければならぬと、がらにもなくいそがしがって、何やら豆手帳に書きこんでいる。

かくて、どんな人も、今は昔の五倍はいそがしい。そのくせちつとも豊かじゃない。寄席も芝居も見るとひまはない。

常に何ものかに追跡され、ちやうど五倍だけ不幸になった。そのくせ不幸の自覚がない。

ばかりか、かえって地方人には困ったものだ、などと言う。

ながながと挨拶して、とまりこんで、この一週間ひまつぶしをさせられた、スケジュールは減茶減茶になったと、うらんでいるのはよく見る図だ。

東京をひと足はなれれば、今も昔と同じテンポで暮しているところが、まだある。

そこでは、玄関口で立話して、はいさよならでは失礼に当る。上京して、うっかり迷

明治半ばの貧困と、今日のそれとをくらべて、今日のそれこそ真の貧困だと、そのとき私は知ったのである。それもこれも交通機関の發達のせいで、これはますます發達するだろうから、人の不幸も従つて増大するにちがいないと知ったのである。

これを立証するには、私は堂々の論陣を張らなければならない。けれども、それはたぶん皆さんご迷惑であろう。

論陣なんか私も張りたくはない。いくら立証したつて、承知したくない人を、承知させることは不可能である。

だから、私はにやにやして、人は豆手帳にスケジュールを記入するために生きるものではない、そんなにいそがしいのは間違いだと言うにとどめているが、誰ひとり笑つて耳を傾けない。かく言う私を、さながらあわれむがごとく、さげすむがごとく見て、そそくさと来て、またそそくさと去つて行くのである。

歌を詠むからといって、彼女は高い教育をうけた人ではない。からくも小学校を出ただけの人である。

三番目の子は、生まれて八日目に死んだ。かきなる不幸に、彼女は己が悲しみから夫の心中を察し、あるいはこれを機縁に、夫の心は悪いほうへ傾くのではないかと案じている。「天命なれば是非もなし」と、夫はくりかえし言うのみである。

二人は、この世の苦勞は、すべて前世に犯した過ちの酬いだと信じている。非運に對するごとに、彼女はけなげにふるいたつが、三番目の子を失うと共に、力つきて死ぬ。

ラフカジオ・ハーンは、わが国を愛し、日本人を妻とし、やがて小泉八雲と名乗つて歸化した人である。

この手記は、もとの小泉家の奉公人が、この婦人なきあと後妻に行き、先妻の針箱から発見して、小泉夫人に示したものだという。八雲は感動のあまり翻訳したのである。

私がこれを読んだのは、生意気ざかりのころだったが、この婦人の謙讓と貧困に驚くとともに、それにもかかわらず、この時代は昭和十年代より物心ともに豊かだと気がついたのである。

だてして、異論をあざ笑う。

天動説が定評だった昔は、地動説は嘲笑ちようしやうされた。笑うだけなら無事だが、しまいには裁判にかけた。異端に一理あるのが心配で、それが高じると、こんなことをするのである。

異議を申立てるのが本来の書物が、売買の対象にならないのは、こんなわけからである。民主主義の昨今は、発言は自由で、天動説の大昔とはちがうというが、なに同じことである。

卑近な例だが、売春禁止法を支持するのが定評だったころ、悪法だと説くと、女はともかく男まで、さげすむような顔して見る。

悪法だという説に、よしんば一理あっても、大ジャーナリズムはそれを採らない。ジャーナリズムが売買するのは、いま支配的な、あるいは近く支配的になりそうな説だけである。

だから、昔は文章はただだった。世間の定評に反して、余はかく考えると、自費で出版して、友人知己に献じた。部数は百冊かそこらだった。それでも役人に見つかつて、逮捕されたり、裁判にかけられたりした。

よく売れる本、大勢に喜ばれる言論は、喜ばれることをあてこんで書いたものであ

## 日記のすすめ

私は日記をつけようかと思う。日記はこれまでもつけたことがある。十六七から二十二三までと、二十八九から三十三までの間の二回である。

前者は戦前で、後者は戦後である。日常茶飯事というのは、実はこの後者につけた題である。それを踏襲したものである。とうしゅう

そのころ私は、ジャーナリストとして衣食していた。ジャーナリストというのは、文章を売買する商売である。そして私は、文章は売買してはならぬものだと思得ていた。

書物は定評をくつがえすためにあるもので、定評に従って異存がなければ、発言はないはずである。沈黙して定評に従っていればいいのである。

異議を述べて、はじめて発言である。ところが、世間は定評が大好きである。それにくつついてさえいれば、安心だからであろう。安心するのは勝手だが、定評に忠義

私が日記をつけようというのは、以上といくらか関係がある。公開の席では言えないことを、このなかに書いて、そのうち不穩ならざる部分を、選んで活字にすれば、一挙兩得かと思うのである。

日常茶飯事は三十回になんたにするが、一回五枚、近ごろは十枚を、私はあぶら汗たらしで書いている。一文にもならない綴<sup>つづり</sup>方に、骨身をけずるのは奇怪だが、文章にはもともとこんな性質があるのである。その上私はサービス狂で、五枚のなかに、十枚二十枚の内容を、むりやり押しこもうとする。混雑するのを整理するのが、ひと骨である。

首尾よく交通整理して、読者に理解される見当がつくと安心する。

筋道を追って読む速力に、理解する速力が、かろうじて追いつくと、読者は釈然とする。追いついたことに快感をおぼえ、同時に、これだけ面倒くさいことが、早速わかったのだから、自分はいそ頭がいいと思ひこむ。

読者に花をもたせるのが、作者のつとめである。私はそれを志して、しばしば失敗して、意見された。

まずテーマが不適當である。由来、雑誌の主宰者が、巻末に書く埋め草は、修身<sup>せいしん</sup>齊家<sup>せいけ</sup>を旨<sup>むね</sup>とすべきである。しかるに貴下の説には、何やらインモラルな響きがある、も

る。むろんお金をもらうのだから、その言論はスポンサー（ひも）つきである。

個々にひもがついていと言うのではない。売買して、言論だけが金銭の束縛からまぬかれることはできないと言っているのである。

一方、巨万の読者は、強く作者を束縛する。作者はむしろ嬉々<sup>きき</sup>として束縛され、迎合しているのに、ほとんどその自覚がない。ひもつきだといわれると、怪<sup>あや</sup>しむほどである。

大新聞にたのまれて、その新聞の氣にいらぬことを書く馬鹿<sup>ばか</sup>があらうか。それを敢<sup>あ</sup>えて書いて、敢えてのせて、さすが良心的な文化人だ、新聞だと、思い思わせることがあるが、八百長<sup>やちやう</sup>である。

わが「日常茶飯事」だって、例外ではない。読者の不興を買う恐れがあれば、のせられないとこれでも私は氣を遣っているのである。

読者がふえればふえるほど、その氣遣いは多くなる。すなわち、買い手が多くなれば、束縛はふえるのである。

テレビと漫画が普及して、今後本は売れまいといわれる。私はひそかに喜んでいる。本は忽ち<sup>たちま</sup>百販売れない方がいい。売れなくなれば、文字と書物は、本来の面目をとりもどすだろう。

も私に吹聴するのだから、さすがの私もにが笑いした。ふいちよう

甲乙丙は、数すくない私の読者代表である。私は彼らを徳としている。ただし、乙には誤解がある。私は木戸銭を払ってまで、実験するほど酔狂ではない。万一、客のひとりが笑いだしたら大勢は雷同するにちがいないと思ったから書いたのである。言うまでもなく、フィクション（作り話）である。

二十七回まで、私はコラムのつもりで書いてきた。コラムなら詰めこんでも、許される。けれども、それは五枚位が限度だろう。十枚にぎゅうぎゅう盛りこんだら、読むほうはついてきてくれないだろう。

だから私は、前回では引きのばしてみた。

「君子多忙」では、言うべきことをすくなくした。

そしたら存外好評だった。旧知の光村オフセットの社長は、あれはよくがモデルかと言いに来た。国電の階段で、君に会ったことがあるかしらん。

〇〇書房主人は、君の前では、今後いそがしいとは言わないぞと宣言した。

経営さんたん惨憺したコラムが喜ばれず、すらすら来てすらすら去る随筆が喜ばれるとは、老評論家の教えの通りである。

だから私は、日記をつけようと思いたったのである。難解をもって鳴る巻頭論文の

つと青少年を裨益<sup>ひえき</sup>する文を書くようにと、一読者に言われた。

べつに、甲という美術評論家は、本来長いものを、短くしすぎるからわかりにくい。話題が転々と移動して、応接に苦しむ、肉薄してくる何ものかがあることはわかるが、あとは尋常の人には通じまい、努力して執拗<sup>しつよう</sup>をきわめるのは、異とするにたりるが、むなし。貴君と同じく、速水御舟<sup>はやみぎよしゆう</sup>は東京の人で、東京人はあつさりものを投げだすが、御舟は別派で、描いて執拗をきわめた。貴君は御舟を彷彿<sup>ほうふつ</sup>たらしめて、わけがわからぬといましめてくれたが、私はついに御舟に伍<sup>ご</sup>したかと、にこにこした。

乙は、ご苦労さまと言った。三勝半七酒屋の段、昔の客なら泣くところで、今の客は泣くかどうか、ためしに客席の暗がりで、声を放って笑ってみると、はじめ和しておずおず笑うものがある、続いて諸所に笑声がおこり、場内はどつと笑いくずれたと、話はドラマチックだが、わざわざ出張してまで、実験したとはご苦労だと、ねぎらつてくれたのである。

丙は、とびあがつてかけより、新聞論をもつと書け、いま頭のおさえてがないのは、新聞だけである、その増長ぶりは目にあまる、むかし新聞は我々を戦争にまきこみ、そんなつもりはなかったと、あとで書いた、ひょんなところへ、再び人を案内して、そんなつもりはなかったと、再び言う気かと、私の説をわが説と勘ちがいで、しか

はわからない。以前は威張ったくせに、心細いことを言うようだが、人間万事そうである。

いくらかでも本音を吐くのは、「木工界」の時代でも、実はいけなかったのである。読者の指弾を待つまでもなく、それは場所錯誤だったのである。それらはすべて日記に書いて、やがて忘れるべきものだったのである。

私には節度を越える、あるいは節度がよくわからぬという、重大な欠点がある。知って越える場合はいいが、知らずに越えているときはみじめである。この一文もあるいはそれを越えたかと、いま私は不安を感じている。

執筆者たちだって、葉書や日記ならさらさら書く。読めばすらすらわかるはずだ。

故人横光利一は、弟子たちに、随筆は書くなといましめたという。せっかく小説になるものを随筆にしてしまつては損である。小説家たるもの、随筆なんか書いてはいけない、書くなら小説の余りか、かすで書けと教えたという。

「けちのいろいろ」という文章を、そのうち私は、日記のなかに書こうと思う。横光のけちはその一つで、作者として徹底しているとも言えようし、創造力の貧困とも言えよう。どちらでもとりたい方をとつてくれ。

わが「木工界」は、改題して「室内」と称している。改題号は、一見大雑誌のようである。読者は急速にふえている。

してみれば、その束縛はふえるだろう。私は言動に気をつけて、「修養雑話」でも書かなければならなくなるだろう。

わが「室内」は、紙面の清潔なのが取柄である。デザインのとき「流行」をテーマにしながら、どこかに苦いものを蔵するのが特色である。

けれども、それも小雑誌でいる間のことである。大雑誌になれば、その苦いものは退散しなければならない。

退散すれば、私の雑誌でなくなるから、いまは退散したくないけれど、先きのこと

信じない人がある。それは私が幼稚なためで、幼稚な心をいまだに温存して、それが言動にあらわれるから、相手は次第に少年と対座していると誤解するにいたるのである。

一方、私が書くものは、何だかえらそうで、まるで威張っているようだ、あれで女が口説けるかしらと、実物の私を知らない読者は、心配するだろうと私は察するが、然りとすれば、その心配はご無用である。

女を口説くには、必ずしも弁論を要しない。だまっていっても、なびくものはなびくのである。弁舌をふるっても、なびかぬものはなびかぬのである。

その上私には、女難の相があつて、少年のころはジョージ・ラフトに似ているといわれたものだ。ジョージ・ラフトは、薄気味の悪いギャング役者で、たいていしまいに射殺された。次いでシャルル・ボワイエに、このごろは、勝新太郎に似ているといわれる。

前の二人なら知っているが、勝さんは知らないから、先日ようやく見物した。

見れば、鼻が小山のように高く、すこし腫れた<sup>は</sup>ような顔である。あんな人に似ているのかと落胆したが、この三人に共通点は何もないと気を取り直した。警察みたいに、モンタージュ写真を作ったら、それが私なのだろうか。

鴛えん鴛おう

うそかまことか、わが日常茶飯事の読者で、私の崇拜者で、且かつ妙齡の女性である某婦人雑誌の某女が、頃日遊けいじつびに來たついでに問うには、今度「男が結婚にふみ切るとき」と題する特集をする、ついでに貴下のふみ切った動機如何いかん、と。

「ノーコメント」と、私は言下に回答を拒否した。かさねて問うから、とても一言ではつくせない、それは延々たる物語である、いずれ当人が書くであろう、誤解を恐れて、いま口外したくないと言ったら、彼女は「けちねえ」と怨えんじた。私こそわが「けちのいろいろ」の主人公だと、ようやく気がついたのである。

そこで私はサービスして、わが夫婦生活の一端を述べ、ついでにわが女難を語って、一席のお笑いとした。閑談の常として、話は支離滅裂であるが、彼女は笑って機嫌を直したから、そのあらましを述べる。

——知つての通り、今でも私はしばしば独身者と見誤られる。妻子があると聞いて

ことがしばしばある。

枕<sup>まくら</sup>もとのスタンドは、おぼろに妻を照らしている。かすかな寢息をたてて、彼女は一心不乱に眠っている。以前はそれをいまいましく思ったこともあったが、今は眠るものは快く眠らしておく。

私はその寝相を、描写するにしのびない。ただ、ここに長々と横たわれるもの、そもそもこれは何ものであろうと、懷疑の念にかられる。

それは見知らぬ人である。どこから来て、どこへ去る人か私は知らない。あかの他人がわが家において、私のそばで寝そべっているのである。私はぎよつとして、あらゆる記憶、あらゆる理性を動員して、これこそわが妻だと思いこもうとつとめるが、やっぱり知らない人なのである。

なるほど私は彼女と会話を交したことがある。けれどもそれは、畳がえはいつするのか、洗濯屋がスカートを紛失した、ああそうかい、といったような問答ばかりである。私が私である所以<sup>ゆえん</sup>のものは、彼女は聞いても理解しないし、したくもない、と言う。

私が私である所以は、怪しい発言にある。変ちき論にある。それを認めなければ、私のところへ来た甲斐<sup>かい</sup>はない。好んで私のところへ来るほどの婦人だもの、どうせ尋

けれども、常に当代の人氣者に似ているなら、女たちが放っておくはずがない。花川戸の助六みたいに、煙管きせるの雨は降ったのである。今でも私と結婚したいと、直談判じかだんぱんに来る女が、貴嬢も加えれば、ひい、ふう、みい、よう、五人もいる。この分なら、ひそかに思っている女は、何人あるか分らない。

結婚は女から申込むものではない。あればかりは、男に申込ませるように仕向けるもので、それに私はもう結婚済みだと丁重にこたわつても、そんなことで引下るような者どもではない。もし離婚したら、先着順なら私が一番だ、あるいは二番だ、ついでには早く離婚にふみ切れ、別れるのが当世だと、理不尽なことを言うアプレたちである。

私は一夫一婦は根本に無理をふくむと見るものである。けれども、細君は一人でたぐさんだと思ふものである。とりかえたとて同じだから、面倒くさいと、別れないでいるものである。きつと、相手も同じであろう。

私は夜眠られぬ日が多い。眠らんと欲して眠れないから、蒲団ふとんのなかで酒をのんだり、かたわら子供の雑誌の付録である、漫画本を読破したり、いっそ綴方つづりかたでも書こうかと（げんに今書いている）、輾轉てんでん反側するのが常だが、ようやくとろとろして、古人のいわゆる残燈焰ほのお無くして影幢々とうとうたるころ、何ものかに驚いて俄破がぱとはね起きる

ある。

だからわが一友は、それを証拠に、細君が読まぬほどの文章なら、よくないにきまつているという論法で、私を攻撃する。

その説に一理あつても、私は認めたくないから、私の思考は男性的で、男の中の男でなければ理解できない、女に私の読者はない、万一あつても、それは中性に近い。逆に、男のくせに私を理解しないものは、当然女に近いと、向うが向うならこつちもこつちだ、怪しい論法で応酬するのである。

心の通わないのは夫婦の常だと、今は私も心得たが、以前はそれを残念に思つて、口では言わずに日記のなかに書いたことがある。

「彼女は昨日もネギのおつけを作った。今朝もまたネギである。明日もまたネギならん。これは一貫目買ったものの残りである。ネギ必ずしも不可ならず、ただ再三のを恐るのみ。その無神経なこと驚くべし」と、ざつとこんなふうにしたことに書いたのである。彼女がひそかにそれを読み、骨身にこたえたことは疑いない。

婦女子の好奇心は遠くへ及ばず、亭主のポケットか帳面くらいにしか届かぬから、言論では分らぬ細君を持つご亭主に、私は記帳をすすめるのである。

私は彼女に、警世の大議論をふっかけ、それを理解しないと腹をたてているのでは

常な女ではあるまいと、早合点したのが運のつきである。あとで、わが言論の如きは、ごと聞いてはいなかったと言われては、私はペテンにかけられたようなものだ。

それでは彼女は、結婚を就職とみて来たのだろうか。何ぼなんでも、彼女はそれほどいやしくはないと、私は断言する。してみれば、残るはこれまた近ごろ流行のセックス・アピールのみである。私のそれに魅せられて、心ならずも彼女は来たのであるか。

アハハハ。いくら私が自惚うんぼれが強くても、そんなものの持主だとまで言い張りはいない。

みじんも絵心のない婦人でも、絵かきであるその亭主の絵だけは、次第に分つて、ついには理解者になると聞く。操觚そうこ者の妻も、亭主の詩文だけは理解するという。モリエールは脚本を書くごとに、まっさきに妻や女中に読んできかせ、彼女たちが笑わぬ個所は、直ちに改めたという。すなわち、作者はその妻女を、無二の読者とする。大げさに言うなら、杖つえとも柱ともたのむのである。

ところが、わが細君は、わが綴方だけは読まない。読んでも分らないというのは逃口上で、興味がないのである。実は彼女は読者のカミナリ族で、「オール讀物」の如きは一晩で読破する。走るが如く、とぶが如く読んで、読まぬは亭主の雑誌ばかりで

全く口を動かさず、滔々<sup>とうとう</sup>と弁ずる方法をあみ出した。

これなら、目の前に知人がいても、耳に達しないが、よくよく見れば、そのとき私の目はあらぬ所をにらんでいる。

私はひとり弁じて、ひとり笑う。その長広舌は、いかな論客といえども敵しがたいほどのもので、我ながらほれぼれする。ひよつとしたら私は天才ではあるまいか、きつとそうだと思われるほどのに、悲しや、それは永遠に再現できないのである。

読者あるいは、わが年来の孤独を憐<sup>あわ</sup>れむかもしれない。憐れむがいい。あるいは、私がわが細君を語って冷酷にすぎると咎<sup>とが</sup>めるかもしれない。咎めるがいい。

けれども若き読者よ。わが孤独と、わが夫婦生活を、世の常ならぬものと思つてはいけない。三十年もたつてみてごらん。二人は依然として夫婦だから。そのとき世間の人は、鴛鴦<sup>ちぎ</sup>の契り浅からぬ目出たい夫婦だと、二人を評するにちがいないから。

ない。いくら私でも、婦女子とは世間話をするのである。けれども、私の世間話は、すこしく<sup>う</sup>紆余曲折する。その曲折ふりは、ごらんの通りしだらもないが、それが面白くもおかしくもないというのなら、女房でもなければ亭主でもない。別世界の人である。

人の心には、こまかい無数の点があつて、たとえば笑う点と、怒る点とがあつて、それに触れると人は笑い、また怒るのである。そしてそれは、人によってちがうのである。だから、私は初対面の人には、私のレパートリー（十八番）である落し咄<sup>ばなし</sup>の如きを、ひとくさりしゃべつて表情の変化を見る。私が予期したところで、笑ったか笑わなかったかによつて、その人物の傾向を知つて、あとはそれに従つて話すのである。このテストによれば、私の理解者はすくない。ことに婦人は、三人に一人は全く理解しない。一人は誤解し、一人は理解したふりをする。わが細君は適当に笑ったかと思ふ。

理解したふりをしたのであろう。だから私は、独りごとを言うのである。少年のころから、私は歩きながら独りごとを言った。歩きながら言うのだから、電車道の騒々しさにまぎれて、誰知るものはあるまいと油断していたら、ある日すれちがった弟に見破られて、恥辱を与えられたことがある。以来私は、かの「腹話術」を参考にして、

い。

それは組合の料簡がひろいせいではない。習慣、あるいはただうっかりしているためにすぎない。

どちらかといえば、私は西洋人のやり口を、にがにがしく思っている。人は世界中どこで働いてもいい。それは権利などというほどの代物しろものではない。働く意志があつて、仕事さえあれば、どこでも働けるのが、人間あたり前のことである。

それを禁じるのは、まちがいである。神々はそれを許さないはずである。

西洋人のいわゆるヒューマニズムも、基本的人權とやらも、怪しいものだ。日本人のほうが、この点ではまっとうだと言いたい、それを自覚して許したのではないから、いばれたものではない。

いくらながく海外にいても、そこで働いて、そこでかせがなければ、その国の人情はわかりはしない。

観光客なら、ただ金を落して行くだけだから、どこの国でもちやほやする。手を出して、チップでももらったら、もっとちやほやする。

西洋人も日本人も、この点では同じである。いたる所でもこにこされ、西洋人は親切だ、人種的偏見はなかったと、帰って新聞雑誌に書かれても、本気にはできない。

## 旅行者

旅行者の言うことなら、眉<sup>まゆ</sup>つばものだ、私は思っている。旅行者というのは、觀光客みたいなもので、もっぱら金を使う人で、その国ではかせがない人のことである。いくらながく海外に逗留<sup>とまりゆう</sup>しても、その国で働かず、邦貨を使つて、それで暮しているなら、旅行者である。留学生の多くがそれである。外交官がそれである。

海外で働くことは困難である。ヨーロッパでは、それを禁じている国が多い。日本人にフランスで働かれては、フランス人は迷惑する。それだけフランスの労働者の勤め口がへるから、働くことを禁じるのだそうだ。

ずいぶん料簡のせまい話だが、自分の国の労働者を保護するために作つた法律だといふ。

わが国では西洋人も東洋人も、自由に働くことが許されている。先進諸国をモデルにすれば、彼らが働くことを禁じるのが当然だが、わが労働組合は、それを主張しな

他人の私事に関心をもちすぎる男女のことは、ゾラばかりではない、うんざりするほど書いている。

私が言いたいのは、金棒引きに、洋の東西はないということである。西洋人のほうが、むしろ我々より猛烈で、そんなことは西洋に行かなくても、小説の二、三冊も読めばわかるということである。

隣人が頭角をあらわすと、その足をひっぱるのも、日本人の常だという。西洋人はそんなことはしないという。誰が言いだしたのか知らないが、なん十年来、識者といわれるほどの人は言っている。

旅行者の説だから、これも眉つばにきまっているが、事のついでに反駁はんぱくしておく。

ハンス・クリスチャン・アンデルセンは、デンマークが生んだ天才で、皆さんご存知のお伽噺ときばなしの元祖である。

「醜いあひるの子」や、「裸の王様」は、その代表作で、世界中の子供に読まれたし、今も読まれている。

そのアンデルセンが、功成り名とげて、世界中から祝福されて、ちよつと外国に旅したときのことである。

彼の旅先きの宿には、彼が着く直前に、故郷からの手紙が、たくさんとどいていた。

その国で働いて、その国でかせいでごらん。偏見やら何やらが、あるかないかわかるだろう。

西洋人は、他人の私事に関心をもたないと、海外に遊んだほどの日本人ならみんな言うのは、それにひきかえ日本人はもちすぎると、非難するためである。

観光客に、何がわかるか。

芹沢光治良氏は、フランスで働いた人ではないかもしれぬが、小説家らしく、こんなところを見ている。

なんでもパリのどこやらに下宿していたら、同宿に若い娘がいて、それが人のめかけのようなことをして、ほそぼそ暮しているのを、下宿人のことごとくが、あることないこと言いふらして、その娘を自殺にまで追いやったと、うろ覚えで恐縮だが、書いていた。

エミール・ゾラは、「巴里の胃袋」という小説中に、主人公フロランが、家庭教師に行ったさきの、まだ若い母親と、その妹の二人に、ともに関係があると、近所合壁が噂するのを、事こまかに書いている。

むろん、根も葉もない噂である。根も葉もないから、なんとかして本当だと、話すほうも聞くほうも思いたくて、見てきたように言うのである。

私は日本人が西洋人よりすぐれていると、言い合はるものではない。その金棒引きであること、足をひっぱることにかけては、人類はすべて同じだと言いはるものである。私はわが知識人の多くが、一知半解の見聞を総動員して、我とわが同胞を叱咤しったする情熱をげげんに思う。彼らに中華の思想がないことを情けなく思う。

中華というのは、中央の文明国のことである。支那人にとっては、それは常に支那であった。あとは東夷とうい、南蛮なんばん、西戎せいじゆう、北狄ほくてき——つまり、みんな野蛮国であった。

フランス人も同じ。それは葡萄酒ぶどうしゆはもつともうまく、女はもつとも美しく、要するに何もかも世界一の国である。イギリス人、ドイツ人、以下どこの国民も同様である。ばかばかしいが、元来「健全な精神」とは、こうしたものである。

だから、私は怪しむのである。ひとり日本人だけが、中華の感覚をもたないのはなぜだろう、またいつからのことなのだろう。

村垣淡路守あわじのかみ一行は、万延元年、アメリカに使いして、はじめて西洋人の正装をみた。紳上は黒ラシャの筒袖つつそで・股引ももひき、貴婦人はもろ肌ぬいで現われたので、およそ礼なき夷狄てきだと驚いた。

一行はちよんまげを頂いて、大小をたばさみ、臆おくせず進退したので、かえって異人に尊敬されたという。折目正しければ、風俗の相違は、互いに問題にならないのである。

なつかしさのあまり、急いで封を切ると、それにはすべて彼の悪口が書いてあった。アンデルセンの留守をよいことに、故郷ではこの老大家の悪口が盛んである。彼の少年のころの、詩の措辞のあやまりまで引っぱりだして、いかに彼が無学かを論じた文章さえある。

それをれいれいしく連載した新聞の、その部分に印をつけ、彼の行くさきざきに送るものがある。

むろん、匿名とくめいの人々である。アンデルセンは、いつまでも追跡して、その手をゆるめないすさまじい悪意を嘆いている。くわしくは彼の自伝に出ている。

仲間のなかから一人立身する者があれば、なんとか失脚させようとするのは、日本人だけではない。

我々是我々の友人が、とつぜん名士になることを喜びはしない。たぶん足ぐらい引っぱるだろう。けれども、それは西洋の諺ことわざにいう「下男の目には英雄なし」のたぐいで、一寸引っぱってみて、その甲斐かいがなければ、今度は迎合し、崇拜し、もう友人あつかいしなくなる。名士と一つ釜かまのめしを食ったことを、自慢さえして、以前から彼の天才を認めていたなどと言いだす始末である。

旅先きの宿々に、手紙を送るほどの者はすくないようだ。

新教育に否定的なら、自動的に保守反動、あるいは近ごろなら右翼とみられることは承知している。それを公言するのに多少の憚りはばかがあるのは、言論が彼らの手中にある証拠だろう。

わが旅行者たちは、暗々裡あんあんりに約束しているかのである。彼らは自在に外国語をあやつり、魚が水を得たように、共に西洋の町々を歩いたと称するが、そのうそっばちだけは、互いにあばくまいと、約束しているかのである。

彼らと西洋婦人との間の恋物語を、私は疑わしく思っている。日本人であることを忘れたかのような物語は、本当らしくないと思っている。いたるところのショーウィンドウにうつったのは、まぎれもない日本人の顔ではなかったか。

旅行者の多くは、本音をはかない。帰ればほかのことでは争っても、その身が西洋人と同じであったということにかけては、かたく結束して、留守中の我々をあざむいてなん十年にもなる。

る。

ここで肝腎なことは、淡路守は、日本人の目で、西洋人を見ていることである。

西洋婦人がデコルテを着るのは、風俗にすぎない。わが婦女子が、日本髪を結うのも風俗にすぎない。そこに優劣はないのに、あると言いつらしたのは、淡路守以後の留学生である。彼らは日本人の目でみないで、にせ、毛唐の目でみた。

その上、わが旅行者は、海外からありもしない我々の罪過を携えて帰朝した。そしてそれを、なん十年も子弟に教えた。

以前は欧米人、いまは中共・ソ連の人民諸君より、我々は一段と劣ると教えた。

戦争中、日本が何もかも世界一だと、教育したから、その反動だと言うものがあるが、うそである。戦争中も、彼らが世界一を説く声には力がなかった。

エリート（選良）と呼ばれるほどの人は、内心それを信じていなかった。そのせいだろう、戦後は何の苦もなく、旧に復した。

明治のむかし洋行した人は、選ばれた人々だった。帰って直ちに指導者になった。今だってそうである。

ジャーナリズムも教育も、彼らの手に握られている。だから私は、六三教育はおろか、明治以来の教育を信じてない。

つてしまふにきまっている。だから、遅ればせでも、一、二月にするのである。

以前私は、日に三十人から五十人の学生に会ったことがある。一人に二十分かかるとしても、三十人では十時間、五十人では十六時間かかる。

とても人間業でできる芸当ではない。履歴書と、顔と、名前を、一貫して記憶することさえ<sup>おぼつか</sup>覚束ない。

だから私は、応募者に会わないで、試験問題を郵送して、答案を送らせ、予選した上で会うことにした。これなら丁寧な応対ができる。

問題を漏洩するというより、公開するのだから、回答は友人先輩に相談して書くことが可能である。相談してもかまわない。それは応接の折に分るだろう。

ある年の二月、こうして予選した大学生の一人に、私は「この葉書ごらん次第、火急にご来車ください」と書いた。

出頭した学生に、テストがすんでから、私は注意された。この葉書には二字の誤りがある。すなわちヒキュウ（火急）は至急の、ご来車はご来社のまちがいである。

「この葉書ごらん次第、至急ご来社ください」と改めるべきだと叱正<sup>しつせい</sup>された。

私はわが耳を疑った。来車はなお来訪というが如く、以前は来遊、来駕<sup>らいが</sup>、枉駕<sup>おうが</sup>と並んで、ひんばんに用いられた手紙用語である。貴君は出歩くに、常々乗物を用いるで

## 試験問題

入学試験であろうと、入社試験であろうと、その問題を、事前に漏洩ろうえいすれば罰せられる。私は進んで漏洩している。

毎年、春さきには、わが社でも入社試験をする。したくはないが、欠員ができるから仕方がない。欠員は自然にできる。未婚の女子なら結婚したり、男子ならいやけがさしたり、トラブルもんぢやく（悶着）をおこしたりして去るのである。

その補充に、新聞広告したり、学校にたのんだりするが、零細わが社のごときに人材はなかなか集まらない。

春さきになってから、人をさがすのでは手遅れである。大会社では協定して、その前の年の秋までに選考して、くずしか残っていないという。

それも承知している。けれども、大会社のまねをして、前の年に募集しても、第一応ずるものがない。あっても、ふた股またかけていて、いいほうがきまれば、そっちへ行

①「皇太子はライスカレーを食べた」

「皇太子はライスカレーを食べられた」

「彼はその雑誌を主宰している」

「その雑誌は彼に主宰されている」

これらの表現上の相違は、無視してよいという説が、二十代の男女間に有力である。いずれにせよライスカレーは腹中におさまり、その雑誌は存在するという事実には相違はないのだから、どちらでも同じだといふのである。したがって彼らは、しばしば次のように書く。

「某組合は何月何日から何日まで、○○会館で、第一回××展を開催された」

「外貨を獲得するには、輸出を發展しなければならぬ」

右の説と右の文は誤りか。誤りなら正せ。

② 左記の短文は 1 そのまま活字にできるか 2 してはならぬか 3 唾棄<sup>だき</sup>すべき悪文か——もし悪文だと思ふならライトせよ。

イ 価格的には、社会的に妥当性ある価格を、その商品につけなければ、よく売ることとは困難である。

ロ 家具はその用途における要求に、常に機能的でなければならない。

あろうから、その駕（乗物）を枉<sup>ま</sup>げて、ちよつとお立寄り願いたいというのが枉駕で、敬語の一種である。今も老人は使っているが、馬や駕籠<sup>かご</sup>では大時代にすぎて使うに憚<sup>はばか</sup>りがある。けれども、来車になんの不都合があろう。ご来遊あれでは友人を呼ぶに似て事務に適しない。火急<sup>かきゆう</sup>をヒキユウと読み、その上至急の誤りだと難ずるような青年に、ご来社あれと書けば、すでに採用決定かと早合点されるおそれがある。来車の二字はわざと選んだものである。

その学生は、来車は辞書にないと言った。ジャーナリストを志望するほどの若者である。愛読した本として、漱石や芥川をあげる。その漱石や芥川の全集には、書翰<sup>しょかん</sup>集がつきものである。彼らの手紙には来駕や来車はひんばんに出ている。第一、来社は来車をもじった言葉だ。来社こそ辞書にはあるまい。政治家が米国に行くのを訪米、わが国に来るのを来日と新聞は書いて、これが辞書にないのと同じである。

さて、次に掲げるのは、わが社の試験問題の一節である。Aは五年ほど前、Bは二年前のものである。

## A

左記の質問に答え、○月○日までに郵送すること。それを読んで選抜し、お目にかかります。

見」という焼き直しが、これで一つ出来る。このでんで行けば、今年の「映画ベスト・テン」の発表を見ては、たちまちグッドデザイン・ベストテンというプランがたてられる。「男子専科」という雑誌からは、「販売専科」という企画がたてられる。人生いたるところにプランあり、ということになろう。

本誌は、家具・建築、室内のデザイン雑誌である。自分はずぶの素人<sup>しろウト</sup>だから、家具メーカーのための企画はたてられなくても当然だと、もし思う人があつたら、それはジャーナリズムに無縁の人である。

旧号一冊をさしあげる。これを見て、本文、口絵、グラビア——何でもかまわない、プランを三つ四つたてて、折返し送っていただきたい。

また雑誌巻末に「読者いわく」という欄がある。自分が一読者（家具メーカー又は販売者）のつもりになって、その一編（四百字内外）を書いて同封すること。右の二つによって選考した上でお会いしたい。

参考までに書き添えると、ジャーナリストは、忍術<sup>そうぽう</sup>の心得がなければならない。

「盲目物語」を書いた谷崎潤一郎は、らんらんたる双眸<sup>そうぼう</sup>の持主である。「罪と罰」

の作者は、人殺しではない。それにもかかわらず、盲人のながい独語を、また金

(Aにはあと二題あるが、略して試験問題Bを紹介する)

## B

ひと口に模倣と言うが、それには恥ずべきものと、許されていいものとの二種がある。コピー(ひようせつ)(剽窃)と共に、パロディ(はりかえ)(作りかえ)がある。

「明星」は「平凡」のコピーである。「やあ今日は」は「問答有用」に遅れて出た。「怒るが勝」は「負けるが勝」という言葉をもじったものである。

ジャーナリズムの勝敗は、プランによってきまる。プランとはタイトルのことである。真に独創的なプランは、天才だけのものだから、恥ずべきコピーでさえなければ、パロディでよしとしなければならない。

たとえば、あのおびただしい「――の生活と意見」というタイトルは、「伊藤整氏の生活と意見」、さらには「得能五郎の生活と意見」に端を発する。そして、伊藤整氏もまた「トリストラム・シャンデーの生活と意見」から出発している。シャンデーの作者もまた何ものかに負う。

この世に孤立したタイトルは一つもないということ――したがって、ジャーナリストは読書による蓄積が必要であるばかりでなく、それを迅速に召集する才が必要だということだが、これによってわかるはずである。ついにながら「青年大工の生活と意

この世に価格はあろうとも、価格みたいなものがあるうか。これだけ持つて回つて書くのもご苦労だが、せんじつめれば「安くなければ売れぬ」というだけのことを、つまり書くまでもなく、読むまでもないことを、書くのも読むのも共にご苦労である。ここに費される両者のご苦労は、全く無意味でつまりこれは唾棄すべき悪文で、リライトすべしと、試験のくせに出題者が乗りだして答えている。

安くなければ売れぬと私が翻訳すれば、それではニュアンス（陰翳<sup>いんえい</sup>）がちがうとおっしゃる人がある。ニュアンスとは片腹いたい。そもそも彼らに陰翳などという言葉を教えたのがまちがいだと私は理解しているが、それは彼らの理解することを欲しないところである。

私は腹背に敵をうけて、冷静になろうとつとめながら、やっぱり中っ腹になって、次第に逆上して、毎年こんな試験問題を草して、プリントにして、しきりに漏洩するのである。

貸を殺害する大学生を描き得たのは、想像力による。たとい本誌の読者でなくても、かりに家具屋になり得るのが忍術の第一歩で、これしきの術が使えないようでは、ジャーナリストにはなれない。

ちなみに、これを忍術と称したのは、ふざけたのでも馬鹿にしたのでもない。この仕事には機知が必要だから、そのサンプルを示そうと、つたない諧諷かいぎやうを弄したまでのことである。

ジャーナリズムは才能の世界である。

AもBも、いま読みなおしてみると、試験問題としてはおだやかでない。うちに鬱うつ屈するものがあつて、それを包みかくそうとして、包みかねている。

それは私の眼前に、火急は至急のあやまり、いずれにせよ腹中におさまったのだから同じことだと言いはる青少年の大群がいるためである。背後に値段のことを価格的、用途における要求に機能的なデザイン、などと称する知識人の、これまた大群がいるためである。

価格的——価格みたいなもの、とは何か？ かけ値なら昔からあるが、まさかそれではあるまい。

——諸君、本日お集まり頂いたのは、ほかでもありません。過日、私が老若男女に、一人一枚以上のレコードを売りつける自信があると豪語した、その秘訣ひけつを發表するためです。

ご案内の通り、只ただいま總理大臣は、吉田茂君で、吉田君の評判の悪いことは、毎朝新聞でごらんの通りです。犬畜生だと書いてあります。

はたして彼は犬でしょうか、犬であることは恥ずべきでしょうか？ 私は疑わしく思うものであります。犬が人に劣るものでないことは、犬に親つとしんだ人の夙つとに知るところです。

新聞が吉田老を悪くいうのは、いろいろわけもありましようが、まず彼がジャーナリストに水をぶっかけたからだと思われまゝ。次に憎体にくていに、同一の答弁をくり返すからだと思われまゝ。

野党の代議士は、きまつて、再軍備するつもりか、と詰問きつもんします。いたしません、と彼はにべもなくはねつけまゝ。

この問答は、なん十回もくり返され、今後もくり返されることでしょう。

全く同一の応酬を反復するのは、愚かしく、また無駄であります。ここにおいてわが社は、これをレコードにすべしと主張し、且かつ商品にします。野党の代議士には

## 就任演説

昭和二十〇年、第×次吉田内閣のころ、私はあるレコード会社の、社長に擬せられた。

それは私が、ある席で、日本人全部に最低一枚レコードを買わせる自信があると断言したからで、それをまにうけて、経営不振のレコード会社が、私を買いに来たのである。もしいけなければ、すぐお払い箱にするつもりで、私をかつぎ出しにきたのである。

一日、私はその社に臨み、重役並びに社員を集め、一場の演説を試みた。

重役たちはご高説拝聴と称して、満座のなかで私をテストしたのである。以下、これに<sup>こた</sup>応えた私のレクチュア（講演）である。論旨は十年たった今も、ちつとも変らないから披露する。

たいそのレコードをどこへ仕掛けるか、これらを疑つてのものと察しられます。

昨今トランジスタラジオ、テープレコーダーが売りだされ、流行する兆<sup>きざし</sup>が見えます。蓄音器を超小型にして、男子なら上衣<sup>うわぎ</sup>の胸のポケット、女子ならこれも近ごろはやりだした義乳——ゴム製のにせ物の乳房に仕掛け、操作自在にすることくらい、わが社の技術陣にできないはずがありません。できなければ、無能か怠慢であります。

また、言論というものは、人が信じているほど変化あるものではありません。吉田老の一例だけでは、納得できないというなら、他に例を求めましょう。

ついこの間まで、我々は醜<sup>しこ</sup>の御楯<sup>みたて</sup>であり、撃ちてしまふと言つていたものです。大臣の演説も、隣組長の演説も、寸分たがわなかったことはご記憶でしょう。ちがうように聞こえたのは、大臣の方はむずかしい言葉を流暢<sup>りゅうちやう</sup>に操り、隣組長の方はその真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>して、冗長だったり、たどたどしかっただけにすぎません。

組合運動の指導者の弁舌も同じことです。幹部は組合用語で、と、とと弁じ、弁じるから幹部で、末端の下っぱは、たどたどしく弁じて、そのゆえに下っぱです。千変万化とは、このことですか。

その冗漫を去れば、説教のすべては一に帰します。今や民主主義、やがて共産主義の天下だといわれています。両陣營の二大紋切型を、ダイジェストしてレコード化する

「再軍備する気か云々<sup>うんぬん</sup>」というレコードを、吉田君には「いたしません」というレコードを売りつけます。

代議士は老人につめより、拳骨<sup>げんこつ</sup>をふりあげ、ふりおろします。とたんに腹中にあるレコードは自動的に回転して、再軍備は……と居丈高に鳴りだします。

老人はじろりと見て、フンという顔をします。そのまに秘書が、鞠躬<sup>きつきゆう</sup>如として蓄音器を操作します。レコードは木で鼻をくくったように「いたしません」と鳴りだします。老人はレコードに合わせて、ぱくぱく口だけ開閉させていればよろしい。

彼らは共に、一言もしゃべらなくてすみます。きよろきよろ目玉の人形よろしく、手をふり、足をならしていさえすればいいのです。あとはレコードが引受けてくれます。

「あとはレコードが引受けた」あるいは「言論の時代は去り、無言の時代来たる」というキャッチ・フレーズ（宣伝文句）はどうでしょう。いま思いつきましたから、参考までに申上げておきます。

只今、諸君のなかから、失笑の声があがりました。この笑いは、与党野党のメンバーは、<sup>し</sup>めて四百なん十人、全員に一枚ずつ売りつけたところで、商売になろうか、また、千変万化する言論を、レコード化することは可能か、よしんば可能でも、いつ

せん。

惚れると言うのは下等で、愛すると言って上等とされて三十余年になります。ぼくはあなたを愛しますという告白を、女は言わせようとしますが、これがすらすら出たためしがないことは、皆さんご経験の通りであります。ばかりか、あれをぬけぬけと口にする者に、ろくな奴やつはないと思っっている男子が、まだあるくらいです。けれども、女が待っている以上、男は言う義務があります。

だから、レコードは忽ちたちま売切れるでしょう。わが社の「愛の言葉集」は、齒が浮くような美辞に満ちています。いくら齒が浮いても、それを言うのは諸君ではない、レコードですから、そこに微妙な距離があつて、いくらか無責任で、いくらか安心で、レコードが語っている間は休んでいることができます。

パーティや乗物のなかで、目星めぼしをつけたら、男はかけよつて、女の面前で鳴らします。女は応じます。昔は琴線きんせんといつて、心中にピアノの線の如きごとものがあつて、触れればそれが高鳴ると信じられていました。今や蓄音器が高鳴るのです。義乳に仕込んだレコードがとつぜん鳴りだせば、そのバイブレーション（震動）によつて、義乳の下なる本乳は躍動し、それが男の目にあらわに見えたことによつて、恋は女性の外部から内部に浸透し、胸がこんなに騒ぐのだから、待っていたのはこの人だと信じる

るのが、社員諸君のこれからの仕事であります。

蓄音器は自ら鳴るばかりで、聞く耳を持たないから、人間の会話に如かないと反駁はんぱくする方々に申し上げます。保守と革新、またそれぞれのなかの主流と反主流は、互いに聞く耳を持つものでしょうか。腕力や叫喚によって、相手を征伐しようとするのが本来ではありますまいか。

アメリカ人は共産主義を理解する能力がないのではありません。理解することを欲しないのです。理解は能力ではなく願望で、したがって、ソ連もまたアメリカを理解しないでしょう。

人間はついぞ他派の説を聞いたためしがない、今後聞くことはあるまいと、私は固く信じております。だから、無数のレコードをかけ放しにして、無数のご本人は休憩すべしと勧めているのです。

硬軟をもって区別するなら、右は硬派で、床屋政談に属するもので、売行きはむろん軟派に劣ります。

言うまでもなく軟派の代表は、男女の愛の言葉であります。これを流暢に言える者はすくなく、男は言おうとして、女は聞こうとして、しばしばその言葉は発せられま

ぎません。

ただし、五十以下に整頓<sup>せいとん</sup>してしまえば、売<sup>う</sup>るべきレコードはすくなくなつて、商売にさしつかえます。だから、愛の言葉も、論争喧嘩<sup>けんか</sup>も、しばらく品数を取揃<sup>とりぞろ</sup>えて、売<sup>う</sup>るべきものを豊富にしましょう。

以上、日本人のすべてに、一枚ずつレコードを売りつける秘伝です。

お察しの通り、これを買うべき人は、日本人だけではありません。恋の言葉やコミユニズムに、日本も西洋もありはしません。イギリス版やら中国版を発売して、硬派は海外共産党の前で謹んで鳴らし、軟派はパリジェンヌの許<sup>もと</sup>にかけよつて鳴らす——かくて、世界はやがて五十語以下にまとめられ、いかなお喋り<sup>しゃべ</sup>りも、「言論の自由」の正体を知るにいたりましょう。そして、一時あれほど繁昌<sup>はんじやう</sup>したわが社も、再び左前になります、それは世界中にさんざ売りこんで、しこたま儲<sup>もう</sup>けたあとですから、あきらめなければなりません。

古来、いつまで栄えた人物はなく、いつまで栄えた商売はないということです。

にいたるのです。

むろん、鳴らないこともあります。鳴らなければ、去ってべつの婦人の前で、そこでも鳴らなければ、ものはためし、いたるところで鳴らしてみれば、きっと共鳴するレコードにぶつかるにちがいありません。

それから先きのことは、申上げるまでもありません。結婚式場にでも、温泉マークにでも行ったらいいでしょう。わが社のレコードは、男女が交わす言葉を、むだなく編集した決定版ですから、恋の成就じょうじゆは疑いありません。

室内に於おける二人の対話、対話とも言えない呻吟しんぎん、歔歔きょきょのたぐいも、レコードにしなければするがいいでしょう。女が未熟で、まだ、泣いて恐悦きやうえつすることを知らなければ、しばらく代りに蓄音器を鳴らし、そのまねして女がやがて真実うなりだすという事態が、今後はしばしば生ずるでしょう。

再び犬をひきあいに出しますが、犬は驚いたとき、腹がへったとき、甘ったれるとき、それぞれちがった鳴き声を発します。

けれどもそれは五十種を出ません。人類は、それを犬が人より劣った証拠だとみなしてきましたが、我々の言論も、むろん五十以内に整理できます。犬ではすでに整理され、我々ではまだできていないからといって、それを高等だと思うのは身み鼻び屑いにす

めきたつが、床のなかから私は、医者だけは呼ばせまいと難癖つける。

実は、たいしたことはない、知っているのである。それでも熱をはかることまで拒絶できない。

はかつてみると、はたして八度しかない。わが細君は、なあんだという顔をする。たかが八度ぐらいで、大騒ぎするとは何ごとだろう、そのくらいの熱なら、あたしならのべつ出ている、平気で洗濯して、アイロンをかけていると、大げさなことを言う。事実、彼女はしばしば発熱して、次第にそれに慣れて、洗濯ぐらいはしているらしい。

むやみに発熱する細君には、十年に一度発熱する亭主の気持はわからない。

それは、千載一遇のチャンスのごときものである。私はこの機会に、大病人の気分を満喫しているのである、実際、私の八度は、熱に慣れた人の、九度以上に当る。ひよつとしたら四〇度に当るのではないか。

天地はために暗くなる。氣息奄々<sup>えんえん</sup>として、首尾よく大病人の気分になったのに、な

あんだと一笑されては、きまりが悪い。

蒲団<sup>かどん</sup>から顔だけ出して、私はなお苦しそうにしてみるが、すでに実感も迫力もない。体温計がのがれぬ証拠である。

## 無病息災

私は医者と薬を信用しない。信用しないのは、私が病氣をしたことがないためだと、病氣する人は言う。

病氣しない人は、病人に同情がない。同情しようと試みても、ついで頭痛を経験したことがないものに、偏頭痛がどんなものか、わかりはしない。その痛みを訴えられ、同情したふりをしてみたところで、空々しいだけである。

私の体は、発熱しない。風邪はひくが、熱というものが出ないから、平気である。十年に一度という風の吹き回しか、発熱することがある。

熱の八度も出ると、一大事である。まっすぐに歩けない。大地は動揺して、足はさながら宙をふむようで、いまにも倒れそうに、よろめいて帰る。ひよつとしたら死ぬのではないかと、自分でも思い、人にも思わせる。

何しろ病氣したことがないのだから、細君も初めは本気にして、医者よ、薬よと色

細さいがあるからである。

ついでながら、私は放火と言わない。つけ火と言う。トイレと言わない。手水場ちようずば、またははばかりと言う。それでも通じなければ、やぶれかぶれだから便所と言う。ご不浄とは言わない。

これがわが語彙ごいである。かつて私はスポンサーをひも、PRを自慢話、タレントを軽薄才子、ついで芸人と訳した。

いずれも誤訳だと指摘されることは覚悟している。指摘されたら、直ちに論争する用意があつて、私流の翻訳をしているのだが、その論拠はここでは言わない。

言えば堂々たる警世の文章になつて、トイレや近眼と言っている者どもが、改心しなければならなくなつては気の毒である。というより、たとい論争して勝つたところで、ちか目やはばかりは復活しないと知るからである。

それはさておき、電話帳を繰つて、私はついに歯医者と目医者を見つけた。港区にあるから、かりにミナト歯科と名づけておく。

そのミナト歯科に、私は恐る恐る出頭した。恐る恐る出むいたのは、歯医者で何をされるか、知っているからである。何をされるかわからない内科なら、用心して出頭

気分は次第に恢復かいふくして、あくる日は、内心けろりと、それでもうわべだけは儀ぎそうに、渋々起きることを余儀なくされる。

その私が、先日目をわずらった。同時に歯をわずらった。目にはごみがいって、目の玉にささったのである。歯のほうは、虫歯の神経が露出したのである。

激痛にたまりかね、何はともあれ、近所に目医者と歯医者はないかとさがした。

こうしたとき、私は職業別電話帳を利用する。職業別だから、歯医者は歯医者でまとめてある。しかも〇〇区から××区まで二十三区に分類してあるから、私は港区・芝の、わが事務所に近い医院を、たちまちなん軒か知ることができるはずである。そう思つてさがしたが、見つからない。そんなはずはないと、さらにさがしたが、両方とも発見できない。

目医者と歯医者でさがしたから、発見できなかったのである。それに気がついて、改めて「眼科医」と「歯科医」でさがしたら、あった。

もともと私は、すこしばかりちか目である。ちか目だと言うと、かならず近眼ですかと訂正される。

目医者も歯医者も、今は滅びた言葉らしい。電話帳には採用されていない。わざと私がこれらを採用するのは、眼科医より目医者のほうが、まっとうな言葉だと思つして

だから私は、いつそ歯医者の方を信用している。

歯医者 of 患部は目にみえる。歯ぐきから顔を出している白歯きゆうしの、そのまたまんなか  
に露出している神経である。まさか見誤ることはないであろう。

それでも、私が歯医者をお避けるのは、待たせるからである。そのあげく、ガリガ  
リかき回すからである。

かき回されると知って待つのは、苦痛である。ところが、ミナト氏は待たせなかつ  
た。

先客がなん人もあったのに、彼はてきぱき片づけた。同時に二人をイスにかけさせ、  
手間ひまかかる患者には、薬をつけてしばらく置き、そのまに簡単な客を治療して、  
ほかの客と交代させた。治療半ばで待たされても、待たされた気がしない心理を利用  
したのである。

だからたちまち、私の番は来た。椅子いすにかけると共に、私は観念の目をつぶった。  
電気仕掛けの豆ドリルで、いよいよかき回されるのである。

それは、鉛色の釘くぎのまわりに、無数のぎざぎざをつけた工具である。それで歯の琺瑯ほうろう  
質をかき回し、はねとばし、おしひろげ、ついに円い池をほるのである。

きわめて単純、かつ野蛮な行為である。

しない。

私は専門家というものを、承知している。彼らはもっぱら我が田に水を引くものである。

盲腸の手術が巧みな者は、下腹が痛むときけば、すぐ盲腸だと思う。思うのは、人情である。すでになん百なん十も切りとった男を、わざわざ目ざして来るのも、病人は盲腸にきまっている。

彼は人生を色目がねで見ている。自分のところへ来る男女は、みんな腹が痛くて、みんな盲腸だと、それ以外のことを感じるセンスを失っている。自信に満ちて、ちつとも懷疑することがない。その自信が、彼の技倆をいよいよ上達させる。

だから、勇んで切り開く。開いて化膿かのうしていかないのに仰天しても、とにかくそれはそこにあるのだから、とりあえず切りとって、あとは何食わぬ顔で退院させてしまう。病人は切られたことに満足する。ついでによく似たような気分になる。やがて同じ痛みが再び痛むのに驚いて、誤診だと腹をたてるが、あとの祭りである。

私は誇張して言っているのではない。患部がたいてい露出している外科でさえこんなものである。まして内科は、目にみえない内臓を打診するのである。何を理解し、何を理解しないか、知れたものではない。

は齒を掃除せよと、壁にポスターがはつてある手前、さすがに拒絶はしなかったものの、申訳けに一つ二つとつて終つた。

や、には煙草をやめなければ、とつても又つく。むだである。ぜんたい日に何本喫煙するのか。なに八十本。道理でやにくさいと、彼はつけつけ言つた。

医師の不機嫌は、私には解せなかつた。早々に退散して考えたが、齒の掃除には継続した時間がかかる。片手間にかたづけられないためかと思われた。

彼がつい暴言を吐いたのは、そのころたまたま医者ของ ストライキがあるとかで、日本中の医者の氣が立つてゐるためかと思われた。

私は齒医者へ行くと同時に、目医者にも行つた。医院のかけもちをするとは、無病息災の私にとっては椿事ちんじである。さらに十年たたなければ、再び医家を訪うおとことはあるまいから、備忘のためにこれも書きたいが、この方はとげをとり去つただけだから、一回ですんだ。さしたることはなかつた。

私はそれに耐えた。

前回私が齒をわずらったのは、ほぼ十年前のことである。その当時にくらべると、豆ドリルの種類は豊富になっている。性能はよくなっている。以前は何種類もなかったのに、今はヤスリのごく目の荒いものから、やや細かいもの、さらに細かいもの、そしてその中間のものまでそろえてあって、ぜいたくな日曜大工のセットみたいである。目はとじていても、それはひびきと手ごたえでわかる。

一週間あまりで、治療は終った。はじめ私は、医師が敏捷びんしょうにたち回るのは、患者のためかと思つたが、むしろ自分のためで、健康保険のせいだと知つた。

保険医は、数をこなさなければ、商売にならない。だから、一どきに二人、はなはだしいときは三人も片づける。

保険といえ、私はここで怪しまれた。病氣したことがない私は、保険証を使つた経験がない。二日目、私はそれを受付に出して、金を払うつもりで、いつまで待つたが音沙汰おとさたがない。看護婦はげんな顔をしている。保険証の主人公は、初診以外は無料だと、私は知らなかったのである。

医師は初め親切に、そのうち次第に不機嫌になった。治療がすんだ日、ついでに齒石と、齒を染めた煙草たばこのやにとつてくれないかと頼んだら、怫然ふっぜんとした。月に一度

いかを訴えて、消費者の了解を得ようとする。このアピール（訴え）がPR活動の一つだという。

だから、ただ売上げをふやそうとする広告宣伝とはちがう。それを越えたもので、活動範囲も広い。

けれども、それはどこやらの国のPRの話であろう。わが国では、値上げはまだ、やっぱり、とつぜん行なわれる。

ガス会社や牛乳会社は、一片の声明書とともに値上げする。それを新聞は非難する。非難するときの文章は鋭く、読んで小気味がいいくらいである。

新聞はガス屋ばかりか、総理大臣も攻撃する。吉田茂君が、面白おかしく嘲弄ちやうろうされたことは、まだご記憶であろう。

一年三百六十五日、同一の人物を、手をかえ品をかえ論難して、その都度痛快がらせるのは、凡人にはできない芸当である。この種の才子を、新聞は常々養成しているものとみえる。

その新聞が、いつぞや値上げした。二、三年前のことで、すでに旧聞に属するけれど、いずれあと二、三年もたてば、また値上げするだろうから、このときのことが参考になる。

## 新聞週間

「新聞週間」は、意義ある行事だそうだが、一読者である私には、新聞が新聞を自画自讃する催しに見える。

自画自讃のことを、このごろはピーアール（PR）という。新聞週間は、新聞が自分自身をPRする週間なのであろう。

これを書いてゐる今は、丁度その週間に当る。だから、すこし新聞について言う。PRは、パブリック・リレーションズの略語で、「広報」あるいは公衆関係などと翻訳されていたが、これでは何のことやら分らないし、どうせ分らないなら、短い方がよからうと、今ではPRのまま通用している。

大会社や政府が、その事業や政策を一般に知らせ、互いの理解を深め、公共の利益をはかるのがPRだそうだ。それなら自画自讃ではない。

たとえば、むかし値上げは、やぶから棒にした。今はなぜ値上げしなければならな

う。なん百なん千の社員のなかで、そのタレントがないのは、養成のしかたが間違っているのではないか。もっとも値上げそのものに無理があるなら、話はべつである。念のために言うが、私は値上げしてはいけなと言っているのではない。それどころか、すべては値上げされると覚悟している。あげたければあげるがいいが、それは買手に選択を許した上でのことだと言っているのである。

新聞はそれを許さない。新聞甲が値上げして、乙があげなければ、読者は乙を選ぶ恐れがあるから、甲乙同日同時刻にあげ、丙丁以下末流の新聞まで、仲間入りしてあげたのである。ふだん互いに出しぬいて、仲のよくない新聞たちが、この時は徒党した。

大新聞のPRぶりは、私の知る限りでは、この程度である。だから私はPRを自慢話と訳すのである。そして、新聞の自慢話には、このごろ強い説教臭がある。

総理大臣も、プロ野球の監督も、一市民も、この新聞の批判だけはまぬかれない。だから、戦後は批判の時代だといわれる。新聞はその自由を守ると、しばしば書くが、私は片腹痛く思っている。

言論の元締である新聞だけが、批評をまぬかれているからである。いま新聞を批評する実力あるものは、新聞以外にないからである。ところが、新聞たちは互いに他を

新聞はそれまで、他人の値上げを攻撃した手前、PRしなければいけないと思ったのだろう。二ページ大の付録をつけてアピールした。

それには、わが社の威容と題して、その新聞社の建物と、最新式の印刷機の写真とが誇示してあった。

その印刷機で印刷すれば、東京と同日同時刻に、東京と同一の新聞が、北海道に居ながら読めると大書してあった。べつに、日曜日には大冊を付録すると書いてあった。要するに社業いよいよ盛んだという自慢話で、そのあげく値下げではなく値上げするというのだから意外である。

ガス会社その他の値上げの声明は、新聞にとっては好餌こうじであった。いかにその根拠が薄弱であるか、矛盾に満ちているかを、新聞は手きびしく論じた。

ところが、攻守とくろを變えれば、新聞はガス屋と同様の声明を発するのである。その文は拙つたなく長たらしく、矛盾と撞着どうちやくに満ちていた。北海道版の発行を、東京の読者は望んだ覚えはない。誰も読みも、また読めもしない大付録を、押しつけられるのは迷惑である。

他を攻撃するとき、あれほど活気のあった文章は、ここでは全く精彩がない。誰しも聞けば顔をそむける値上げの口上を、とにかく読ませ、納得させてこそ才子である

その微妙なカラクリは、新聞が憎がつて糾弾する、旧式政治家の選挙運動のそれに似ている。選挙で末端の運動員が逮捕されると、候補者はきまって自分の関知しないことだと言いはってまぬかれる。

私は時々外国人の目で、わが国を見ることにしている。その目でみると、日本には新聞は一種類しかない。五大新聞があると、日本人なら言うだろうが、外国人の目には同一に見える。甲社と乙社の社説が、ついで対立したことがないからである。互いに論争が行なわれたためしがないからである。

そこにあるのは、甲はプロ野球に力こぶいれ、乙は南極探検に身をいれるというほどのちがいだけである。それなら、言論の相違ではない。

これら新聞同士のちがいは、青春雑誌「平凡」と「明星」のちがいに似ている。あれなら、日本人の目にも同一に見えよう。歴然と相違があると言いはるのは、その二社の編集員ばかりである。

新聞が一つしかなくなれば、言論も一つしかなくなる。その一種類から、読者は一歩も出られなくなる。たとえば安保改定には、反対だけあって、賛成の社説は一つもなかった。

その上新聞は、事件と同時に感想まで掲載する。すなわち、事件に隣接して、その

批評しない。

甲が乙の社説を論難すれば、乙は直ちに応酬しなければならない。丙もそれにまきこまれる。そして蜂の巣をつついたようになる。だから、互いに書かないのである。昨年であったか、新聞の販売店と配達人が騒いだことがある。新聞配達は薄給である。日曜日も休めない。その労働条件は、新聞が好んで攻撃する「前近代」のものである。この求人難の時代に、そんな配達人にはなり手が無い。そこで待遇改善の騒動が生じたというのだが、その事件は報道されない。すなわち、存在しなかったのである。

事件があるから、報道があるのではない。報道があるから、事件があるのである。あらゆる新聞が書かなければ、その事件は存在しないのである。

ほかに新聞に不都合で、報道されない事件はあろう。あっても記事にならなければ、それは無いのだから、従って私が知るはずがない。

なべかまを景品にして読者を争奪するのは、大新聞に似あわぬことである。けれどもこれは販売店と拡張員の仕業で、新聞社とは関係がない、と本社は言う。彼らは本社の社員ではないから、本社には責任がないのである。けれども、あの莫大な拡張費が、新聞社から出ないで、どこから出るのだろう。

至らぬところを遠慮なく申せと迫つても、家来がその手にのるはずはない。ほめればほめるほど不機嫌になるほどの名君なら、最後にちよつと悪く言つて、これが玉にきずですと迎合するくらいがせきの山である。

甲のような大新聞と、文化人との間は、主従、あるいは雇傭こように近い関係で結ばれている。まだ結ばれていなければ、いつ結ばれるかもしれないから、文化人は謹んで待つてゐる。名士はジャーナリズムに採用されて、それによつてはじめて名士なのだから、めつたに本音は吐かないし、いつまで吐かなければ、果してそれはあるのだから無いのだから、ついには我人ともに分らなくなる。

こうして新聞は永遠に、誰にも批評されない。これほど巨大な存在で、批評されないものは稀まれれである。危険である。

いや新聞は批評されている、という人がある。どこで、誰に？

たとえば、新聞の誤報は、同一の紙面で、同一の面積で、取消されなければならないと、昔から論じられている。又たとえば、正月の仕事初めに、女子社員が日本髪に結った写真を、いまだにきれいきのせるのは時代錯誤だと非難されている。

このたぐいの発言なら、私も読まないではない。ただ、これらを批評だと思わないだけである。これだけが玉にきずですという迎合にすぎないと思つていただけである。

事件によって生ずる代表的な寸評をのせる。

それは自民党的意見、社会党左派的意見、同右派的意見などを網羅したもので、それを各界名士に語らせ、折々は主婦も登場させる。

事件と同時に、代表的批評まで読ませられては、読者に考えるせきはなくなる。新聞は読者に考えることを封じて、それをサービスだと心得ている。読者は口を開けば、紙面の誰かの説に一致して、一致したのは受売りではないかと、むかしは覚えた羞恥<sup>しゆうち</sup>を失い、かえって安堵<sup>あんど</sup>するように馴致<sup>じゆんち</sup>された。今や言論の自由とは、新聞と同じことを言う自由だと思ふにいたり、新聞はそれを輿論<sup>よろん</sup>だと思ふにいたつたのである。

かくて言論は一種類となり、それが我々に君臨するようになった。その資格なくして君臨するのは、いくらか気がとがめるとみえ、新聞は時々自分の評判を聞いたがる。聞いて反省しようとする。

かつて甲という大新聞が、自社に対する苦言を、各界に求めたことがある。その結果、新聞には無数の小さな瑕疵<sup>かきん</sup>はあつても、重大な欠陥は一つもないと分つて落着いた。

私はそれを読んで、殿様と家来の間、または奥さんと女中の仲を思いだした。殿様や奥さんは生殺与奪の権をにぎっている。家来どもや女中たちを集めて、わが

## 自ろう車

六年生にもなりながら、自ろう車と言う男の子が近所にいる。なん度きいても、自ろう車と発音している。むろん、自動車のことである。

むかし、西洋ろう理と言う爺さんじいがいた。その爺さんが来るたびに、少年だった私たちは、おい西洋ろう理が来たぜと笑った。

あざ笑ったのではない。三味線をしゃむせん、お姫様をおしめ様と言って怪しまぬ場末の東京訛を、半ば懐しみなつか、半ば揶揄やゆして、しのび笑いしたのである。

それに私は、当時私たちが口にした、あのカツレツ、コロツケのたぐいは、西洋ろう理と呼ぶにふさわしいと思っていた。

そのころ、流線型の自動車はやが流行りだして、ついでにそれが「美」という説が流行りだした。ただ疾走する目的に、必要なものだけから成って、何一つむだのない、この流線型の如きものこそ美だというのである。

よしんば、その語氣が痛烈で、読んで溜飲りゆういんがさがつても、それは「家来の痛烈」にすぎない。

三十年近く、新聞は旧式政治家を、犬畜生のように書き続けてきた。それは私情から発したのではなく、公憤、あるいは正義感から書いたものだ、と、記者も読者も勘ちがいして、このごろはキャンペーンなどと称している。むかし、それをまに受けて暗殺やらクーデタを企てた青少年があつた。企てないまでも新聞をひとり潔白な、良心のかたまりみたいな存在だと誤解する読者がふえた。

その危険に気がついて、万一、寄稿者の一人が警告して、語氣が総理大臣を論ずるように痛快だったら、新聞はそれを採用しないばかりか、二度とその人物を起用しないであろう。その愚をおかす寄稿家がない所以ゆえんである。

それは龐大ぼうだいな人員を擁し、新式の機械を備えた、巨大な組織ではあるけれど、その肝心かなめなところは個人である。それがだんだん殿様や奥さんに似てくるのは、新聞の幹部が愚かで、私がかしこいせいではない。どんな聡明そうめいな幹部でも、全く批評されなければ、殿様になる。むろん私だつてなるだろうと、新聞週間に際して平素の管見を述べることくだんの如し。

私はこの世はむだから成っているとみている。そもそも私が生をうけ、こんなにちまで生きてきたのは、むだそのものだともっている。私はむだに終始して、いまだにむだ中に埋没している。どうして区々たるむだを争おうか。

だから、ただ疾走する目的に、必要なものだけから成る、この流線型の如きこそ美だという説に、弱年の私は腹をたてた。

自動車のどこが美だ、と私はくってかかった。なんだいあれば、ブリキのおもちゃじゃないか。

デパートのおもちゃ売場に行くと、自動車や飛行機のおもちゃがある。

それはたいそうよく出来ている。本ものそっくりで、感心するくらいである。

あんまり本ものに似ているので、おもちゃが本ものに似ているのか、本ものがおもちゃに似ているのか、分らなくなる。

手のひらにのせて、こんなに小さいのだから、この方がおもちゃだと、常識ある大人は信じて、子供に買って帰るのだろうが、私はあの大きな、本ものの自動車も、やっぱりおもちゃだと思っている。洗濯機やミキサーも、おもちゃだと思っている。

自動車のメカニズム（からくり）は、私には分らない。それは、分ろうとしないか

まだ「機能」とは言わなかった。今ならさしずめ、「最も機能的なものこそ最も美しい」と言うところであろう。

私はそれを信じなかった。どうせ流線型を売りだすための方便であろう。流線型がすたつたら、こんどは何を言いだすか、知れたものではないと思っていた。

ついでながら、私はモダン・リビングで、「動線」とやらをやかましくいうのも、眉<sup>まゆ</sup>つばものだと思っている。リビング・キッチンから風呂場<sup>ふろば</sup>へ、風呂場から寝室へ、最短距離で、むだなく、どこへでも行かれるのが、機能的なのだそうだが、たかが十坪や十五坪の豆住宅である。迂回<sup>うかい</sup>して便所へ行ったところで、何ほどのことがあるう。私はちつとも損したとは思わない。むやみに動線を倅約するのは、どういう料簡か。けちか。けちなら私は例の「けちのいろいろ」のなかに、これも記録しなければならぬ。

私はいま、三十余坪の平家に住んでいる。私の部屋から手水場<sup>ちようずば</sup>に達するには、端から端まで歩かなければならない。歩いたところで四、五間である。べつだなくたびれることはない。

縁側もむだ、軒の出の深いのもむだ、客間もむだ——あらゆるむだをさがしだして、見つけ次第撲滅せずんばやまぬ精神を、私は怪訝<sup>けげん</sup>に思っている。

んばかりの老若ろうにやくがあるのを苦々しく思っている。

自動車の便利は、何より歩くより早いことだという。けれども私は、この世に走る用事はない、この世は走るに値しないと、まじめに信じている。

万一あっても、それはメカニズムの助けをかりてはならない、と思っている。

自動車の持主が、世界に一人しか居なければ、つまり車が独占できるのなら、それは人より早かろう、その利は歩く人のなん倍だか分らない。

けれども、いくら秘密にしたところで、人はメカニズムを独占できない。人知のレベルは同一だから、原水爆は独占できない。アメリカが持てば、ソ連も持つ。中共もそのうち持つだろう。

自動車なら、アメリカ人はすでに、一人一台持つという。あんなにほしがっているのだもの、日本人も持つだろう。皆さん自動車の持主になれば、生活のテンポ（足並）は自動車並みになってしまう。

一人早くなるのではなく、日本中早くなるのだから、それなら、歩いた昔と同じである。よけいなものをこしらえて、よけいな金を遣って、免許だ、車庫だ、駐車場だと目の色かえて、歩いた昔と同じでは、損であろう。

自動車を持つ者は、持たない者をあなどるようだ。電気をつく時代は、つかない時

ら分らないだけのことで、もし分りたければ、あんなものなら、私にだって分るだろう。

ミキサーは硝子<sup>ガラス</sup>ばりだから、なかのメカニズムはまる見えである。洗濯機もふたをあけてのぞけば、まる見えである。

プロペラがあつて、それがぐるぐる回つて、手のかわりに洗濯してくれるだけのことである。

人体につり合つた大きさに拡大しただけで、これらはすべておもちゃである。

メカニズムは人類の發明で、我々の抽象の才を示したものである。走るという機能だけを、自然界から抽<sup>ぬ</sup>きだして、それだけで構成したのが、自動車のたぐいである。

そして、メカニズムの欠点は、一つことしか出来ないところにある。たとえば鳥なら、飛びもするが歌いもする。ところが、飛行機なら飛ぶばかり、蓄音器なら歌うばかりで、聞く耳は持たない。

だから、おもちゃは無限に生まれる。走るもの、さらによく走るもの、さらに——と際限がない。バタのついたパンが、とび出してくるトースターが發明されれば、旧式のパン焼とは別に、も一つこれも買わなければならぬという寸法である。

私は自動車を認めていない。近ごろこれを珍重して、ほしがって、よだれをたらさ

すなわち、精神上の財産は残せないのである。ところが、メカニズムなら残せるから、次の時代はテレビから出発して、たちまちカラーテレビを作り得るといふあंबいである。

聖賢の道がすたれて、物質が崇拜されたのはこのためである。言うまでもなくこれは「精神侮蔑」の思想である。精神はこの侮蔑に値するのだろうか。

値するのである。値して、近代の精神は、それに甘んじているのである。

末端には電気パン焼器があり、頂上には宇宙船がある。原水爆はこの思想、この系列のピーク（てっぺん）に位する一つである。自動車や飛行機を肯定し、礼讃らいさんして、その絶頂にある原水爆だけを否定し、禁じようとしても、そうは問屋が卸すかしらん。おもちゃに次ぐにおもちゃを作れば、人は必然てっぺんに達する。末端のおもちゃを喜んで、絶頂だけを憎むのは、いくら憎んでいますと力まれて、署名して下さいと帳面を出されても、私には喜んで応じられないのである。

私は凡百のメカニズムを、丁度手ごろな自動車に代表させて、言っているのである。けれどもどんなに私が論証しても、彼らがたらずよだれを、引っこませることはできない。

彼らの言い草の大半は、私には分っている。自動車が買えないから、嫉妬しつとして非難

代を憐れむようだ。電気は行燈あんどんの十倍明るいという。それなら現代人は古人より十倍幸せか。

古い譬えでは分るまい。つい十年前まで、テレビはなかった。テレビがないころ、我々は不幸だったか。その生活の内容は貧弱だったか。

痛くも痒くもなかったじゃないか。

すべてメカニズムは、人の福祉とは関係のないものである。おもちゃをおもちゃとして遇するなら、私は何も言いはしない。無かった昔を憐れんだり、馬鹿ばかにしたりするから言うのである。

現代人がメカニズムを信じ、これを崇拜するにいたったのは、それが財産として残せるためである。ひとたび電燈でんとうを発明すれば、子孫は行燈の昔にもどることがないからである。

一方、精神上の遺産は、子孫に残せない。老莊儒仏ヤソにいたるまで、聖賢は人類を精神の内奥ないおうから救おうとした。なん千年来試みて、成功しなかったのは、五十にして天命を知った賢人が死んでしまえば、もとの木阿弥もくあみ、その子は初めからやり直さなければならぬ。やり直して五十になっても、はたして親父おやじの域に達するかどうかはおぼつかない。

## 作り話

打ち見たところ、私は年齢不詳だから、いつまでお若い、と世辞を言われることがない。料簡に成長しない部分があるから、弁舌をふるうと、たちまち少年に帰るとは前に書いた。少年にお若いと言ってはおかしからう。

実物の私を知る人のなかには、あれだけに、虫をかみつぶして、しかも人並以上の悪<sup>あ</sup>しき才智の持主で、よくまあ少年に似るなどと言えたものだ、あきれる人がある。お説の通りである。三千世界の<sup>あ</sup>にが虫をかみつぶすのも容易ではないと、私は我ながら失笑することがある。けれども、私の言うこともうそではない。

相手によりけりなのである。

私は知らない人を紹介されると、まず二種に大別することになっている。たとえば男と女、肥<sup>ふと</sup>ったのと瘠<sup>や</sup>せたの、大男と小男、臆<sup>おく</sup>病<sup>びょう</sup>と無鉄砲というふうに分けるのである。分けると、たいがいそのどちらかに納まる。たまには、納まらなくて、男か女か定

するというのが如きが、その最も低級なものである。

私は金持ちではないけれど、あんなものの二台や三台なら、買いたければ買えると、まさか彼らを相手に一々論争できないではないか。

だから、私は争わないのである。六年坊主ぼうずにもなりながら、自ろう車と言う少年に従って、爾今じこん私も自ろう車と呼ぶことにしたのである。これに何やら皮肉な響きがあるのを喜んで、わずかに鬱うつを散じているのである。

逐は、しばらく続くが、みるみるこわばる勢力が勝ちを占め、首尾よく顔中にのさばると、もう抵抗しても無駄だと知れる。その表情は安定して、瓦解がかいすることがないから、にが虫こそ私だと言いはる人があるのである。

けれども、一方で私は、いくらかでも縁ある人と談笑しているのである。話題はもっぱら私の作り話で、すこしでも相手が耳を傾けてくれると、面色たちまちほころび、いそいそとサービスする。

「私の天気予報」という小咄こぼしの如きは、罪のないその一例で、私はまず官製の予報の当らぬことを立証し、客に同意を求める。同意を得ると、これを痛罵つうばする。そして、しかるにわが手製の予報たるや、百発百中だと自慢する。私の天気予報左の如し。

雨は近く降るであらう。やがて晴れるであらう。折々風は吹くであらう。春は花、秋は月、夏は青葉、冬は雪が降るであらう。十一月三日はかならず晴れる。これが日本の天気であると、一年分の予報をまとめてするのである。これで予報もお話もおしまいである。

私の十八番に「罰」という話がある。バチと読む。私はバチを信じている。それは天が当てる。人類の増長がはなはだしく、近くバチが当るはずだと、天文を占って確信もって断ずるから、客は不安な面持ちをする。あるいはわずかに同感する。信じな

かでない者もあるが、それは眼鏡をかけ直して見る。すると、彷彿<sup>ほうふつ</sup>として正体をあらわす。

どうせ彼らがこの私に、たいした用事があるはずがない。用がすんだらさっさと忘れるが、それでも関係が続いて、会うこと再三に及ぶと、様々な面を露出して複雑になる。私は整理し直す。これは大男と小男のうちの大男、臆病と無鉄砲のうちの臆病、肥ったのと瘠せたのうちの肥った方、この三つが組んだ「臆病な肥大漢」であるというふうに片づけるのである。

私見によれば、この組合わせは多いようだ。この三つがしばしば組合わされる所を見ると、六尺豊かな大男というものは、胆豆<sup>たんまめ</sup>の如き<sup>ごと</sup>が相場かと知れる。そうときまつたら、以後はその目でみて、深く詮索<sup>せんさく</sup>しない。むろん、例外はある。それは例外という箱に片づけておく。

この分類のなかに、縁のない人とある人、箸<sup>はし</sup>にも棒にもかからない人と、かかる人というのがある。私に縁がない方が、世間では申分ない人だとは、言うまでもない。さて、その無縁の人で、その上箸にも棒にもかからぬ人を紹介されると、私はつとめてにこにこする。けれども、再三会わなければならなくなると、私の顔はこわばってくる。いくら自分の顔でも、こわばればゆるめなければならぬ。この顔面上の角

左記の「寄る年波」というのも、その一つである。これはべつに不吉ではない。

年は毎年一つずつとると思つてゐる人が多いが、まちがつてゐる。五年分、十年分とまとめてとる。毎日会つてゐるとそれは分りにくい。牽牛けんぎゅうと織女しよくじよみたいに、年いへんずつ会ふ仲だと分る。どつかりと、まとめてとつてゐる。たとえば「声」のようなものか。

声には何種類もない。電話で聞きわけられるのは、まず男女の声、大人と子供の声、とんで老人の声、声変り中の声などで、二十歳の声と二十一歳の声と、一つずつ老いるものではない。

いつまでも老年にならない知人がいて、それが三十年分まとめて年とるのを、私はたまたま目撃したことがある。さすがにそれはすさまじく、刻々に分つた。太郎はたちまちお爺さんじい——と思わず口走つたほどである。

だから、世界中の女性よ、毎朝鏡をみて、今日は昨日より一日だけ年をとつたか、と心配しないがいい。

それより、不老長寿の秘訣ひけつを教えてあげる——すぐ膝ひざをのりだしてくるが、やさしいように、女にはむずかしいよ。

い人は縁なき人、心を動かすならいくら縁ある人とみて、その縁をたよりに止めどなく話す。ただし、この話の締めくくりは、景気がよくない。

すなわち——何も私は喜んで生きているわけではない。今さら自分から死ぬわけにいかないから、渋々この世とつきあっている。生きて甲斐ない世の中だ。こうしてただ死ぬのを待っていると、ころりと横になって、死んだまねしてみせると、客は愁傷のふりをするから妙である。

「日常茶飯事」もひっくるめて、私はこれらを「空理空論」と称している。そして、空理空論こそわが実生活だと信じている。世間のいわゆる実生活は、もぬけのカラだと思っている。

私は空理空論を語って、佳境に入ると、とびあがって、手はぱちぱち、目はぴかぴか、魂は天外に遊んで、少年どころかまるで三歳の童児である。

けれども、もう何年にも、佳境に入ったことがない。相手がないのである。一人はあったが、死んでしまった。爾来、私は代用品を相手に空論している。代用品だから、肝胆相照らすというわけにはいかないが、それでもすこしは照らすのである。

常に絵そらごとを語って、客をけむにまいて、結局、不吉な結論をおしつけるから、しまいいはいやな顔をされる。

世間では、戦中派だの戦後派だのという。わが青春は戦争にはじまり、戦争に終つて損した、暗い谷間である云々うんぬんと、みれんなことを言う人がある。

けれども、わが青春が暗かったのは、何も戦争のせいではない。その証拠には、いまだに暗い。すべては私の心がらにすぎぬ。

私は明治年間の古本を読んで育った。今人と交りを絶ち、故人と交際したいきさつはすでに書いた。

私は去年会った人のことは、忘れてあとかたもないが、一葉女史の日記に登場する人物の動静なら、よく記憶している。彼らが死んで何十年だと言って、私を説きふせることはできない。

彼らも私も年をとらない。諸君もとつていないのである。けれども、しわがよるという。白髪しろががふえるという。それはしわや白髪の勝手である。私の知ったことではない、と毅然きぜんとしてゐるから、しわ共もあきれたのだろう、今は寄りつかないが、いずれまとめて押しよせ、太郎はたちまちお爺さんと、しっぺ返しのもりで笑うなら、それは浅薄せんぱくというものである。

よばよばにもなるだろう。けれども、私はそれを認めない。九郎判官はうがんの一行は、山伏姿に身をやつした。十六歳の少年は、浦島太郎に身をやつした。私は変装しただけ

奇矯な言辞を弄するようだが、私は時間も空間も認めていない。そんなものはありはしないと思っている。

かりに、貴嬢が不本意で別れた恋人が、巴里はモンマルトルにしているとする。貴嬢は、東京は田園調布に住むとする。ある日、あるとき、貴嬢は彼を思って、心はたちまち巴里にある。すでにドアを排して、彼と相擁している。一別以来の物語をしているうち、貴嬢はこれが現実でないと気がつく。

巴里にいたるには、船なら何十日、飛行機なら何日、金なら何十万円かかると我に返って、二人の間の時間と空間の介在をうらんで、あきらめる。

けれども、実はそんなものは、ありはしないのである。魂はとんでかの地にいたつて、足は床をふみ、手はドアをおしたのである。ドアの把手のつめたい感触が、まぎまぎと手に残っているではないか。どうしてこれがうそで、船だの金だの時間だのが本当なのか。これらはすべて、洩々人を承知させる方便ではないか。

私はわが空理空論、わが拙い物語の方に本性をあらわしている。たとえば、私はまだ十六歳である。わが身長と脳ミソの分量は、十六のときまで成長して、そこでぱたりとまったからである。これだけではなぜ十六か分るまいが、これは別のお話だから次の機会にする。

## 本屋

本屋は、素人<sup>しろうと</sup>にできる商売である。げんに、日本中になん百なん千軒とあるそれは、みんな素人である。

いくらかの元手があつて店があれば、誰でも開業できる。保証金さえつめば、問屋は本と雑誌を貸してくれる。それを並べ、朝夕は、たきをかけ、ほこりでもはらつていれば、客は勝手に来て、勝手に買って帰ってくれる。

それ以上、なんの仕事もありはしない。あとは、要所要所に細長い鏡をはり、ひよつとしたら客が變じて万引になるかもしれないから、見張つていなければならないのである。本の名前をおぼえて、客にサービスしようとするなどは、悪い料簡である。日になん十点と新刊が出て、それが一々表題がちがうから、おぼえたところで、骨折りぞんである。いつまでそれが売れるではなし、むしろたいてい売れないから、問屋に返せば、またちがつた本を送ってくれる。

だと思っている。そして変装なら、私はほとんど毎日している。

風俗に従って変装するのは、精神を自由にするためにほかならない。私はそれに従って、はからずも不老長寿の法を発見した。それなのに誰も教えを請こいに来ない。わざわざこちらから教えてやっても、有難くもない様子で、うさん臭い顔をしているから、今回のお話はこれでおしまいとする。

本や雑誌は、本屋が注文して仕入れるものではなく、問屋が見つくろって、送ってくれるものだとは始め言った。

たとえば、A堂は田舎町の小学校前の店だから、翻訳書は売れなからう、だから二冊も送っておけ、B書店は、東京の私立大学前の店だから十冊送ろうと、問屋はリストに従って、勝手に送りつけるのである。

そのリストは、いいかげんなものである。いくら問屋が大会社でも、なん千軒もある本屋を、一々知りはしない。問屋もまた不勉強で、知ろうとはしないのである。

送られる本は、委託品である。売れた分だけ払って、売れない分は問屋へ、問屋は版元へ返せばすむ。返せば、本屋も問屋も、版元へは支払わないですむ。

この支払わないですむというところにかなめご注意。ここが要である。払わないですむ商品なら、誰しも丁寧にあつかわない。研究もしない。問屋まかせの仕入れをするのも、このためである。

はなはだしきは、問屋が送りつけた荷を、開けもしないで、荷札だけつけかえて、そっくり返送することがあるという。ここに行なわれた往復の輸送は、全く無駄だとさすがの間屋も腹をたてたら、棚が満員で並べられないから返したと、本屋は答えたという。棚は、ごらんの通りどこでも満員である。

葉屋なら、メンソレやらアスピリン、ダイヤジンの名をおぼえる必要がある。それは、細く長く売れるが、本はたえず名を変えて出る。なかみは同じらしいが、読んだことはなし、また読む気もないから、知るよしもない。

本屋は、不勉強でできる商売で、というより勉強してはいけないう商売なのである。ためしに、知らない本屋で、知らない店員に、〇〇はあるかと聞いてみるとわかる。たいがい怪訝な顔をされる。

版元は××社だと教えてやると、思い当ってさがしてくれるのはまだましな方で、やっぱり、さあ、というような顔をしている。

愛想のいいのは、言下に、売切れました、あるいは、うちには来ていませんと言う。それは口先きだけで、本当に売切れたのか、それともその店に配本されていないのか、知れたものではない。

証拠はないから、そうかいと答えて、しばらくさがすふりをして、なんだ、ここにあるじゃないかと表紙を示しても、恥じることがない。

あつてよかった、とも思わぬらしい。あつたらさつさと買って行くが、いいと、思っているのである。

まさかと思うだろうが、本当である。むろん、これにはわけがある。

ベストセラーをよく記憶して、客の目につく所に並べるとすれば、本屋は必ずしも不勉強ではない、広告も見ている、と反駁する人もあろう。けれども、日に百冊も百五十冊も売れる本を、記憶しなければどうかしている。それは玄人くろうととして記憶したのではなからう。素人として記憶したにすぎまい。

売手と買手の知識が同一では、玄人とは言われない。お客様に教えられることもみ手して言う本屋があるが、本に関する知識がたくさんあって、たまたま知らぬことを、客に教えられたというのなら、それは世辞にもなろうが、知識は客と同一、あるいは以下で、教えられるでもないものである。

ここでは、本屋の悪口を言うのが目的ではない。むしろ、その本を製造する版元や著者に言及するつもりが、つかうかかと手間どったから、さきを急ぐ。

実は、客も客なのである。客は自分で本を選びはしない。その意志もなく、能力もない。常に何ものかに支配され、その支配を喜んで買うものなのである。

たとえば、敗戦直後、リーダーズ・ダイジェストという雑誌が、よく売れたことがある。客は本屋に行列した。

この雑誌の内容は、当時も今も全く同じである。それなのに、今はそんなに売れない。当行列までした青少年は、今は他のベストセラーの支配下にある。

本屋は、自分では宣伝しない。間屋もしない。するのは版元だけである。莫大な宣  
伝費は、すべて版元の負担で、それによって売れるのだから、せめて朝ごとの新聞広  
告ぐらい見るのは、義理ではないかと思われるが、見ない。見ないから見た客に、○  
○はあるかと聞かれ、さあとみすみす客を逃すことになるが、なに、逃したっていい  
のである。

その客は、歩いて次の本屋へ行く。次の本屋で聞いたって、同じ返事しか得られぬ  
と知れているから、安心である。わが客を次の店にとられても、次の店が逃した別の  
客が、わが店に舞いこむから、さしひき同じである。なまじ一軒が勉強すると、まる  
く納まっていたバランスがくずれるから、めったに新聞なんか見ないのである。

わが国の小売書店は、こうしてなん十年も客を訓練してきた。客は次第に、本を発  
見することを得、一人でさがして一人で買って帰るようになった。

たとえば、建築の書物なら、本屋の棚のどのへんにあるか、店員の冷遇によって、  
承知するにいたったのである。

それは、花やかな場所にはない。店の奥の、いちばん目だたない暗い棚にある。ベ  
ストセラーや推理小説は、人目につく棚にあるから、そんな所で専門書をさがすのは、  
客としては素人である。

そこは、本たちの墓場だという。けれども、そこへ足を踏みいれれば、なん十年來、棚に立ちつくした本たちは、いつせいに振りむいて、まだ死んでいない表情を示すのである。そして私を無縁の書生と知れば、再びもとに復するけれど、たまには互いに求めていたとわかつて、百年の歳月をとびこえることもあるのである。

同じく本屋でも、新本屋と古本屋はちがうのである。古本屋は素人ではつとまらない。

彼らは古本の市に出向いて、自分で選び、自分で支払い、自分で仕入れる。もしそれが売れなくても、どこへも返すことはできない。したがって、本に関する知識がある。初版と再版を区別する。初版より再版が高く売れること、またその反対があるからである。

私が古本屋の味方をするのは、それが商売人に近いからである。ところが、神田の古本屋は、近ごろ景気が悪い、新本屋に転じたものが多いという。

古本屋は元來宣伝しない。古本は原則として一冊である。古本にベストセラーは生じるはずがない。

一冊の本を求めて、一人さまよう客は少なくなった。新刊の版元は、巨大な広告をくりかえして読者を馴致し、支配するに成功した。

忽ち<sup>たちま</sup>百版売れたという評判に左右されて、人は買うのである。売れない本を、ひとり選んで、ひとり買う客はない。

あつてもそれは稀<sup>ま</sup>れだから、そんなものを相手にしては、本屋も版元も商売にならない。版元はひたすら大量に売ろうとする。それが売れなかったのは、あてがはずれただけのことで、内容が独自なためではない。

もつぱら売るための本だとは、著者は百も承知である。著者とは、商品としての巧みな作文をするもののことである。

本ばかりではない。朝晩読む新聞紙上の言論も、すべて商品である。人は商品でない言論に、接する機会を全く持たない。だから、近ごろ世間が礼讃<sup>らいさん</sup>するあの言論の自由とは、売れている言論の自由のことである。売れない言論も、売れる言論のまねをして、ただ及ばなかっただけだから同じことである。

だから私は、古本と古本屋の味方をしたい。古本の版元は、古本の著者と共に故人である。

どんなつまらぬ本でも、ここでは客が主人公で、自分ひとりでさがしに来る。

そこには、書物がまだこんなに売れなかったころの、つむじの曲った著者たちの、つむじの曲った発言が、稀れにはあるのである。

## スピードきちがい

スピードきちがいは、全人類がわずらっている奇病で、ソ連人ならまぬかれて、アメリカ人ならまぬかれぬ、というたぐいの病気ではない。また、はしかみたいに、一度かかればすむという病気でもない。

生まれたときからすでにかかつて、かかったまま死ぬのだから、それはほとんど病気ではない。誰にも病人だという自覚がない。

それを、私ひとりが病気だと言いはるなら、衆寡敵<sup>しゆうか</sup>しないにきまっている。けれども、及ばずながら言いはりたい。

ここでスピードきちがいと言うのは、かのカミナリ族のごときをさすのではない。あれも、きちがいの一族にはちがいないが、末端をかけ回る、虫けらみたいな存在で、いずれは転倒して路上で横死するはずだから論じない。それを生んだ母体、交通機関と報道機関の狂気について言う。

古本屋が左前になったのはこのためである。わずかに残った古本屋の書棚は、一変して以前の面影をとどめない。

だから私は、このごろめつたに神田に行かない。

りしたが、いくら急いでもたかは知れている。だから、動物性の足の利用はあきらめて、無機物から成るメカニズムを発明したのである。

発明したのが、運のつきである。以来、それは速力のコンクールになった。人類は競争のつもりでも、それが競争にならないことは、いつぞや自動車を例に述べた。

一戸に一台はおろか、一人が一台を所有すれば、生活のペース（足並）は、自動車の速力と同じになる。歩いて一時間かかったところを、自動車で七分として、皆さん七分で走れば、歩いた昔と同じで、発明しただけ損だと言った。

神々が天からのぞいて見れば、近ごろ下界の人間どもは、何だかちょこまか歩いているよと、曰う位が関の山だ。のたま

脳ミソの一とびにくらべれば、弾丸列車も物のかずではない。さらばと、ジェット機やらロケットやらをこしらえて、再び進歩だ科学だ近代だと言うのは、もういいかげんにしてはどうか。

これを後ろ向きの意見だと笑う者があることは、承知している。交通機関の例だけでは納得できなからうから、これと表裏して発達した報道機関について言う。

報道機関は、スピード狂の一方の旗頭である。すなわち、新聞は何より迅速を尊ぶ。むかし、四十七士の討入は、江戸中に知れわたるには二、三日かかった。日本中に

交通機関の発達こそ、諸悪の根源だとかねて私は信じている。それについては、すでになん度か触れたから、ここでは手短かに話す。

かりに、東海道五十三次を、昔は一ヶ月かかって旅したとする。それを旧式の汽車が、一日にちぢめたとする。新式が半日に、もっと新式が四時間に、さらに——とくれば、これはもう止めどがない。

結局、東京大阪間の時間を、人は「無」にしたいのである。

四時間を二時間に、二時間をゼロにするのが、進歩だ科学だ近代だと、小学生にまで教える位なもの、教える当人は固く信じているにちがいない。この点は、ソ連人もアメリカ人も同様である。この二大国の思想は、ことごとくに反対だといわれているが、根底は同一だと私は見ている。

東京大阪間の所要時間を、なぜ無に近くしたいのか。それは元来、我々の脳ミソ中に「時間」が存在しないためだと、すでに私は巴里<sup>パリ</sup>の恋人に譬<sup>たと</sup>えて話した。

巴里も京都も同じことだ。京都の人を思えば、魂はたちまち京都へとぶ。ところが、肉体だけは東京に残るから、当人はけげんだし、不本意だし、まちがっていると思うのは当然である。だから、誰しも、その時間を短縮しようとする。

昔は自分の二本の足で、次いで馬や駕籠<sup>かご</sup>で、つまり他人の足で、走ったり走らせた

三十分後なら一日で、十分後ならその場で、ひよつとしたら犯人と鉢あわせしたかもしれないと、分秒をきざむと、結局ジャーナリズムは、事件の目撃者になりたいのだということが分る。

いつそ事件がおこる寸前に、その場に居あわせたら、どんなによからう。まだ生きている主人公が、自殺、あるいは他殺されるところを、この目で見る事ができたら、どんなによからう。

ジャーナリズムの理想は、事件に追いついて、それを追いかすことにある。たとい短時間でも、そこに時間が介在すれば、どんな邪魔がはいるか知れない。だから本当は、事件の直前にその場にいたいのである。

電信柱のかげでもいい。彼はその場にひそんでいたい。そこへ、あの名高い下山総裁が、よろよろと、あるいはつかつかとあらわれて殺される、または自殺する。

その一挙一動を、電信柱のかげから彼は見ている。見て鉛筆を走らせている。首尾よく総裁の息が絶えたら、かけ出して新聞社に電話する。これなら神速、かつ正確な記事が書ける。ついに、事件と報道は密接する。

ジャーナリズムの理想は、ここにあると、私は察するのである。さぞかしあくる朝の新聞は売れるだろう。記事にみじんも誤りなく、他社を出しぬいて、読者を狂喜さ

知れわたるには三月か半年かかった。

近代のジャーナリズムは、その時間を短くした。三月を三日に、三日を一日にちぢめた。

その競争ははげしく、A社が夕刊で報じた事件を、B社が遅れて朝刊にのせれば、その責任を問われるほどだという。

事件と報道の間の時間を、むやみと短縮しようと争うのは、言うまでもなくスピードきちがいである。

この間の事情を、再三で恐縮だが、下山事件で言わせてもらう。

下山事件は、はじめ他殺だと思われた。半年たつても、犯人が見つからないから、自殺説が有力になった。今では、占領軍に謀殺されたのだと、ふたたび他殺説が盛り返したようだが、真偽は誰にも分りはしない。

分らないのは、ひとえに死体の発見が遅れたからだ、折からの風雨が、痕跡を洗い流してしまったからだ、という。

せめて半日早く死体が発見できたらと、迅速を尊ぶジャーナリズムは残念がる。それが高じると事件の直後に、現場にいたいと願うにいたる。

椿事ちんじの現場に、もし一時間後に急行できたら、事件は半月で解決したかもしれない。

けれども、故人浅沼稻次郎氏は、満座のなかで脾腹ひばらを刺され、死にいたる前後を、無数のカメラに撮影された。

カメラマンの多くは、たとい手をかせば未然にふせげる事故でも、手をかさない。かさないで身構えて、ぱちぱち写真ばかりとる。素人しろうともそのまねをする。まねしてとった写真を新聞社へ売りつける。

新聞は他社へは売らぬ約束で買いとり、そのあくる日の紙面をかざる。読者の野次馬根性は、むさぼり読んで満足する。

喜んで買うのだから、それはジャーナリズムの理想である。素人はそれを察知して、迎合したにすぎない。かくて、ジャーナリズムは、素人を養成してセミプロに仕立てた。セミプロのお化けである。

私は古人も今人も、野次馬であることを、否定するものではない。ただ、赤穂浪士あこうの討入は、一ヶ月かかって承知していいと思うものである。元禄げんろくの昔の野次馬の満足より、こんにちの野次馬の満足の方が、より満足だと思わないだけの話である。そこに何の相違があるか。

ロケットをとばし、怪電波をとばし、あらゆる速力を増すことを、私は科学の勝利、人類の壮挙とみない。かえって暴挙、あるいは愚挙とみている。

せることができるであらう。

事件と報道の間の時間を無にするには、事前にその場にいるにかぎる。

けれども、ジャーナリストも人の子なら、事件の主人公が死ぬのを見たら、走ってそれを助けなければならない。

ところが、助ければ事件は発生しなくなる。したがって、報道もまた発生しなくなる。何のために、雨中、電信柱のかげで待ちぶせしたのか分らなくなる。

だから、電柱のかげにひそむ人物は、いわゆる非情なもの、無色透明なもの、ジャーナリズムの権化ごんげでなければならぬ。

近ごろはこれを鬼おにという。写真の鬼だとか、文学の鬼だとかいうあれである。昔はこれを外道げどうといった。

そこにもうろうと立つもの、目撃者でありながら、ひたすら鉛筆を走らせ、決して当事者にはならないそれは、人間に似て人間ではない。「第三者」というような生まやましいものではない。化物である。

ジャーナリストの多くは言うであらう。いつ、どこで突発するか分らぬ椿事を、事前に探知して、待ちぶせることの不可能と、それを願った覚えがないことを言うであらう。

めて披露するとして、ここはへそに返る。

私はいくつかのへそを、注目したことがある。それは、注目に値しないものであった。傷あとのように、深くへこんだものがある。開いてむきだしになったものがある。露出したものは、貝のむきみに似ている。私はしばらく正視して、やがて顔をそむけた。

それが曲っているか否か、<sup>いな</sup>どうして分ろう。第一、へ所に正しい天地・左右があるだろうか。よしんばあっても、誰かへその天地を知らんやと、思ったのである。

むろん、男子のそれではない。妙齡の女子のである。

私は女性崇拜で、寝てもさめても思いつめ、高じてその極に達したものである。

極に達すると、生きている女はなまぐさく、死んだ女じゃ仕方がなく、生きて崇拜できて、しかも一緒に寝ることができるという、この世ならぬ女性を<sup>ねっぞう</sup>捏造するにいたる。

物ごころついて以来、私はひたすら捏造して、こんにちにいたった。だから、実物に接したときは驚いた。

すこし離れて、仔細<sup>しさい</sup>に見ると、人体の中央には、一条の線が走っている。それは、胸から腹へかけて、ようやく顕著である。次第にくつきりと一本の線となって、へそ

## つむじ曲り

私はかげで、あるいは面とむかつて、へそ曲りだと言われることがある。へそ曲りとは、つむじ曲りのことである。

私はへそ曲りという言葉を認めない。それは由緒<sup>ゆいしよ</sup>正しい言葉ではないと、一人ぎめにきめて用いない。

いくら私が用いなくても、皆さん用いて、今ではつむじ曲りと言う人の方が稀<sup>ま</sup>れだとは、承知している。だから、わざと使わない。

一国の言語は、抵抗がなければ、どこまで墮落するかしないものである。

私はつけ火と言って放火と言わない、ちか目と言って近眼と言わない、フィクショナル（虚構）を作り話、または絵そらごと、スポンサーをひもと訳して、これがわが語彙<sup>ご</sup>だと書いたことがあるが、語彙には選択と抵抗がなければならぬ。

抵抗のない「豊富な語彙」なんぞ、にせの豊富だと私は思っている。その議論は改

自分をごまかせない。

それが美人なら、へそまで美人だと、こうした場合、逆上するのが健全な男子なら、私は健全ではない。

すでにお察しの通り、私の頭上には二種のつむじがあつて、一つは考え方を、一つは感じ方を支配して、それぞれ曲つているのである。

けれども、私のつむじ曲りは、尋常のへそ曲りとはちがう。同じだと見るのは、見る人の料簡の背丈が低いからだ、勝手ながら私はきめている。

私のつむじは、曲るべくして曲つているのである。こんな世の中に生まれて、生きて、これを礼讃せよ、謳歌せよと言われても、私はことわる。少年のころから、私はことわり続けてきた。

私は何事にも逆らつて、しかも「何でも反対党」とは相違する。相違しなければ、それはわが沽券にかかわる。

何でも反対党は、あらかじめ反対することが分つていて、その通り反対するのだから、首ふり人形みたいなものだ。あんなものを、つむじ曲りの仲間に入れてやるわけにはいかない。

私は独自の理論と感覚を以て、柄のないところに柄を上げる。世論の意外に出没し

の上あたりでは、その筋をはさんで、旋毛がうずを巻いていることさえある。

きれぎれではあるけれど、それは人体を貫いている。腹から胸へ、胸からのどへ、それから先きの行方は定かでないが、きつと人中から鼻梁へ、ついにつむじに達しているのではないかと疑われる。

少年のころから、私はそれが気になってならなかった。これではまるで、縫いぐるみの人形ではないか。神さまというものは、もつと造化の妙手かと思つたら、彌縫した痕跡を残していると、ひそかにその不手際を難じた。

それは恋ではないけれど、恋に似たものである。似たものでありながら、事にのぞんで、そこに縫いぐるみの人形を見るとは――。私は狼狽しないわけにはいかない。

女はそのとき、何事かを待っている。待っているのだから、情熱、あるいは情欲に似たものを蔵している。ところが男は一条の筋に氣をとられている。何の女性崇拜か。それは由々しい侮辱だと女は感じて、薄目をあけて見ている。

転瞬のうちではあるが、私は情欲を失っている。いま眼前に、ごろりと横たわっているものは一本の丸太棒にすぎない。

私はかすかに頭を振る。邪念を振りはらって、意気込みも新たに丸太棒に立向う。それは習性となって、やがてごまかすことがうまくなったが、相手はごまかせても、

わが変ちき論は、あるいは少数者に理解され、支持される事があるかもしれない。けれどもわが感覚の方は、たとえば情人のうちに丸太棒を見て、しかも女性崇拜の第一人者だと言いはる如きは、女子には許されない。男子には信じられない。

へそまで美人だという説なら信じられるが、これは疑われるにきまっている。

だから私は、わが官能については、多く言わなかった。これからも言わないだろう。私は相撲も野球も見物しない。自動車も買わない。そして、それぞれに一家言あつて、これで警世の三題話を作れというなら、作れないではない。

けれども、一々ひと理屈あつて、のべつ論じられてはうるさかろう。それを言わないのが礼儀である。ばかりか、変装するのが礼儀だと私は信じている。

私はわが胸の底は白状しない。それが礼儀に反することが多いからである。打ち見たところ、私の五体は完備して、さして人と変つたところがない。私はそれを奇貨として、変装することを思ひつたのである。

それを私は、会社員に学んだ。

会社員は、朝目ざめたときから会社員である。すつくと立上つたとき、すでに社員である。よしんば、まだ全き会社員ではなくとも、五分で顔を洗い、五分で朝飯を食ひ、五分で——以下何ごととも五分で片づけているうちに、その精神と風采は、全き

て、叛旗<sup>はんき</sup>をひるがえす。

それを支離滅裂、あるいは千変万化とみる向きもあるうが、種あかしすれば、わが反対には一貫した筋道があるのである。

私は何でも巨大なもの、えらそうなもの、権威ありげなものなら疑うだけである。大勢が異口同音に言うことなら、胡乱<sup>うらん</sup>だとみるだけである。

大勢の言うことに、なびくのが当世である。世間である。それに反抗するのは禁物である。

天皇が人間になって以来、わが国にはタブーはなくなったといわれているが、なんの、いつの時代にもそれはあるのである。現代のタブーは、世論に抵抗することである。

私は「スピードきちがい」で、むやみに速力を早くするのは、科学の勝利ではないと断じた。さだめし読者は、これに一理を認めたであろう。

けれども賛成することを躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>して、やがて私を侮<sup>あなど</sup>るに至るのは、発言したのが私ひとりだからである。人は言論の是否より、それを言う人数の多寡<sup>たか</sup>に左右される。

それは百も承知だから、私はべつに気を悪くしない。かえって、わが発言の方を、変ちき論<sup>けんぜん</sup>と謙遜するが、言うまでもなく正論だと信じているのである。

がて、その視線に堪えかね、横町を見つけると、脱兎だつとのようにかけこむ。その後ろ姿を見てごらん。季節が丁度いまごろなら、煦々くくたる春日を受けて、ちらりと尻尾しっぽのさきが見えるから。

会社員となつて、事務所へかけつけ、夕方帰つて、やがて会社員のまなねむるのである。

彼らは変装に長じている。なが年変装してうまくなつて、ついに目下変装中である自覚さえ失うにいたつたのである。それがよきサラリーマンである。

私はそのまねをした。ひげを剃<sup>そ</sup>り、新聞を読み、その前夜、すでにばらばらに解体したわが精神を統一して、健全な精神と肉体の持主として、朝ごとに出発せんと試みたのである。

私は髪をくしけずり、つむじをととのえる。無数に分裂したつむじたちは、互いに旋回し、さか毛だつて、思い思いの方角に散乱している。それをまとめるのは、ひと骨である。

私は鏡に対座して、首尾よくまとめたときは莞爾<sup>かんじ</sup>とする。化け終つた狐狸<sup>こり</sup>の心があるような気分である。私は頭上に手を当てる。それを木の葉でちよいとかくし――、狐狸のたぐいは、頭に何ものかを頂いて化けるそうだ。

こうして私は、郊外から中央へ出勤するのである。もし読者が、私を街頭で見かけたら、そしてそれが一見紳士風であつたら、それはわが仮装を見たのである。

私は悠々と歩いている。けれども、それは衆人環視の大通りだけのことである。や

私はたしかに巴里にいた。その近郊メエゾン・ラフィットにもいた。

巴里にいたなら、巴里に明るはずだと誰しも思うだろう。ところが私は、ほとんど何も知らない。

知らなければ、怪しまれる。怪しまれて釈明すれば、さらに怪しまれる。面倒だから黙っている。

つかぬことを言うようだが、私は、いまだに高輪たかなわの泉岳寺を知らない。芝にいなから東京タワーにのぼらない。知っているのは町内のことだけである。

東京名物をよく知るの、お上りさんである。はとバスでぐるぐる回ると、話の種類になるところを、みんな見せてくれる。一度あれに乗って、東京見物しようかと、細君と相談したことがあったが、あいにく先方も東京生まれだったので、何を今さらと沙汰さたやみになった。

巴里名所をよく知るの、観光客である。巴里中を案内してくれる、馬車だかバスだかがあるはずである。

私がそれに乗らなかつたのは、誰も乗せてくれなかつたのと、ながくこの地で暮すはずだつたからである。

ながくそこに暮す人が、急いで見物するはずはない。死ぬまでエッフェル塔にのぼ

## 洋行

少年時代のなん年かを、私は巴里とその郊外ですごした、と今ごろ白状するには曰くがある。

私は西洋にいた話をするのを好まない。我々の周囲には、それを語る人が多すぎる。聞けばその話は、たいてい一知半解である。彼が語り終るのを待って、仲間入りして、こんどは私が一知半解を喋ってどうしよう。

私は遠慮して、何食わぬ顔で聞いているうちに、実はと言いきびれ、二十なん年たったのである。

海外に行くと、たいていの人は愛国者になるという。なん日間、なん年間なるのか知らないが、なるというレディメードの定評がある。私が西洋と西洋人に批判的なのはそのせいかと、早合点されるのを恐れて、いつそ言わぬに如かないと思ったことは事実である。

役者は、この地の騎手あがりだと、これまた教えてくれるのである。

当時のわが知識人の一部が、仏蘭西フランスに通じていたことは、信じられないくらいである。これじゃあ、行つた者の出る幕はない。

知らない人や土地に明るいののは、現代の不幸の一つである。龍安寺の石庭は見なくとも、新聞雑誌であんなに写真を示されては、すみずみまで承知しないわけにはいかない。実物は存外せまいとまで知らされて、さてその実物にお目にかかったら、どういふ感銘を受けたらいいのか。その感服の仕方までジャーナリズムは指南してくれる。それが知識人だけのことならまだいいが、この風はすでに一般に及んでいる。テレビの相撲通、拳闘けんとうファンはこのたぐいである。彼らは力士の出身地、経歴、得手、不得手のすべてをそらんじている。けれども、ついで国技館へ行つたことはないのである。

その人数は、一度でも実物を見たひとの、なん千なん万倍だか知れない。力士の品定めするのが、見物したことのないもの同志だとは、信じられない不思議だが、日本中がこの不思議に満ちているなら、それが当りまえで、互いに心丈夫みたいなものである。

実物を見たものは、まちがっているのは自分ではないかと思うほど、彼らの知識は

らない巴里人はいくらもいる。近所合壁のことしか知らないのが、その土地の人の本来だろう。

だから私は、ワグラムの近所と、ポルト・サンクルーかいわい界限と、メエゾン・ラフィットしか知らない。そこにしばらく住んだからだ。

そのかわり、今でも路地から路地をひろって歩き、たぶん道には迷わないだろう。私がわが半生の大事を言わなかったのは、天の邪鬼からばかりではない。幼稚ではあるが、すでにかたまりつつあったわが精神が、そこで痛手を蒙こうむったからである。それは追々語るとして、べつにわが国の文化人が、東京にいながら巴里に明るいのに驚いたからである。

たとえば、ワグラムというところは——と私が言うのではない、その東京の知識人が私に教えてくれるのである——凱旋門がいせんもんから発する放射状の並木通りの一つで、道の半ばにアンピールと称する、大きいばかりで二流の寄席よせがあつて、今は映画館になっている。そのあたりに、夜な夜な出没する売笑婦は、短時間ならいくらだと、その金額まであげて、ほぼ当っているのである。

たとえば、メエゾン・ラフィットは、巴里近郊三十分の競馬場として知られた所で、ルネ・クレール作「ル・ミリオン」という映画の主人公、ルネ・ルフェーブルという

行くときまったら、彼は友人知己に吹聴ふいちようして歩いた。八方へ電話をかけ、親しいものは訪ねて、後事を託した。

託された相手はぼかんとしている。第一、託されるような後事なんかないのである。はじめは招かれて渡航するのを、自慢しに來たのかと疑ったが、そうではないらしい。せめて半年か一年留守にするのかと聞いてみたら、わずか一ヶ月だという。なんだという顔を、皆したらしい。

そんな顔を見て、この一大事が分つてもらえないのが心外で、彼は出発の直前まで歩き回っていた。

飛行機なら楽だろうというけれど、羽田だけはいいが、あとは心配である。乗りかえといつても、知らぬ他国で乗りかえるのである。無数の飛行機が離着陸して、自分が乗るべき飛行機を発見するのがひと骨である。アナウンスはあるが、学校で習った外国語が、まったく役にたたないことはご承知の通りである。

たしかにこれはコペンハーゲンに行くと分つていても、なお確かめなければ不安である。聞いてもむろん要領を得ない。迷いは深くなるばかりである。

私は飛行機でデンマークへ行つたことがないから、よくは知らないが、たぶん、こんなことだろうと察するのである。

詳細をきわめている。

男女の仲に関しては、ヴァン・デ・ヴェルデとその亜流がある。四、五冊も読破すれば、女を知らずに女に通曉つうぎょうすることができる。どこを押せばどんな音を発するか、人体の機微について、そこにはこまごまと書いてある。

彼らはほとんど好奇心をもたない。実物から得るところは何もないと思うにいたったようだ。それでなければ、たったいま相撲見物から帰ったものに、相撲の講釈をするはずがない。ワグラムの地理を教えてくれるはずがない。

海外に行くことを、洋行といったのは、明治大正の昔である。今はこの言葉はすたった。たまたま使う人があると、笑われるくらいである。

昔は船で、一ヶ月もかかって行つたが、今は飛行機で行く。往来するだけなら、一週間でたまる。海外へ行くと言っても、誰も珍しがってはくれない。稀まれれに驚いてくれる人があつても、お世辞である。

どちらへ？ 一寸巴里へ——といった問答があつてもおかしくないと、行かない人は思っているが、行く人はどうして平気ではいられない。

私は先日、見ていて気の毒に思った。もう若くないその文化人は、さる団体に招かれて、一人巴里を経て北欧に行くときまつて興奮していた。

## ニユーリック

昭和二十三年の春であつた。はじめてロングスカートを見た。郊外電車のなかから、望見したのである。まだ流行しはじめたばかりで、一般にその存在さえ知られていなかった頃である。

その婦人は胸をはり、蹴<sup>け</sup>るような裾<sup>すそ</sup>さばきで、さつ、さつ、と歩いていた。おや、と私は目をみはつた。まさかスカートだとは思わなかつた。いくら蹴あげても、すぐまつわり着くそのなよなよとした布地は、あるいは腰巻ではあるまいかと疑つて、たちまちその馬鹿<sup>ばか</sup>らしさに気がついた。同時に、ははあこれがニユーリックか、と合点した。新聞で見た記憶がよみがえつてきたのである。

婦人は電車と同じ方向に進んだ。彼女がその前を通過した商店からは、中年の男女がばらばらととび出した。むかし飛行機が珍しかったころ、爆音をきいてまりのようにとびだした、子供と同じ勢いである。人々の目には好奇の色が見えた。あきらかに

一ヶ月たって、彼は無事東京へ帰った。東京が旧のままであることが、彼にはいいそげんであった。

しばらく彼は、人ごとに海外の見聞を語った。北欧の白夜は、彼にとっては初めての経験だった。聞かされる方にとっては、百も承知の知識だった。だから、耳を傾けるふりをして、ほとんど聞いてはいなかった。それに気がついて彼は語ることをやめた。

私はその場に居合わせて、彼の話を聞いたことがある。話し手の物語もオリジナルではなかったが、聞き手も好奇心をもっていなかった。

洋行という言葉はすたって久しいが、その事實はまだある。当人の心労と経験は、明治大正さながらで、変わったのは聞く者がなくなったことだけである。

それは何も今はじまったことではない。弱年の私が感づいて、やがて沈黙した経緯は、ほぼこれに似ていた。

彼女たちは傍らに穴のあくほどみつめている男がいても、眼中にないもののように振舞う。そこに一人物が存在していることさえ気がつかないように振舞う。

この視線はしつこすぎる、ひよつとしたら、ほつぺたにご飯つぶでもついているからではないか、自分の衣裳いしやうがへんだからではないか、と不安にかられるものはない。言うまでもない。彼女たちは視線はよく感じているのである。前後左右からのそれを全身で受けとめ、そして得意なのである。快感を覚えているのである。たぶん美人は怒るであろう、匹夫匹婦の視線の如きごと、うるさいばかりで享樂きやうらくしたおぼえはない、と。

しかし彼女だって同じ階級の男女の、驚嘆のまじった注目なら、うれしくないことはあるまい。それなら全く同じではないか。女は出前持ちの若者に見られてさえ、うれしいものですと、白状した婦人がある。美人はそれに慣れっこになって、一々うれしがってもいられないから忘れたのであろうが、それなら恩知らずというべきだ。一たび全く無視された時の無念を思いだしてみるがいい。やっぱり快感を覚え、ただそれに慣れただけではないか。

そ知らぬふりを装よそおって巧妙を極めるのは、婦人天賦てんぶの才である。彼女たちは昂然と振舞うことが、男どもを引きつけるということさえ承知している。美人が権高いのは

非難の色が見えた。隣家の女房と顔見合わせ、たぶんあきれたものだ、とでも言いあってゐるのだらう、その様子が見えた。電車が速力を増したので、それからさきは見失った。

以前は、モードあるいはファッションといった。当時はニュールックといった。その是非は論じつくされた。たとえば、このスカートはわが国の婦人に似合わない。彼女たちの足は短い、しかも曲つてゐる。布地が余分に要りすぎる、物資豊富なアメリカでこそよけれ、わが国では場所錯誤だ。まずこんな非難である。

どんな流行も、はじめは非難された。だが非難した者が、やがては流行に屈することとを、最もよく知る者は婦人である。だから物見高い群集のなかを、ぶしつけな視線を物ともせず、彼女たちは昂然こうぜんと歩く。

はじめて洋装した婦人もこの非難を受けた。そのころは大根のような足、と嘲あざけられたそうだ。最も早くパーマメントをかけた婦人も、執拗しつように罵倒ばとうされた。

彼女たちは先覚者なのだらうか。それを自任してゐるのだらうか。私はまじまじと見るのである。彼女たちの表情に不安のかけはないか、臆おくした色はないか、とうかがつて見るのである。遺憾ながら認められない。

どんなぶしつけな視線も彼女たちには不安を与えない。傍若無人という言葉がある。

弱年の私は呆然<sup>ぼうぜん</sup>とした。この婦人でさえ男に言いよられる資格あるもの、すなわち美人の一種だと信じている。してみれば今、私が惻隱<sup>そくいん</sup>の情から言葉をかけたのも、言い寄ったものと思うにちがいない。それに満足して、やがては他人に言いふらすにちがいない。これ或<sup>ある</sup>いは不名譽というものではあるまいか。私は恐れて彼女と口をきかなくなったが、それ以来、この世に美人でない女があらうかと、疑うようになったのである。

すべて婦人は、自分を美人の一種だと思っている。すくなくともその一変種<sup>へんしゆ</sup>だと思つてゐる。私はそれを咎<sup>とが</sup>めてゐるのではない。それに限ると真面目<sup>まじめ</sup>に考へてゐるのである。

汝<sup>なんじ</sup>の顔は穴だらけだと指摘したつて無駄である。彼女はその穴を認めない。色の白いことしか自認しない。足が短い、しかも曲折してゐる、ロングスカートは穿<sup>は</sup>かぬがよいと、世話をやいたつてだめである。足が短いのは日本人全部ではないか。短いかも知れない。だがこの美貌を見るがいい。私の女友達はみな内心嫉妬<sup>しつと</sup>してゐる。知る限りの男で私に魅せられぬ者はない。この目をほめない者はない。鼻を、手を、胸を、以下全身から何らかの美点をあげ、それが欠点をおぎなつて余りあると主張する。口でこそ言わないが腹のなかで信じてゐる。

魅力である。これを征服しようと男たちは勇みたつ。あれは美人だが鼻にかけている、つんけんしているから嫌いだとかげ口きく男は多い。彼らはこの美人を征服する資格のないことを自ら認め、しかもその劣等感をごまかすために、相手を非難してわずかに慰めるものだ。これは美人の望むところで、まず資格を欠く者を自然に圏外に去らせ、競争者を選抜する。こうして厳選された男は、容姿、体力、資力の、何らかの点で一流である。彼女はこの男たちを角逐させ、じらせ、自在に翻弄<sup>ほんろう</sup>して生き甲斐<sup>がい</sup>を感じるのである。

よしんば彼女が、美人でなくとも同じことだ。だが、そもそも美人でない女というものが、この世に存在するか、私はかねがね疑っている。

ニキビのあとであろうか、まさか天然痘<sup>てんねんとう</sup>ではあるまい。色は白いが、顔じゅう無数に穴があいた女があった。すでに妙齡ではない。ほかに全く魅力はない。

バタパンの裏だとあだ名されていた。あの穴を埋めつくすには化粧品では叶<sup>かな</sup>うまい、チウインガムでもぬりこめて、その上から化粧すべきだといわれていた。笑いごとではない。婦人にして生涯<sup>しょうがい</sup>かくの如き面相を持続しなければならぬ痛恨事に、私はひそかに同情した。人は彼女を女として扱わない。私は時々言葉をかけた。そして彼女からしばしば男に誘惑された体験の告白を聞かされるに及んで驚愕<sup>きやうがく</sup>した。

人はなん千年來これをくりかえした。今後もくりかえして倦まないだろう。デコレが初めて出現した昔、ヨーロッパ人は仰天し、あざ笑ひ、指弾した。今は笑う方が怪しまれる。デコレも數量を以て社交界を制したのである。十年來わが国の洋装がおかしく見えなくなつたのも、着用する婦人の數が増えたためにすぎない。本質的な滑稽の量が減つたためではない。背が低く足が曲つてゐるのが事實なら、似合わないのはニュールックばかりではなからう。ショートスカートだつて似合うはずがない。着物だつてだめだろう。大丈夫だと思つてゐるのは、世界中で着物を着るのが日本人だけだからだ。洋装して立派な西洋人なら、着物を着こなせば日本人より立派にきまつてゐる。着物なら短い足をごまかせると思ふのも、人を甘くみた考えだ。婦人の尻は帶のすぐ下にあると、うかつに思ひこんでゐる男子がある。ところが、坐せる婦人が立ち去る後姿を見れば、あるべきところに尻がない。帶のずっと下で躍動してゐる。好色な男子の炯眼がこれを見逃すはずがない。そして男子は悉く好色ではないか。

洋装が似合わないのは承知だが、実生活に便利だから普及は止むを得ないという。果してそうか。洋装がわが国の氣候風土に最も適したものとは思われない。一枚の靴下は寒氣を防がない。事務室のなかで彼女たちの足は凍え、スネは骨を中軸にしてアイスクャンデーのように固く氷る。しかも男たちはこの服裝を改良してやろうとはし

この信念あればこそ、婦人は面をあげて歩き得るのである。かくて二流の美人は二流の男に、三流の美人は三流の男に圍繞いりやうされ、一流の美人の縮図のような恋の遊戲に耽かへり得る。

誤解するのは婦人ばかりではない。男子がこれにわをかけた存在であることは、言うまでもない。自己の心身を反省して、その欠点を自覚することが、人間としての美德だといわれているがうそである。すくなくとも人はそれに魅せられない。欠点はあつてもそれを卑下せず、むしろ自覚せず傲然ごうぜんたる者にかへつて長所を発見する。

数量をもつて全国を蓋おおえば、滑稽こっけいもつには滑稽でなくなる。アメリカでも長いスカートははじめ非難されたという。やはり布地が要りすぎたからである。だが忽たちまち全盛を極め、短いスカートの方が、恥ずべき滑稽なものになつてしまった。布地は間にあつたものとみえる。

わが国を同じスカートが風靡ふうびしそこねたのは、それが似合わないと日本婦人が自覚したためではない。生地がアメリカほど無かつたからである。お金が無かつたからである。焼けあとにこのスカートは場所錯誤だということとは真実であらう。だが、流行は本来真実を蓋うものだ。生地と金さえあれば、廢墟はいきよに泥棒が横行する東京でも、婦人は悉ことごとく裾を蹴つて歩いただらう。短いスカートこそ笑いものになつただらう。

グスカートを思いだしたのである。隠蔽<sup>いんぺい</sup>すること、また男子を挑発すると気づいたのである。むかし、衣裳の裾からこぼれる脛<sup>はざ</sup>に、恍惚<sup>こうこつ</sup>として転落した仙人があつたという。隠蔽か丸出しか、趣向はこの二つしかないのか。さるまねも元祖もない、両者はともに笑止である。

ニールックと婦人を、私はあざ笑っているのではない。むしろ降参しているのである。男子は婦人をひそかに「女類」などと称し、蔑視<sup>べつし</sup>または恐怖しているようだが、両者にさしたる相違はない。自己の欠陥をちつとも自覚せず、傍若無人に振舞つて、あるいは産をなし、あるいは出世し、富豪や大臣になるのが一流の男子である。

男子は婦人と異つて、色恋のほかは、政治や思想に熱中する特色があるという。だが斬奸<sup>ざんかん</sup>状を携えて、池田屋へ斬込<sup>きりこ</sup>んだ維新の志士も、現代に生まれたらアメリカ映画に熱中したろう。共産主義に傾倒したろう。

婦人の衣裳や髪型ばかりがモードではない。政治も風俗、思想も風俗、この世の中には風俗以外の何物もないと、私が言つても信じないだろう。「ボヴァリー夫人」の作者が言っている。フロベールは風俗を蔑視しながら、風俗以外のこの世の實在を信じなかった。性懲り<sup>しょうご</sup>もなく、今年のモードの是非を論じて倦まない楽天的な町の批評家とくらべれば、悲痛な精神の持主であつた。この精神は人を絶望に導く。だから排

ない。第一その才能がない。西洋に手本がない。

流行は必ずしも実生活の便宜から生じないと知るべきである。婦人はそれが流行とあらば、いかなる寒気も堪えるものだ。いかなる滑稽も忍ぶものだ。

かつてのニールックに背中を丸出しにした海水衣かいすいぎがあった。乳の小さい婦人は、とかく水衣がずっこけて、胸が露出して困っていた。それを整えるのに忙殺され、おちおち遊戯することもならず、大まじめに周章していた。この水衣も日本人が模倣するから笑止で、乳の巨大な西洋婦人なら立派だと、とやかく論じても始まらない。西洋婦人だって滑稽なのである。そもそも何の目的あって、背を丸出しにするのか。一人でも多くの男子を悩殺したいからではないか。その本能を、商業主義に乗ぜられたにすぎないのではないか。

モードは資本主義の好餌こうじである。商人は背を露出することを工夫して、ひと儲しゅけしたあげく、尻に達して行詰った。乳は西洋婦人の恥部ちぶだそうだ。窮してパンツと乳あてだけの水衣を売出し、海岸で女たちに腹部の美をきそわせる。それを日本婦人がまねするという仕儀に及ぶ。その時へその始末はどうするか、それがデザイナーの腕の見せどころだというのか。まねが笑止で元祖が立派だとは聞えない話だ。

商業主義の露出症は、恥部にまで迫って工夫が尽きた。一転して昔にかえり、ロン

## あとがき

「日常茶飯事」は、「室内」に連載した短文に、旧作の二、三を加えたものである。はじめ毎月四、五枚、次いで十枚ずつ書いた。長短不揃いなものは、埋草として書いたためである。

「室内」はインテリアの専門雑誌で、私はその経営者である。由来、雑誌の経営者が、巻末に書く埋草は、修身齊家<sup>せいけ</sup>を旨とする。古くは野間清治、近くは石川武美両氏に模範がある。

ところが、わが作文はモラルでない。世のため人のためにちつともならない。その上、当人は遠慮して書いているつもりなのに、よそ目には我がまま一ぱいに見える。これで世間が通るかしらん、あるいは売れるかしらんと、わが編集部は心配して、一々カットをいれ、またかねて雑誌の鼻<sup>ひいき</sup>肩だと推せられる諸家に読後感を請うた。

同情あふれる推輓<sup>すいばん</sup>を得て、私はいま感謝の言葉に窮している。

「室内」はデザインと工作の分野では、すでに一流のジャーナリズムである。けれども、専門雑誌のことだから、ご存知ないかたも多いはずである。たとえ埋草にもせよ、

斥すべきである。

この世になお生き残りたいと欲するなら、ニールックばかりではない、あらゆる風俗に抵抗してはならない。おかしいと思つてはならない。デコルテを滑稽だといまだに思うのは、たぶん思う方が不健全なのであらう、だから私は改めたのである。髪型のニールックであらう、俗にドーナツツというのであらう、筒の如きまげ（？）を頭上に頂いた婦人を見ても、おかしくてたまらぬという不屈な性根を改めたのである。むしろこの婦人のような先覚者を、恋人にしたいと勇みたつように、我とわが心身を鞭撻べんたつすることに改めたのである。

## 解 説

鹿 島 茂

説

本書の元本が出たのが一九六二年、著者が亡くなられたのが昨二〇〇二年。その間、じつに四十年もの年月が経過している。

本書を手にとって読みはじめた山本夏彦の読者は、この事実<sup>な</sup>に二つの点で驚くにちがいない。

一つは、山本夏彦は四十年前から死の直前まで全然変わらなかった、というよりも、まったく同じだったということ。つまり、本書は、絶筆として出版された二つのエッセイ集に書かれていることと、基本的には寸分違<sup>たが</sup>わぬことを言っているのだ。

もう一つは、それにもかかわらず、本書は、山本夏彦のエッセイを読み慣れた読者にとっても新しい感じがするということ。

この二つの絶対に矛盾する印象はどこから来ているのだろうか？

それは、山本夏彦の文章に漂う「既視感覚」ならぬ「未視感覚」が原因なのではな

解

こんな変ちき論を許す雑誌がまだあるかと、万一珍重してくれる読者があるなら、書<sup>しょ</sup>肆<sup>し</sup>でその最近号をござん頂ければ有難いと云<sup>しか</sup>爾<sup>いう</sup>。昭和三十七年夏 著者。

ける動線の儉約の問題に付いて、これを「けちのいろいろ」の一つに数え、そうした功利主義とは逆のむだの効用を説いているのだが、しかし、その先の展開を追って行くと、なぜか、論旨はその反対になってくる。なんのことかといえ、文章は、流線形や動線などの物質上のけち（創意工夫）を難じる一方、精神上のけち（創意工夫）を顕揚する（正確にはその不可能性を示す）方向へと向かうのだ。

「現代人がメカニズムを信じ、これを崇拝するにいたったのは、それが財産として残せるためである。ひとたび電燈でんとうを発明すれば、子孫は行燈あんどんの昔にもどることがないからである。

一方、精神上の遺産は、子孫に残せない。老莊儒仏ヤソにいたるまで、聖賢は人類を精神の内奥ないおくから救おうとした。なん千年来試みて、成功しなかったのは、五十にして天命を知った賢人が死んでしまえば、もとの木阿弥もくあみ、その子は初めからやり直さなければならぬ。やり直して五十になっても、はたして親父の域に達するかどうかはおぼつかない。

すなわち、精神上の財産は残せないのである」

こうしたペシミスティックな言葉とは裏腹に、実際には山本夏彦はこの甲斐かいなき努力にこだわった。では、山本夏彦が、あえて不可能を承知で残そうとした精神上的の財

いだろうか？「既視感覚」（デジャ・ヴュ）というのが、まだそれを見たことがないのを知っているのに「これはどこかで見たことがあるぞ」と感じる感覚であるとすれば、私がいま「未視感覚」と名付けたものは、それと反対の感覚、すなわち、これはすでに見たことがあると知っているのに、「こんなものはまだ見たことがないぞ」と思ってしまう感覚である。

では、この「未視感覚」はどうやって生まれるのか？

それを解く第一の鍵が、この『日常茶飯事』には隠されている。

「日記のすすめ」というエッセイの次の一節。

「故人横光利一は、弟子たちに、随筆は書くなといましめたという。せつかく小説になるものを随筆にしてしまつては損である。小説家たるもの、随筆なんか書いてはいけない、書くなら小説の余りか、かすで書けと教えたという。

『けちのいろいろ』という文章を、そのうち私は、日記のなかに書こうと思う。横光のけちはその一つで、作者として徹底しているとも言えようし、創造力の貧困とも言えよう」

この「けちのいろいろ」というアイディアについては、「自ろう車」というエッセイでさつそく使われている。すなわち、当時はやりの流線型やモダン・リビングにお

女の愛の言葉もすべて似たようなものだからレコード化は十分可能だと説いて、  
結論する。

「けれどもそれ（犬の鳴き声）は五十種を出ません。人類は、それを犬が人より劣つた証拠だとみなしてきましたが、我々の言論も、むろん五十以内に整理できます。犬ではすでに整理され、我々ではまだされていないからといって、それを高等だと思ふのは身蟲<sup>みびいき</sup>にすぎません」

この「言論五十種限度説」は、山本夏彦の持論、というよりも究極の認識だったらしく、「インテリ」というエッセイでも、「五十語限度説」として使われている。

「いつの時代でも、この五十語さえマスターしていれば、脳ミソはいらないのである。しかも人はなお自分の脳ミソの主人公は、ほかならぬ自分だと思ひこんでいる。自分で考え、自分で発言していると思つてゐるが、とてもこの五十語を出ることはできない。生まれて、喋<sup>しゃべ</sup>つて、そして死ぬのである。」

今までもそうだった。これから、そうであろう」

ところで、われわれが注目すべきは、この「言論五十種限度説」は、山本夏彦の認識であると同時に方法でもあったということである。すなわち、彼は、人間の思想・認識、さらには言語ですら、ギリギリにまで凝縮していけば、五十種類にまでなると

産（創意工夫＝けち）とはなんなのか？

それは文字通り、觀念（イデー）をけちること、無限に流通しているかに見える觀念を共通項で次々にくくっていつて、その数を減じ、必要最低限の数にまで限定してみせることである。a bとb aはまったく正反対に見えても因数は同じ、a b cとd e fは因数のアルファベットは異なっているもその数は同じというように、この世のもろもろの事象・現象・觀念・思想を同一のものとして裁断することである。

こうした山本夏彦一流の「精神上のけち」が色濃く出ているのが、倒産しかけたレコード会社に社長として乗り込んで、いかに国民全員にレコードを一枚ずつ売るか、その方法について一席ぶつという仮定の「就任演説」の次の言葉である。

「言論というものは、人が信じているほど変化あるものではありません。（中略）

ついこの間まで、我々は醜（みにく）の御楯（みたて）であり、撃ちてしまふと言っていたものです。

大臣の演説も、隣組長の演説も、寸分たがわなかったことはご記憶でしょう。（中略）その冗漫を去れば、説教のすべては一に帰します。今や民主主義、やがて共產主義の天下だといわれています。両陣営の二大紋切型を、ダイジェストしてレコード化するのが、社員諸君のこれからの仕事であります」

山本夏彦「社長」は、さらに論を進め、同じなのはイデオロギーだけではなく、男

続けた山本夏彦が、その原型たる五十種類の思想をはつきりと示している唯一ゆい いっの本なのである。

(平成十五年六月、仏文学者)

したばかりか、表現においても、この五十種類を順列・組み合わせするだけで十分と考えたのである。

山本夏彦のエッセイで言われていることは基本的に、この『日常茶飯事』から始まって遺作まで全部同じという我々の第一の印象は、まさにここから来ているのである。そればかりではない。先に指摘した「それにもかかわらず、本書は、山本夏彦のエッセイを読み慣れた読者にとっても新しい感じがする」という第二の印象も、この「言論五十種限度説」によっている。つまり、山本夏彦のエッセイは、それが五十以上の思想・認識は述べていないと分かっている、その順列・組み合わせが無限だから、常に新しい感じがするのである。

左右両派のイデオロギーや男女の口説き文句は、一見どれほど新しく「未視」のように見えても、五十種類の言論をさして工夫せずにそのまま使っているから、われわれは、「はてこれはどこかで見たことがあるぞ」という「既視感覚」に襲われる。

反対に、山本夏彦のエッセイは、初めから「既視」で五十種類のどれかとわかっていながら、いざ読むと、「はてこんなものは一度も読んだことがないぞ」という「未視感覚」を感じてしまうのである。

本書は、以後四十年間にわたって、無限のバリエーションで同じ思想・認識を伝え

山本夏彦著

世間知らずの高枕

浮世を觀察して幾星霜、鋭い切り口で世事万般に迫る。よくぞいつてくれました。キレがあつてコクがある辛口コラム一五〇編を収録。

山本夏彦著

オーイどこ行くの

—夏彦の写真コラム—

日本をダメにしたのは誰か。そりゃ大蔵省、ゼネコン、日教組に文部省。巷は日本語も怪しい親子ばかりになった。名物コラム絶好調。

向田邦子著

寺内貫太郎一家

著者・向田邦子の父親をモデルに、口下手で怒りっぱはいくせに涙もろい愛すべき日本のへお父さんとその家族を描く処女長編小説。

向田邦子著

思い出トランプ

日常生活の中で、誰もがもっている狡さや弱さ、うしろめたさを人間を愛しむ眼で巧みに捉えた、直木賞受賞作など連作13編を収録。

向田邦子著

阿修羅のごとく

未亡人の長女、夫の浮気に悩む次女、オールドミスの三女、ボクサーと同棲中の四女。四人姉妹が織りなす、哀しくも愛すべき物語。

向田邦子著

男どき女どき

どんな平凡な人生にも、心さわぐ時がある。その一瞬の輝きを描く最後の小説四編に、珠玉のエッセイを加えたラスト・メッセージ集。

この作品は昭和三十七年工作社より刊行され、  
同五十三年四月中公文庫に収録された。

なかにし礼著

てるてる坊主の

照子さん

(上・中・下)

内田康夫著

姫島殺人事件

丸山健二著

虹よ、冒瀆の虹よ

(上・下)

梶尾真治著

黄泉びと知らず

小林信彦著

おかしな男 渥美清

夏樹静子著

腰痛放浪記

椅子がこわい

戦後復興期の大阪を舞台に、夢を抱いて奮闘する両親と四姉妹の姿を描く、涙と笑いと感動の新一「国民的ホームコメディ」。

夏祭りの夜に流れ着いた、腐りかけの溺死体——。伝説に彩られた九州の小島で潜行する悪意に満ちた企みに、浅見光彦が立ち向かう。

稀代の極道・銀次は潜伏先で罪業の重さに潰されかけ、虹の刺青を背負うことで悪を復活させるが……罪と悪を極限の想像力で描く。

もう一度あの子に逢えるなら、どんなことでもする。感動再び。原作でも映画でも描かれなかった、もう一つの「黄泉がえり」の物語。

凄みと、変な愛敬と。日本人のファンタジー「寅さん」に殉じた男の若き日の素顔、芸の本質を浮かび上がらせる、実感的喜劇人伝。

苦しみ抜き、死までを考えた闘病の果ての信じられない劇的な結末。3年越しの腰痛は、指一本触れられずに完治した。感動の闘病記。

向田邦子著

あ・うん

あ・うんの狒犬のように離れない男の友情と妻の秘めたる色香。昭和10年代の愛しい日本人像を浮彫りにする著者最後のTVドラマ。

久世光彦著

一九三四年冬―乱歩

山本周五郎賞受賞

乱歩四十歳の冬、謎の空白の時……濃密なエロティシズムに溢れた短編「梶子姫」を織り込み、昭和初期の時代の匂いをリアルに描く。

久世光彦著

謎の母

母にすぎるような目で「私」を見つめたあの人は、玉川上水に女と身を投げた……。十五歳の少女が物語る「無頼派の旗手」の死まで。

黒柳徹子著

トットのマイ・フレンズ

愛と勇気を与えたトットの大切な12人のお友達。ユル・プリンナーや向田邦子らのすばらしい人間性とトットの友愛を生き生きと描く。

黒柳徹子著

トットの欠落帖

自分だけの才能を見つけようとあらゆる事に努力挑戦したトットのレツテル「欠落人間」。いま噂の魅惑の欠落ぶりを自ら正しく伝える。

林真理子著

花探し

男に磨き上げられた愛人のプロ・舞衣子が求める新しい「男」とは。一流レストラン、秘密の館、ホテルで繰り広げられる官能と欲望の宴。

岩合光昭著

ニッポンの猫

谷中の墓地、東大寺の二月堂、ニッポンの猫は古い町によく似合います。何回見ても見飽きないその「へかわいい」を、たっぷりどうぞ。

畠山清行著  
保阪正康編

秘録 陸軍中野学校

日本諜報の原点がここにある——昭和十三年、秘密裏に誕生した工作員養成機関の実態とは。その全貌と情報戦の真実に迫った傑作実録。

桑原崇寿著

盲導犬チャンピイ

——日本で最初に  
ヒトの眼になった犬——

日本でシェパード犬が珍しかった時代。体を張って盲導犬第1号を育てた男と、試練を乗り越えた犬がいた。愛と苦難の育成物語。

L・カルカテラ  
田口俊樹訳

ギャングスタ―

(上・下)

『スリーパイズ』の著者が奇跡の復活！二十世紀初頭、炎上する密航船で生まれた主人公が生き抜いた非情なニューヨーク裏社会。

K・ジョージ  
高橋恭美子訳

誘拐工場

養子幹旋を背景とした誘拐。そして、事件にかかわった男女の切なすぎる恋——。未体験のスリルが待ち受ける、サスペンスの逸品！

T・フエンリ  
川副智子訳

壁のなかで眠る男

(タルト・ノワール)シリーズ

21年前の白骨死体。元ストリッパーのコラムニスト、マールゴが殺人犯を追う。酸いも甘いもかみわけた熟女45歳のパワーが炸裂！

山本夏彦著

日常茶飯事

小沢昭一著  
大倉徹也著

小沢昭一の流行歌・昭和のころ

吉川 潮著

浮かれ三亀松

紅山雪夫著

ヨーロッパ

ものしり紀行

—《建築・美術工芸》編—

素樹文生著

クミコハウス

師岡幸夫著

神田鶴八鮓ばなし

40年もの年月を経てなお、全く変わらぬ痛快さ、新鮮さ。若くして、すでに名人だった故・山本夏彦の幻の処女コラム集。待望の復刊。

藤山一郎から美空ひばりまで、小沢昭一が心に響いた流行歌を名調子で回顧する。激動の昭和が懐かしのメロディーとともに蘇る一冊。

浮名を流した芸者は、星の数。その金の遣いっぷりも、ハンパじゃない。とびきり粋でオトナな芸で、寄席に君臨した柳家三亀松の一代記。

ゴシックは「野蛮人様式」？ バロックとは「悪趣味」？ 旅の楽しみである建物見学を満喫し、お土産事情にも詳しくなる欧州講座。

寝台バスに揺られ、空路を乗り継ぎ、西へ西へ——。中国からインドへと僕のさすらいは続く。処女作『上海の西、デリーの東』外伝。

若者はこうして「名親方」になった——。知る人ぞ知る名店「鶴八」の親方が半生を振り返る、江戸っ子の心意気溢れるエッセイ。

——新潮文庫——

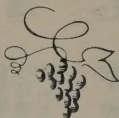
山本夏彦の本

世間知らずの高枕  
オーイどこ行くの  
—夏彦の写真コラム—  
日常茶飯事

にち じょう さ はん し  
日常茶飯事

新潮文庫

や - 37 - 6



平成十五年八月一日発行

著者

山<sup>やま</sup>本<sup>もと</sup>夏<sup>なつ</sup>彦<sup>ひこ</sup>

発行者

佐藤隆信

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二一八七一  
東京都新宿区矢来町七一  
編集部(〇三)三二六六―五四四〇  
電話 読者係(〇三)三二六六―五一―

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・三晃印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Igo Yamamoto 1978 Printed in Japan

ISBN4-10-135016-7 C0195



97841013501

特 130



1920195004388

「人間の見物人」「死ぬの大好き」などの名言で、数多のファンを獲得した山本夏彦の処女コラム集。43年前に雑誌「室内」ではじまり、死の直前まで続いた名物連載の最初の一冊。なのに、今読んでもまったく変わらず、痛烈かつ新鮮。すでにして名人だった技とキレを存分に堪能できる。「この国」「迎合」「わが女性崇拜」など、永遠のテーマとも出会える。夏彦ファンならずとも必読の書。

定価：本体438円(税別)

ISBN4-10-135016-7



C0195 ¥438E

